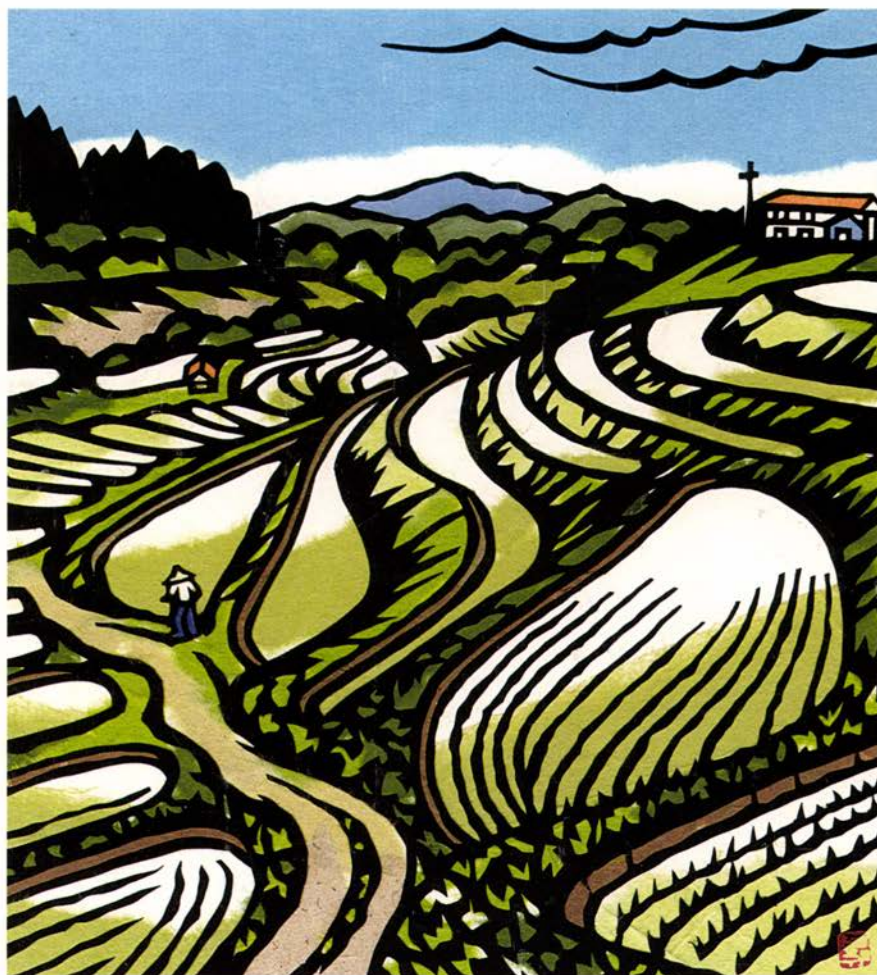


川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十五年五月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷一〇三二号



日川協加盟

No.1032

第2回 春の川柳塔まつり誌上大会

五月号

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。

★個人 一口 1/9頁 二、〇〇〇円

1/6頁 三、〇〇〇円

（巻末の台紙に原稿を貼付または記入してお申込み下さい。）

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六、〇〇〇円

② 1/2頁 九、〇〇〇円

③ 2/3頁 一二、〇〇〇円

④ 1頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 五月二〇日

川柳塔社

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

月の子忌

小島 蘭 幸

君は日の子われは月の子顔上げよ
何だ何だと大きな月が昇りくる
新子 新子

新子さんが好きだった三宅一生さんのスプリング
コートを羽織って登場した長女まどかさんは、母新
子さんとの思い出をエピソードを交えながら淡々と
語られました。旅先でも、家庭でも常に手紙を書い
ておられたという新子さんに、私は書くことの大切
さを改めて教えていただいた気がしました。お話の
最後に母新子さんの作品の中で、特に好きな作品十
句を読み上げられました。その姿に私は在りし日の
新子さんを重ねていました。

時実新子月の子忌七回忌川柳大会は、「母新子を語
る」と題した安藤まどかさんのミニ講演から始まり
ました。会場の神戸オリエンタルホテルには、全国
各地から三〇〇名の新子さんを慕う美しい笑顔があ
りました。

受付では、この七回忌に合わせて発刊された安藤
まどかさんの「わが母時実新子―母からのラブレタ
ー」が飛ぶように売っていました。

披露は席題二題を含めて十題、入選句は特選を含
めて35句という厳しきでした。しかし私はこの厳し
さが、司会と選者、出席者との絶妙の間を生んだの
ではないかと思いました。ビーンと張りつめた空気
の中での披露は、選者と出席者の真剣勝負の時間な
のです。

私の前の席に座っておられた女性三人は実に披露
を、川柳をここから楽しんでおられました。ある
時はニコリと顔を見合わせ、またある時は大きく頷
き、そして大きな呼名、拍手……。その後姿はキラキ
ラと輝いていました。

懇親会は正に新子ワールドでした。新子さんの朗
読、ゆかりの作家、編集者のお話、ギター演奏等々、
美味しいお酒をいただきながらアツという間の二時
間でした。カーテンがパツと開くとそこにはメリケ
ンパークの美しい夜景がありました。夜景を見てい
ると、'87ベストセラーとなった「有夫恋」をドキド
キしながら読んでいた頃が、ふつと頭の中を過りま
した。素晴らしい一日に感謝!!

座右の句

人恋し人煩わし波の音

(栗)

私の句

沢山の過去が沸つふつする深夜

加門 萌子

川柳塔 五月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「千早赤阪の棚田」

■巻頭言 月の子忌

出雲神話あれこれ

川柳塔（同人吟）

自選集

温故知新

川柳塔の川柳讃歌^⑩

新川柳鑑賞^⑮

水煙抄

俳風柳多留——一篇研究⁹³

中島生々庵句抄

英語 de Senryu^⑮

愛染帖

檸檬抄「同じ」

江戸を楽しむ^⑤

一路集「息抜き」

小島 蘭 幸……(1)

竹治 ちかし……(2)

小島 蘭 幸選……(4)

温故知新……(46)

川柳塔の川柳讃歌……(49)

新川柳鑑賞……(50)

水煙抄……(51)

俳風柳多留……(52)

中島生々庵句抄……(76)

英語 de Senryu……(78)

愛染帖……(79)

檸檬抄「同じ」……(80)

江戸を楽しむ……(84)

一路集「息抜き」……(88)

出雲神話あれこれ

竹 治 ちかし

二〇一二年の昨年、出雲の国は古事記編纂一三〇〇年ということで盛り上がりを見せて、七月二十一日から十一月十一日までの長期間、出雲大社を主会場として「神話博しまね」を開催し、沢山のイベントをやり賑わいました。その影響もあって、私も出雲の地に移り住み四十余年、出雲神話の一つでも語れないといかないと、一念発起し「古事記、日本書紀、出雲国風土記など学校時代にもっと勉強しておけば良かった」と反省しながら、神話の講座を受けることにしました。その中で色々な事を学び知ることが出来ました。古事記、日本書紀の神話のうち三分の一が出雲地方を舞台としているという事も知りました。

地上世界の葦原の中つ国とあの世の黄泉国とはつながっていて、イザナギ、イザナミの物語で有名な、その入り口とされる黄泉比良坂という場所が、こんな身

一路集（「迫る」）……

山口高明選……（89）

追悼 長谷川呂万さんのこと……

井上森生選……（90）

初歩教室「厚い」……

岩佐タン吉……（91）

川柳塔鑑賞……

太田昭……（92）

水煙抄鑑賞……

北野哲男……（94）

民族の詩歌⁽¹²⁾……

居谷真理子……（96）

第二回 春の川柳塔まつり誌上大会……

三好専平……（97）

■エッセー 葉忌を迎えて……

内海幸生……（100）

せんりゅう飛行船⁽²⁹⁾……

新家完司……（121）

津軽発おもしろ景色⁽¹⁵⁾……

高瀬霜石……（122）

四月本社句会……

芳賀博子……（123）

句会燦燦……

各地柳壇（佳句地十選／岸本宏章・古久保和子）……（127）

五月各地句会案内……

五月各地句会案内……（128）

■新刊紹介「江戸川柳 おもしろ偉人伝」〇〇「小栗清吾著……

水野黒兎……（144）

柳界展望……

柳界展望……（145）

■編集後記（ひとこと／長井善純）……

朱夏・勝弘……（146）

座右の句

悲しさも梳く日もあつた母の櫛

（大雄）

私の句

眉間のシワやはり母似で同じ位置 岩崎和子

近な島根県の東出雲町に実在することも知りました。早速行ってみましたらさすがにおどろおどろしき場所、昼間であっても一人で行くことには躊躇させるような恐ろしい所でした。

大国主神の物語に登場する因幡のしろウサギは白黒の白ではなく、皮を剥がされ素っ裸になったウサギのことで、素人（しろうと）の素で、素ウサギと書いてしろウサギと呼ぶのだそうです。

国引きの話においても、島根半島を引いて来たは一度に引いたのではなく、四度に涉って四か所より引いて来たのだそうです。そしてそのことに關しても、島根半島の地層は学術的には中国山地の地層とは違い四国山地の地層と同じ新しい地層なのです。そんなことが古代に解っていて、このような物語が出来たのかと不思議でなりません。

知れば知る程、神話とは奥の深いものと知りました。出雲神話に疎かった私も少しずつではありますが勉強して、いつかは誰かに神々のふるさとを案内出来ればと思っています。



小島蘭幸選

樞原市 安土理恵

免許返上自前の脚に切り替える

見つけ合う刻を飾っている夕日

男はん寄ってくるなと言うてない

突然に出てこなくなる夫の名

襷ふかく潜らせてある名がひとつ

おひとり様しかと受け取りました 空

堺市 柿花和夫

ボス猿の身代り立てぬ潔さ

黒幕をブレーンと呼んでトップの座

素面では話せぬことが増えてきた

祭日に国旗を出すや怪しまれ

駆け引きが下手な男と旨い酒

コンビニがオアシスなんだ都市砂漠

弘前市 高瀬霜石

天下泰平一升瓶の底で寝る

金のある人は裏参道を行く

階段を登る踊り場まで登る

掛け算は危うい足し算でゆこう

エプロンが似合いパパからおじいちゃん

袈裟懸けに斬られる夢をたまに見る

松山市 古手川

街角のポストおまえもアナログ派

清流を覗くと僕の灰汁が浮く

原発への警告隕石の落下

暴走は恐い車も政治家も

人生もこうありたいと見るさくら

沙羅ちゃんに見えない羽根がきつとある

篠山市 酒井真由

桜散るときめきながら舞いながら

花の下 女はもたぬのどぼとけ

負けて勝つコツを覚えてきたようだ

父島の海よ水族館の鰻

特別な日がある愛が降ってくる

人と生まれて女は別の生きものに

光

大洲市 中居 善信

アベノミクスその内日本潰される

全身が痒い乾燥注意報

器からはみ出す個性だと思ふ

放置すると決めた田んぼの畔にたつ

千枚田安らぐ景色ではあるが

さくらさくら短い縁ではあつた

大阪市 谷口 義

一対一です春です桜です

忘れていたものが時々浮いてくる

母に似て父に似てまた母に似る

失礼のないように最後を迎えたい

どの街にも一軒はある結納屋

そうであれば風の魂だったのだ

京都市 高島 啓子

思い出は鮮明封筒は黄ばむ

塩もみでほぐす君の一本気

人それぞれ譲れぬところを持つている

負けん気を隠すフリルの多い服

こめかみのあたりで退屈に耐える

憑き物が落ちて一日家にいる

開花予報蕾にかかるブレッツシャー

ウィットにとんだジョークをデザートに

ひと色を足して一気に春がくる

大阪市 米澤 淑子

似て非なるダイヤモンドとガラス玉

神さまは同じ指紋を作らない

菜の花から生まれてきたか紋黄蝶

羽曳野市 三好 専平

あの岬のはてに死ぬべきところあり

大きい柚子の実をそつと撫でてみる

冬の夜が明けてきたころ 葱の白さ

そこらへんの石をあつめてお墓にしている

名も地位も捨てた人は美しい

山の上に山川の下に川

鳥取市 福西 茶子

傘になる覚悟はあるが頼られぬ

ユートピアとはこんなものかと隠居部屋

肝だめし一番先を行くわたし

道草ものれんも知らずもう七十

ご先祖は線香よりもワンカップ

とんがった顔では春は来てくれぬ

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

春の野に好きがいっぱい咲いている

この辺が峠行こうか戻ろうか

誰に見せんと手囲いで書く手紙

どこに置いても安心出来ぬ薬箱

お彼岸に生きてる華を思うなり

春の彩して携帯電話鳴っている

和歌山市 牛尾緑良

K点に私の夢が埋めてある
友来る黒梓のあるハガキにて
摩訶般若 心に溜まる懺悔録
本当に汗流してる舞台裏
CDが昭和の歌を繰り返す
秒針と震災記念日を数え

和歌山市 木本朱夏

春が来る前に涙は干しましょう
泣けるだけ泣いて引き出し空っぽに
枕干す たったひとりの身の証し
黒いドレスの似合う女になりたくて
割烹着が似合う 晩年が近い
ときどき消える男タバコの匂いして

河内長野市 山岡富美子

耳鳴りがして立ち止まる交差点
満開の薔薇も疲れているらしい
貧しさの記憶が消えぬ芋の蔓
自画像は油絵よりもパステル画
ぶらんこの揺れにまかせるロスタイム
駆け抜けた日々を影絵がなつかしむ

堺市 桑原道夫

親指を押える遊びすぐ飽きる
松毬を握るとたぎる血がありぬ
新しい靴を獣のように嗅ぐ

下敷を悲しませてはいけません
芝居通同士で食べる寄せ豆腐
筋肉を鍛えていけば菖蒲咲く

倉吉市 牧野芳光

チヨイ役がいつぱいあつて綱渡り
金にならぬ仕事飽きずにやっている
動輪を回すに酒が二合いる
ぬかるみを歩いて腰痛になった
ひもじくても優雅に空を舞っている
手の平を温めて幸せを受ける

枚方市 伊達郁夫

憧れた自由に不自由しています
押し花のままであなたを閉じ込める
自分との約束だけが守れない
騙されて上げると母の目が笑う
追伸に足した尻尾がよく跳ねる
私を斜めから見る私の目

藤井寺市 太田扶美代

忘れてあげよ水の流れる音がする
入学を待つばんばんの萱達
チヨコレート売場に立つて亡父の事
もつともつと話したかったお雛さま
春はいいもの頑張っているチューリップ
卒論に初恋書いていいですか

大阪市 小谷集一

平凡な日目を重ねて行く非凡
今に見ておれを座右の銘とする
煩惱の一つ一つがみな火種
インフレもデフレも総て向い風
変化球投げて心の裏を読む
微調整しながら生きて来た粘り

河内長野市 木見谷 孝代

同心円の中で違つた夢を持つ
白球を追つてストレス汗になる
冬眠から覚めてジャガイモ植えました
トンネルの中で五感を研ぎ澄ます
純粹を貰く人にある脆さ
純白がまだらに染まり輪になじむ

鳥取市 岸 本 宏 章

着服れを春一番に論される
祝入学校が義理を欠かさない
日記書く昨日のことが浮かばない
名選手いいライバルを持つている
読書離れサラ川だけが元氣いい
流されて流れて転居十五回

出雲市 竹 治 ちかし

満州で生まれて赤い陽は知らず
携帯が切れたところで縁も切れ
幸せも食わず嫌いをして飢える

疑似餌だと誘いにのつてから気付く
ウーロン茶飲んで陽気な群れに居る
ギア一つ落し足元確かめる

吹田市 山 本 希久子

春の道色よい返事くれました
わらびぜんまい春のコントを楽しまん
果たせない約束桜からさくら
おばあちゃんより検索の知恵袋
春財布笑つてばかりおれません
世代交替波ひたひたと寄せる居間

西宮市 山 本 義 子

飛び六方 タンチョウ鶴は冬に幕
猫あげます猫だつて文字読めるのに
川汚れ河童はいなくなつたとさ
駱駝には勤労賞をあげるべし
糸はる蜘蛛あなたは理科系なんです
人と会い海を忘れた熱帯魚

堺市 志 田 千 代

地球上の何人と出会えただろう
乗り越した駅で大きな虹を見た
バレンタイン母にも義理のチョコ届く
キミの夢みたよと言つてくれた人
入院の早起き癖が続いてる
タマちゃん小指甘噛みしてくれる

岸和田市 岩佐ダン吉

着飾った言葉淋しくなっている
甘かったそれでも僕を許したい
頑固という難敵と今対峙する
せめてもの見栄だ私は前を向く
一からの旅だ漲るものがある
七割は水のヒト科が何を言う

鳥取市 両川無限

着るパジャマ見せるネグリジェもっている
絵手紙に冬眠中と書いておく
スマートに見せるベルトの位置がある
泥臭い自分史を干す冬晴れ間
幸せな未来産着に包まれる
編みかけのセーター恋を見失なう

加西市 金川宣子

敵味方仕分けきつちりインプット
菜園に飲む野菜より噛む野菜
認知症の入口付近出入りする
また来てね言われて老母も嬉しがり
恍惚に阿吽の呼吸噛み合わず
同居する母を味方にマイホーム

京都市 柿本宏子

仏より料理で稼ぐ京の寺
掛け軸に解ったふりをする茶席
妻だけが上司になった無位無官

なよなよと草食系の生き上手
最初から鍵はかけない貯金箱
子も孫も一時夢は見せてくれ

大山市 金子美千代

義理チョコと言う勘違いされぬよう
若すぎる栄光後が辛かろう
免疫力上がった今日の大笑い
千人で世論調査と言われても
また涙あふれる鎮魂の祈り
被災者に励まされてるのは私

唐津市 山口高明

親鸞の浄土宗さえ枝分れ
離合集散我が身可愛ゆいだけのこと
結局は辺野古お札で埋め立てる
永代を頼んで子等を当てにせず
あなたにさ遇わねば私壊れた
才媛も子育てだけは泣かされる

鳥取市 奥谷彩子

ふるさとの原風景に父母姉妹
震度6にも父の柱は耐えそうだ
詠えの服は断捨離まぬかれる
生きざまのつぶやき拾い句集あむ
終焉まじか神に白紙の委任状
雑魚の意地時どき徒党組んでみる

米子市 吉田陽子

日ごと咲く花に告白止まらない

学びやは五人五色の風が吹き

ひたすら生きた道にひよっこり月が出る

二人三脚雪解けの田は忙がしい

亡母の折り目を大切にする訪問着

心象の絵にB29が飛んでいる

香芝市 大内朝子

友の訃の悲しみ包む春陽射し

恋猫を羨む腑甲斐無いわたし

忘却の力を借りて前を向く

菜の花の海を眺めている回顧

短命の母の命を生きる恩

浮きうきと春の魔法に酔うている

三田市 福田好文

攻めて来る正論だから手に負えぬ

道極めた人にだけ見るいい笑顔

なあ地球少しゆっくり廻らぬか

婆さんの茶室で孫がピアノ弾く

気配りが過ぎて回りが落ち着かぬ

丸い器に入ればみんな丸くなる

海南市 堂上泰女

早咲きの桜決心鈍らせる

エビローグでやつと聞いている愛のうた

身構えて出たヒツウチはお知り合い

感動の余韻テロップ終い迄

カタログはもう爽やかな初夏の風

祇王の境地ムンクになつて叫ばんか

和歌山市 柏原夕胡

かさぶたがあちこちにある心です

これで良かったのか咲いてきたけれど

その事に触れると割れる夫婦碗

爆発をしたら閻魔になる私

ぬいぐるみ抱いて安らぐ夜の底

閉ざしてさえいれば傷つかない心

堺市 大久保のん子

天性の素朴さを寄せつける

虚勢など張らず素顔で生きて行く

山積みの本に手垢の影もなし

どん底を這つたまある人間味

人間の驕り大きな付けがくる

さまざまな出会いも今はセピア色

鳥取市 有沢せつ子

晩学へ友のはげまし杖にする

美しい記念切手は友の文

ウインドーに注意をされている猫背

買う事もなくなつた服見て歩く

同年と思えぬ友の艶やかさ

どの部屋も四季に花咲くカレンダー

紀の川市 宇野幹子

日めくりを捲るたんびに退化する
一条の煙菩薩になつてゆく
身の内の鬼も流れをよんでいる
振り慣れた長い尻尾は切つておく
三猿になつて世間に浮いている
赤裸裸な心にさせた遍路笠

神戸市 山口美穂

バーゲンを覗くだけだと言つて出る
手のとどくところは物で溢れてる
探し物誰のせいでもないひとり
アイディアを探しにスパーまでちよつと
バス来てるでも小走りも止めました
紅ちよつとさしてよそ行き顔にする

東京都 まえで (近藤豊子改め) とよこ

せんたくものレインボーブリッジ見上げてる
さむいねむい なんのかんのと よこになり
めぐみさんたちどないしてはる核実験
対岸のマンションくらき午前五時

マンション群 早起きの灯のなつかしさ
ドアをでて かすかにふれる 東京都

米子市 高田振作

スミマセンとありがとうだけ言う老後
帰省しても会釈する人いなくなる
無人駅の黒板が知る別れ

その内に書いておきます遺言書
この寒さアベノミクスで春を呼ぶ
姦しい女のそばで酸欠だ

藤井寺市 高田美代子

人として地球に払うものがある
むだばかり買つてなんにも残らない
列をつくつてたかがラーメンではないか
望むもの無いから笑顔たやさない
ひよつこりと電話をくれる人がいる
本当の春だ靴までよく弾む

和歌山市 武本碧

目障りな見栄ははらりと脱ぎ捨てて
泥の中 噂を捏ねているとじよう
虎の子を高値安値がもて遊ぶ
浅からぬ縁が糸を引くこの世
拉致家族髪にも白いものが増え
まごころはガラスケースの中にある

東かがわ市 清川玲子

髪染めて祝金婚の宴に座す
子や孫の拍手の中で祝金婚
句座の輪に老いの渴きを埋めにくい
日記帳だけにぶつけている渴き
不意に来たようにも思う古希の坂
送られた九谷の茶碗いつまでも (金婚に送られた対茶碗)

富山市 島

ひかる

自動車道できて鎮守の森が消え
故里の山へ今年も木を植える
亀になり兔になつて目指す旗
成長の記録見る間のないビデオ
うたた寝の顔は誰にも見せられぬ

可児市 板山 まみ子

二年たちまだ仮設です三十万
ふる里に何時帰れるかネコヤナギ
二センチの蓬の伸びを待つてる手
こうなればやるしかないかダイエット
煙草とも酒とも離れたただ歩く

犬山市 関本 かつ子

代償が首筋に出たダイエット
ウーロン茶飲んで煎茶を知らぬ孫
嫌われていること知らぬ杉花粉
仏壇に詫びてばかりの旅支度
買い替えもまだ百均で済むメガネ

犬山市 吉田 幸子

合格ヘトーンも高く皺も伸び
生きるってステキ山ほど好きなこと
百円の眼鏡そこそこ置き便利
じわじわと花粉が喉へ攻めてくる
花冷えに婆々シャツも着てオシヤレ決め

愛知県 早川 遯行

お喋りも長寿も女性には勝てぬ
待ち時間かるく一冊読み終える
渋滞を迂回できない路線バス
トイレから出るに出入られぬ立話
楽しそうにしてはならない葬式

さいたま市 星野 育子

国の借金御破算で願えない
工夫して無駄使いするお役人
飛び乗ったオジサン女性専用車
旅好きはガイドブックの裏を読む
無視されて一寸尻尾を振つて見せ

横浜市 小野 句多留

酒好きな女性一人を貴重がり
孫とするオセロ手加減せず負ける
あの頃の妻は後ろにいたつけなあ
慶弔費また年金の枠を超え
旅プランないとお寒いカレンダー

横浜市 菊地 政勝

人生へ区切りをつけるお赤飯
限定の甘い誘いに乗せられる
キッチンでテンポゆつくり老夫婦
誠実に生きて浪費に縁がない
バンザイを素直にやれぬ訳がある

奈良市 阿部 紀子

山寺に石楠花満ちて浄土かと
ウォーキング花吹雪浴び良い香り
自殺され親の無念を思いやる
突風に飛ばされそうになる脆さ
スカイプでアメリカにいる孫と会う

奈良市 岩 本 浩 二

叶うなら六十歳に戻りたい
棘のある視線に堪えて鈍子振る
野暮つたいけれども温い浪速つ子
生き様を考え直す古希の春
強欲な蛇に睨まれてる小島

奈良市 大久保 眞 澄

手抜きじゃない家事能力が高いだけ
笑顔満開十六歳が鳥になる
家族葬せて知らせてほしかった
女子会で高笑いする大ジョッキ
ヨメさんからカミさん次はバアさんか

奈良市 加 門 萌 子

難問はいろいろ有るが花は咲く
浮かれるほどポストに届く物が無い
着ぐるみの量産クマもんにならえ
週毎に伸びる二歳児天才か
寒さにはひるまぬ孫よ別居良し

奈良市 辻内 げんえい

本音には本音で返し打ち解ける
本物の孫の手が搔く心地良さ
好きだったマドンナの名が出てこない
咲かぬ梅桜のつぼみ追ってくる
寒過ぎて春はイベント目白押し

奈良市 米 田 恭 昌

鬼気迫る目力団十郎今はなし
勝つための口では愛というシゴキ
友嫁ぎ娘は婚活に走り出す
無器用で頑固とうとう一人ぼち
何くそと被災の地にも咲く生命

生駒市 飛 永 ふりこ

春めいてけなげさ響くホーホケキョ
身勝手を雲にあずけてフラフラ
恐いもの開き直ると何も無い
心身のメンテナンスに暇かかり
緋けば人間の欲エンドレス

橿原市 居 谷 真理子

もう雪に戻れぬ春に汚されて
春ウフフ地上はものすごい風だ
少しずつ鱗をはがす春の風
ひと恋し恋しと春の雨降らす
この春はどこまで狂うわたくしか

奈良県 中原 比呂志

ハングリー忘れてメーデー歌も忘れ
不等辺三角形だが和を保つ
早く来て居眠りできる席をとり
人の背を楯に言いたいことを言い
声変りして寄りつかぬ祖母の家

奈良県 渡辺 富子

春を呼ぶ火の粉を浴びているふたり
さくらさくらあの日の母に逢いに行く
にこにこ母は仏になりました
再生ボタン押せば若い日蘇る
極楽へ向かう列車にのるお酒

和歌山市 岩本 美智子

椿ボトリ花の命が掌に重い
生かされて一歳の春雛と会う
寒暖のエレベーターに乗った春
おしゃべりのおばさんマスク疲れるネ
長電話詫びる電話がまた長い

和歌山市 上田 紀子

中心をずらしゆつたり生きて行く
登る気はないが天から縄梯子
魂を撫でてやりたい日の疲れ
手土産のジョークを提げて友が来る
無駄なもの省けば私消えている

和歌山市 喜田 准一

諍いを避けて半端になる筈
行間に鎮められている本旨
ここからが胸突き八丁の浮世坂
恙ないことで十分です余生
隕石の話で噂立ち消えに

和歌山市 楠見 章子

春風にのつて自転車絵の中へ
セピア色の話アルバム出して見せ
一番風呂絆が毛穴からしみる
パソコンの窓から魔の手のびてくる
締め切りはセーフワインを開けている

和歌山市 坂部 紀久子

どんな時目を入れようかダルマさん
その時は火花を散らす覚悟です
毛染め止めました正味の私です
突然に齢を聞かれて注ぎこぼす
夕刊を取りに気付いた陽の長さ

和歌山市 玉置 当代

煎餅割るようにガラスを切る匠
その時の気分で変わる万華鏡
折りにふれ絆たしかめあうグラス
雑草の強さに励まされる絆
ど忘れが増えて不安になつてくる

和歌山市 土屋 起世子

和歌山市 松尾 和香

泣き言はいわずに飴を舐めている

独り身の母に付けたい迷子札

嫁姑苗を分けあい花咲かす

手摺ある方が私の進む道

いたずらを探しに曾孫来訪す

和歌山市 福本 英子

走ったら待ってくれてた梅の花

命日の和尚さんまで花粉症

冷蔵庫満杯なのに特売日

お互いに我慢しなくて仲が良い

梅満開口が酸っぱくなってきた

和歌山市 古久保 和子

春が好き誰に絵手紙送ろうか

好奇心の数だけ眼鏡かけかえる

コルセット亀の気持ちがよくわかる

今日一日なん回空を見ましたか

花びらも頂く一服の至福

和歌山市 堀 富美子

笑い種分けて上げよう病む友に

其の時の来るまで曲げぬスケジュール

ピンと張る芯がなければ生きられぬ

お前もかひとりぼっちのちぎれ雲

作り笑いの笑顔だつてあるのです

ポケットに命を守る羅針盤

肩の荷をすつきり降ろし生きている

亡夫の影ゆらゆら追つて向う岸

晩学の道諦めぬ背なの風

亡夫の文生きる支えにして達者

和歌山市 松原 寿子

3・11新芽の萌える刻を待つ

値上がりの春へ心を引き締める

竹の子が出る頃里へ帰らねば

大笑いしたい気持ちを噛み殺す

誰にも邪魔されずに愛の詩に浸る

岩出市 藤原 ほか

お雛様困んで世代こえる幸

脱皮するたびにスリムになっている

脱皮するための力を溜めている

紅をさし今日も女を演じきる

おおらかに過ごせば笑顔ふえてゆく

海南市 小谷 小雪

陽の当たる場所へあなたを運びたい

万障を繰り合わせして墓参り

消しゴムでごしごし洗う今日のミス

ストレスがどつと雪崩れる予感する

夕暮れて寡黙なものにじり寄る

紀の川市 北山絹子

合格の知らせへ春が踊り出す
逆立ちをすれば大きく見える空
救われた命大事にして生きる
突然に起きた夫婦の物忘れ
困ってる貴方の傘になる勇氣

紀の川市 辻内次根

自分との戦いである喧嘩四つ
起き上がり小法師も歳を取ってきた
逃げるには一つしかない非常口
侮っていると手強い水周り
衣食住余り腑抜けになつて来た

田辺市 岡本昇

エコ暮らしならお手のもの戦中派
黄砂へとバトンタッチの杉花粉
年金日会話の弾む老い二人
黄な臭い方へ傾く安倍総理
節分の鬼はスパイク履いている

橋本市 石田隆彦

うまいこと手の平のせる妻の知恵
無意識にライバル視して見る隣
冬眠が十分できる脂肪溜め
霜柱踏んで快感土踏まず
雪解けて土の香が立ちこもる

京都市 坪井孝一

歯車に潜む根深い向こう疵
無礼講素直にとつてひとり浮く
足並みを揃えるためにあるコップ
写メールで謀反の顔は見たくない
乙女座の辛抱強い父の背な

京都市 西村益子

ひとつ先のポストへ歩くこれもエコ
スケッチブック孫と一緒にドラエモン
絵や写真棚のガラスがギャラリイに
着服しても背筋伸ばして春を待つ
へソクリを今もこつそり貯め続け

京都市 藤井文代

しなやかな敬語でせまる京言葉
青い空邪心捨てよと言っている
隕石も宝石なりの価値つける
レジの前いつも手提げをかき回す
世代間の常識どれも全て丸

京都市 三宅満子

描いて消し消しては描いた家族の絵
今朝もまた生かされている南無阿弥陀
葬儀社のチラシまじめに読む歳に
ヒヨ・メジロにあげるみかんは惜しくない
てつちりを食べた日頬つべふるぶるに

亀岡市 井上森生

大阪市 岩崎公誠

天命に素直を誓う老い始め
老いて病む健康本が出る理由
同期会病氣自慢に孫自慢
ゆつくりと話した分だけ生き延びる
詠みながら生きる力を練りながら

長岡京市 山田葉子

ブルーの日ちよつと派手めの服を着る
青い空に続く一本道歩く
韓ドラのなか青春の忘れもの
恋のはじまり頓知問答みたいだね
リズム合わせ歩けた幸を懐しむ

大阪市 池上清治

失言を後々までも覚えられ
やれやれと最後の段で踏み外し
失言を笑い飛ばせる飲み仲間
階段が関所に見える膝の傷
おじいちゃんこのお話は三回目

大阪市 井丸昌紀

いい刺激時々くれる友ひとり
甘え癖抜けぬ男が捨ててある
無防備な岸に取り囲まれた国
もやもやがなくなり恋は覚めました
人一倍愉快な人の生あくび

甘言に企みそつと潜んでる
中立を捨て反対の旗を振り
気まぐれに隕石落す青い空
親展の手紙は重い頼みごと
余所見せず真つ直ぐ生きて友がない

大阪市 江島谷勝弘

不器用だが歳だけちゃんと重ねてる
もう聞けぬ小沢昭一的ところ
考えれば毎日飲んでいる私
今ローンあつたら食べて行けぬだろ
コミカルな作句めざすが届かない

大阪市 榎本日の出

想像はしない私の十年後
人間で良かったアリは休めない
同期会毎年逢えるあの握手
控え目に光って欲しい喪の真珠
全没も楽しい思い出止められず

大阪市 榎本舞夢

今日からは読まれる様に日記書く
今日は今日明日はよろしく日を送る
身辺整理アルバム見入り捗らぬ
最近は二人出かけること増える
いつまでも二人三脚元氣良く

大阪市 大川 桃花

回れ右するにもよいしよ声が出る
赤ちゃんのきらきらの目に見詰められ
梅の香へ一期一会の立ち話
へそくりをあつさり捜す妻の勘
仰仰しく速達で来た請求書

大阪市 奥村 五月

限界も知らず付合う三次会
葬儀屋に名刺もらった縄のれん
遺産分け無いが元氣はもろてます
愛妻に尽くす夫は社で頑固
ランドセル置けば待つてる塾二つ

大阪市 笠嶋 恵美

天笑師の氣さくいたく横の席
地のままに自己満足の句で遊ぶ
ゆつくりと三日休んでから医者へ
老いうふ息子車で送る言う
お人好し馬鹿と天然武器にして

大阪市 神夏磯 典子

啓蟄日 私も負けず顔を出す
内裏さまの目線わたしを追ってはる
新鮮な鯛に会えて元氣出る
念入りな化粧で神に願ひ事
だんだんと余白が減って濃いい味

大阪市 川端 一步

震災二年今日一日は酒を断つ
もし来世あるならやはり鉄道マン
日展へ敬老バスがありがたい
老夫婦の役目はなんだ年金日
嬉しさが過ぎてお酒をこぼしてる

大阪市 熊代 菜月

呼ぶ声に目ざめてみれば夢の中
お互いを許し合いつつ五十年
レモンティー恋の予感の無いまんま
おいくつになられましたとまた聞かれ
鈍行で終着駅をめざします

大阪市 古今堂 蕉子

正座してジョークの効用聞かされる
現代版美魔婆になつてやるつもり
犬だけじゃないぞ亀にも服着せる
五歳児にかけっこも負けゲーム負け
泥かぶる覚悟ないまま恋終る

大阪市 近藤 正

除染したその後の汚水どこへ行く
オスプレイ飛来警報出しましょう
死語になる儲かりまつかあきまへん
仲直りしたい気配は見えてます
T P Pやれば壊れる千枚田

大阪市 坂 裕之

ほつとする故郷行きの汽車に乗る
ぎこちない仕種で席を譲り合う
きつと明日いい事がある今日は寝る
人らしくなつてふんわり舞い降りる
反旗揚げ叫んでみたが風吹かず

大阪市 佐藤 忠 昭

十年振りお上りさんの一人旅
ダラダラな坂が多くて歳を知る
黒い出汁白いうどんが可哀想
コンナモノナンジャモンダとモンジャ食う
東海道往復富士山結果良し

大阪市 澤 田 定 子

子が巣立ち出費もゴミも減つてきた
雛祭スーパで買うちらし寿司
i P S 脳の老化も防げたら
プライドを持ち続けたい高齢者
中国より嫌な P M 2.5 風にのり

大阪市 田 浦 實

褒められて子は限界を突破する
やっぱり美味い妻の手作り丸かぶり
プライドを捨てて見付けた家族愛
尖閣へ陣中見舞い贈りたい
番の目白音符撒いてる山茶花に

大阪市 津 村 志 華 子

水琴窟今作曲をしています
花筏わたしを乗せて下さいな
それなりの自負を持つてる葱坊主
いい夢を見て爽やかな朝のモカ
風紋は風の絵手紙かも知れぬ

大阪市 津 守 なぎさ

梅桜大阪城は優雅なり
車窓から彬を偲ぶ大阪城
梅みごろ重いコートを脱ぐ平和
啓蟄を迎え脅える古い家
春の陽へボツボツ殻を脱ぎすてる

大阪市 寺 井 弘 子

角度変え違つて見えてくる夫
いじめなど知らぬ蟻の長い列
心技体少しづつ欠けてゆく老い
誤字脱字絵馬重なつてサクラ待つ
送別会花束かかえ遠い人

大阪市 原 田 すみ子

嘘ついてセロリしやりしやり食べてます
官能にも響く和太鼓のリズム
もう今はほつたらかしの放し飼いの
好き嫌い抜けた世界はモノトーン
足し算引き算気持を整理する

大阪市 板東倫子

お頼みもせんに空飛ぶオスブレイ
人生に飽いたと若い者が言う
アベノでもピーピーでもよし委しく
愛知らぬ者には償いは出来ぬ罪
酒吞まず煙草も吸わぬ知能犯

大阪市 平嶋美智子

うわさの出どこ壁に耳持つ人だろう
この壁を越えねばならぬさあ一步
公園に冬の陽温し子らまばら
茜雲明日は晴れの指切りを
最後の句できて安堵の睡魔くる

大阪市 伏見雅明

忠告を聞く耳持たぬヘッドホン
ブレッシャーも一緒になつて待つ出番
無駄踏んだ鉛の足を連れ帰る
感激が薄れた頃に請求書
パトカーの音にベルトを確かめる

大阪市 升成好

この俺にきれいな嘘は似合わない
自分だけ不幸と思う手術台
日に一度何んにもしないいい時間
たしなみを越えてしまった祝い酒
起き伏しの音も冬から春になり

大阪市 松尾柳右子

入院の夫見送り淋しいね
今日の幸願い朝の手を合わす
洗濯を済ませ今日を生きて行く
夫見舞う日々に足腰鍛えられ
梅干しを食べて元気を貰う日々

大阪市 山崎君子

サイネリア美しく咲く日曜日
朝起きてつばみ数える楽しさよ
朝早く焼きたてのパン美味しくて
古びなに愛着深しひな祭り
誕生日今年はいくつ考える

大阪市 山本加お里

道端の菜の花しばし歩を休め
しんどいと言えず老老介護する
颯爽と伽羅の香りとすれ違う
人生も塩ひとふりで味が出る
途中から首すげ替えている河童

大阪市 吉内タカ子

総出迎え五輪招致のアピールで
マスク付け大気汚染に物申す
上着脱ぎ歩く心地の早い初夏
アスファルト割れ目に笑顔タンポポね
聞き役の介護疲れの友電話

大阪市 吉村 一風

やつとこさ今日も達者で茜雲
老いてなお敵はいろいろ並んでる
いい笑顔うまくなだめる介護の手
毎日が笑えてちゃんと食べている
長生きも妻のお世話に感謝する

堺市 大隅 克博

愛すると言うほど辛いものはない
目が覚めて手足動くか確かめる
静かにせーと言うた自分がやかましい
うろうろとまだ出来るだけありがたい
よお大将その一声で買わされる

堺市 荻野 象山

墨糸の跡が昔を今に告げ
目の歴史捨ててに惜しい古眼鏡
政治家になるには舌がちと足らん
五七五数える指が踊り出す
浄土にも泥あるらしい蓮の花

堺市 奥 時雄

病弱の妻で料理が上手くなり
幹事馴れして早食い身についた
高級なもの食べたから注ぎに行く
盃を伏せる精進料理のせいでない
葬式の帰りどつさり土産くれ

堺市 加島 由一

焼酎でいのち温めて冬を越す
仏壇に今日の予定の灯を点す
わけもなく桜を見ると泣けてくる
幸せのハードル低い笑いじわ
少子化か雀をあまり見かけない

堺市 源田 八千代

家中にミニ雛飾り喜寿の春
花粉症気にせず布団干している
体操会で長寿の秘訣学んでる
自治会を抜けても何か割り切れぬ
都構想へ諍う堺市長選

堺市 齋藤 さくら

震災の復興遠く胸痛む
電話番父さん役に立っている
うっかりと相槌打てぬ笑つとく
災害に水だけ備蓄しています
年かいな私も家も修理要る

堺市 澤井 敏治

拔擢といわれ花見のむしろ敷く
シャボン玉弾けて夢が降り注ぐ
それにしても何処にでも居る日本人
世界中の知恵集めても見えぬ死後
空即是色悟れぬままの旅に生き

菜の花が食卓にのる春の味

堺市 遠山 唯教

坂の暮らし天秤棒が物を言う

物価高の中でひらめく生きる知恵

甘んじて烏合の衆になつておく

ふるさとの訛りが酒を美味くする

堺市 内藤 憲彦

心技体だんだん填る太極拳

はつなつの風になりたい青い空

喜怒哀楽いのち有つての玉手箱

お見舞を咳一つしてお出迎え

町工場またコンビニに変えられた

堺市 西村 りつえ

楽も苦も揉めては笑い乗り越える

福耳もだんだん遠い耳になり

回り道汗も涙も身につける

祭り笛子供にかえり盛り上げる

幸せはゆつくりきたがすぐ転び

堺市 村上 玄也

可愛かつた孫が大人の顔見せる

突込みがないと物足りない会話

手摺り無い階段昇れなくなつた

全部赦して我慢始まる

八百万の神は戦などしない

新聞を読み終え遅い昼ごはん

ひとり遊びに爪塗る色を選つてます

拡大コピーすれば見えます金運線

ひとり身になつた友またひとり増え

主婦にかて飲み仲間ありお茶三時

堺市 山本 半銭

D五一の白い煙はアートだね

筆頭人大した事は何も無い

優等生らしくきつちり禁煙だ

地下足袋の泥頼もしく農を継ぐ

凡凡の親で命を伝えます

池田市 栗田 久子

春までの一歩わたしに遠かつた

諦める時のわたしは潔い

先人の知恵を拝借する我流

平均でよろしい楽に生きている

凡人に粹な別れは来ぬらしい

和泉市 横山 捷也

黙りは父の血筋だ春炬燵

飲み過ぎは隣に座つた女のせい

曖昧な返事で味方にされました

妥協するつもりで花を買つて行く

同期会肩組み合つてこそ軍歌

泉佐野市 山本蛙城

交野市 森本弘風

いつもある処にポストある安堵
偶数の月だDMどつと来る

お返しに疑いの目がホワイトデー
パズルする妻は時々俺頼る

介護中だろうか友の顔を見ず

検査検査まだまだ俺は生きてやる

脳トレに昨日一昨日の食事

カルテ見る医者顔色気に掛かる

留守番にラジオ体操よく似合う

一人旅したいが出来ぬ妻監視

茨木市 島田誠一

河内長野市 植村喜代

食べ放題国籍詐称し放題

無理をして動けば元氣だと思ふ

料理教室妻に懺悔の顔揃う

私の耳にいつも雨が降っている

損得が見え出し議事が停まりだす

もやもやもお喋りしたら飛んじやった

良心も売る気の野菜無人店

右を見て左見て淋しくなるこの世

無職ですお安い御用ちよい走り

美味しいものの美味しいと言えて幸せ

茨木市 藤井正雄

河内長野市 梶原弘光

夫似の髭が伸びだす二浪の子

肺炎になつてしみじみ古稀の坂(入院五旬)

老い二人少し贅沢する玉露

病棟から起立して見る終電車

風に色つける富良野の花畑

院長の出所の声に類緩む

峠越す病室朝日ふりそそぐ

退院の夜に待つてたエビフライ

平凡な幸せでよい酒に寿司

幸福度達成感に彼我の差が

大阪狭山市 矢野梓

河内長野市 黒岩靖博

噛み合わぬ話も春の陽に溶ける

剪定もまだ出来るよと土踏まず

今日出来る事を延ばしてばかりいる

休耕地ソーラー発電エコロジ

始めるといくらでもある家事雑事

「放浪記」に命をかけた森光子

同じ事していて主婦は日々多忙

何時からか青春の夢消えて古希

口出しはしない夫の習い事

最後まで結び目切れずいい夫婦

河内長野市 坂上淳司

ヒト科には未練は無いと言う地球
また来年と未練残さず散るサクラ
セピア色した肩書きをちらつかせ
二十歳代の写真を見せるバーコード
手の幅を徐徐に広げるばれた鯛

河内長野市 谷久美子

一合の酒でほころぶ夫の顔
日本に汚れた風が吹いてくる
日が差してようやく解けた蟬り
日本に生まれ育ったのが自慢
昭和史にあった絆の誇らしさ

河内長野市 松岡篤

役職を降りて見舞いがぐんと減り
詰まつてる筈の知識が出てこない
冥土への予定段々先送り
スケジュール立てたがノーという財布
散歩道今日も新たに空家増え

河内長野市 村上直樹

形状記憶降りたらすつと縄のれん
鬱々と砂嚙むようにひとり酒
泥まみれでも燃えていた青春譜
破れ目を紡いでくれた孫のTEL
箸墓のロマン卑弥呼の遠い声

河内長野市 山室光弘

貧乏神だけは信じる無神論
分割が終らぬままに去る流行り
年金で足を出さずに暮す知恵
妻の指示返事重ねてにらまれる
顔の傷 故事来歴を喋り出す

岸和田市 堤 檣代

春が来たちよつとおしやれをしようかな
テレビにも匂いがあればすばらしい
梅生けて春がそこまで来た感じ
思い切り声はりあげてほつとする
この生命いつまで重ねるのかしら

岸和田市 森元ふみよ

再度観る映画一コマまた泣かす
馴れました三十年の独り卓
孫達が春だと冷菓土産出す
じいじ殿お互丸くなつた今
故郷の母が匂いを連れて来る

岸和田市 雪本珠子

群れてもそれぞれ個性持っている
ぼちぼちと日本の色が変わりだす
地面には落ちぬ木の葉のへそ曲がり
束の間の幸せだけでそれで良い
歳月に心の傷をカバーされ

四條畷市 吉岡 修

羽根いっぱい展げてごらん飛べるとも
大阪城ノッポのビルにない威厳
風船に溜息詰めて吹っ飛ばす
一翼を担い通してきた誇り
マドンナが盛り上げている趣味の会

吹田市 太田 昭

苛められいじめ返して叱られる
任せると言うから指図無視をする
独りだから立ち止まること出来ません
老妻という喧嘩相手のいる安堵
終活の話になると終夜

吹田市 大谷 篤子

辞書開く頭の中が熱くなる
蕾開く心機一転春の靴
昨日今日忘れることが早くなる
聞き捨てにならない事も無視をする
厄介な自分を見てる自分いる

吹田市 木下 敏子

不況から抜け出す風に杉花粉
桃の花活けてひとりの雛祭り
たのしみが一杯あつて春の服
まだベダル踏んで自由を噛み締める
いい天気なのに花粉に襲われる

吹田市 藏田 光子

線香の煙ひとすじ経を読む
春一番煙は横に荒れ模様
喫煙に肩身のせまい名をもらう
風花の舞う日夫の忌を迎え
合格をネット配信子の笑顔

吹田市 須磨 活恵

喧嘩してゴメンと言つてほつとする
頼みごと仰山おます荒神さん
生真面目で一途なのもちと難儀
鉛筆が丸くなつても出ぬ答え
好奇心も夢もあります春帽子

吹田市 瀬戸 まさよ

咲く桜より散るさくら好き私
人情も変わる縁側無くなつて
惚れますよ旬の食菜美の器
身内より友は本音を泣いて言う
街おこし鎮座まします古地蔵

吹田市 野下 之男

核実験小さい犬はよく吠える
汚染でも爆竹花火止められん
寒い日は男の顔見せゴミ捨て場
妻の肩揉んでみるかと指に聞く
鷺もどうしてくれる梅に雪

高石市 浅野 房子

雨が降る腹の立つこと思い出す
ハンカチとご縁が薄いすぐ落とす
T P Pそれがどうしたどうなるの
買物を友に頼んで一休み
アドバイスしてくれる人誰もない

高槻市 井上 照子

オール電化震災前で悔いている
食器洗淨機奥さま趣味の筆を執る
疑似針にかかる魚の目がうるむ
不景気な街の灯消えたまま十年
花便りやはり気になる故里の春

高槻市 指宿 千枝子

列島のきずな深める花は咲く
段段畑自然に戻る過疎の村
春よ春七十八を飲み乾さん
階段の上でオーイと呼んでいる
天国へはエレベーターで参ります

高槻市 片山 かずお

余白には何か書きたくなる魔力
つくづくと見ればみんなに良いところ
打たれても良し出る杭になる覚悟
家事をしない人と判った長い爪
偉かった人だなお口だけ動く

高槻市 佐甲 昭二

跳ねるための羽撃きだけはしておこう
坪庭で老後覚えた土いじり
縁談を煙たい人にすすめられ
豊かさになれて蛇口の水跳ねる
孫の顔を見たくて途中下車をする

高槻市 島田 千鶴子

無造作に春を突つ込む備前焼
三月の海は悲しい色になる
本命はどこだ天神さま悩む
春の月ぼやけた影を連れ歩く
立ち話今夜のメニュー手に入れる

高槻市 初代 正彦

寝め合つて今日を愉しむ夫婦独楽
七十路の思い新たに買うスマホ
赤ちゃんの乳房離さぬいい眠り
ど忘れにお茶を吸つてとぼけとく
この歳でちよつと嬉しい自己ベスト

高槻市 杉本 義昭

ありがとういつも書いてる母の文
幸せの中に溺れている油断
メロディーが青を教える白い杖
電子辞書脳の隙間を埋めてくれ
懐が寒いときには寝ることに

高槻市 富田 美義

豊中市 江見 清

この暇が怖くて埋める計画書
予定ではPPKとデカイ文字
禁酒禁煙ついに不機嫌根を降ろす
積み上げた成果を砕くミス一つ
計画の通りに行かずまた自腹

高槻市 富田 保子

豊中市 藤井 則彦

ありがとう心に刻み生きている
ドリンクを飲んで明日も晴れだろう
ネッカチーフ五月の風によくなびく
桃桜梅サツキへと花見酒
お招きが寺と宮から来る五月

高槻市 峯村 勲弘

豊中市 松尾 美智代

「色は空」旅行く先の道しるべ
老木も晴着を纏い盆梅展
被災の日明日は我が身と香を焚く
引き算を増やし加齢に立ち向かう
火の玉がドカーン宇宙人からか

高槻市 安田 忠子

豊中市 松村 里江

今の今生きる幸せ露天風呂
年重ねふくらんでゆく好奇心
こつそりと自分の句見る書道展
見舞に来てベッドの上で跳ねる孫
寝るとすぐ幸か不幸か朝になる

お元気と言われ元気をもてくる
非常用リュックも油断したまんま
新刊書を買おう図書館まで待てぬ
お出かけが少し早まる休刊日
説明もなしに新語が跋扈する

贅沢を極めてもまだ満ち足りず
甘えたいときは遮二無二阿呆になる
シャガールに目を覚まされた夫婦仲
リハビリで磨きをかける土性骨
平成から歴史を逆に読むスリル

幕降りるまで駄目な私を演じ切る
寂しがり私の一人の時間好き
長いこと生きた気がする古希の春
紫苑咲く道を帰ってゆく故郷
お陽さまが好きです福寿草開く

人間が好きで街から離れない
ほっとする素敵な画集届けます
似てほしくないのに息子までいらち
巡り会いたまたま寄った喫茶店
K点を越えはじける笑顔歯が白い

豊中市 水野 黒 兎

寝屋川市 平松 かすみ

沈丁花香りの中に猫の恋

菜の花の海に漂う蝶となる

みつ峰は花の女神の春の使者

草の芽が音符になつて春告げる

歳月を屋根に乗せてる飛驒の里

富田林市 片岡 智恵子

寝屋川市 森 茜

順調な老化納得して生きる

めぐり合い青い糸から赤い糸

天地に抱かれ揺れる火の色水の色

死ぬ勇気生きる勇気にかえて欲し

言い訳をして落ち込みが倍になり

富田林市 中井 アキ

寝屋川市 山本 三郎

陽炎と約束のある春の旅

愛を語ると平行線がふるえ出す

春を纏うと噂ばなしが舞い上る

胸の内あかせぬままのモカコーヒー

ふところの深い夕陽にするメール

寝屋川市 富山 ルイ子

羽曳野市 安芸田 泰子

二十年本社出席知らぬ間に

タクシーで帰るとしよう暗い道

人一人通つていない淋しいな

傘寿すぎ残り僅かになつてきた

充分とも思い長生きしたいとも

命まで奪つてしまう掻つ払ひ

亡き父母の病いも記すマイカルテ

限界かちらし見ているケアハウス

身心共に天秤が揺れている

途中から戻る玄関閉め忘れ

寝屋川市 森

昼の月懐ましやかにほほほほ

垢抜けて都会の垢を持ち帰る

ちよつと置いた傘消えているどしや降りに

冬ごもりしてたら足も正直な

隅つこに冬の尻尾がはさまれる

寝屋川市 山本 三郎

リストラの夫の屋台妻が押す

驚いたふりして孫を喜ばせ

中毒をしないさせない母の愛

炊飯器米の産地は選ばない

パーティーの主賓の姿未だ見えぬ

羽曳野市 安芸田 泰子

前置きが長くて話萎えてくる

合格をすれば素通りする神社

満面の笑みでピンチを切り抜ける

春うらら老いもうかれて紅を引く

寒暖の差へとまどつている桜

羽曳野市 宇都宮 ちづる

春の風今年三悪連れて来る
恋心持たなくなった腰回り
どこの猫我家の庭にマーキング
赤飯も鯛も焼きますサクラサク
三寒四温きのう熱燗今日ビール

羽曳野市 永田 章 司

希望退職必要な人辞めていく
ジョギングが散歩になった後期入り
ふくらんだ布団に感謝老婆の愛
春一番蟹の季節の終り告げ
梅だより桜だよりと同じ欄

羽曳野市 福田 悦子

面食いの父が選んだ母でした
鬼の面取ればやさしい父の顔
さあ出番男の顔する鯉のぼり
花の色変える五月の山の道
今が旬教えてくれる道の駅

羽曳野市 吉村 久仁雄

墓買って生きる力が湧いてくる
お言葉に甘えぶ漬け京で食べ
猫の手を借りて忙中閑にする
見つめれば今日は憤怒の目の埴輪
温もりにもう逆らわぬ歳になる

東大阪市 北村 賢子

萌黄色命生まれる色が好き
次々と新商品を生むベルト
鬱の日も化粧するまだ大丈夫
老老介護どちらがするか同い年
悲しみへこころ寄り添うボランティア

東大阪市 佐々木 満 作

桜愛で暫し安らぐ車椅子
夜桜の目と目が逢って五十年
星屑の町で出合った天秤座
明日は明日今日いっばいを生き延びる
復興の歌に試練の道続く

東大阪市 米田 水昇

復元へ一本松が植樹され
思ひ出の大島椿やつと咲く
傘寿なりさそつてくれて祝われて
桜祭り近くてもこの体では行かれない
古都の店借景取り入れお客呼ぶ

枚方市 安達 忠央

目覚ましが鳴って私の朝ダッシュ
熟睡をしても春眠未練あり
お互いに酒の強さをほめて注ぎ
キャブテンに命預ける空の旅
閑古鳥鳴く老舗が粘ってる

枚方市 海老池 洋

だんだんと祈る気持ちになるカルテ
温顔で隣の垣根低くする

禅寺へ人間臭さ抜きにいく

下積みの石にノルマの重すぎる

天地に教えを乞うているいのち

枚方市 小林 わこ

カギつ子等待つのチューリップとイチゴ

問題難解意外にといたのは子ども

胸のカギ開けてくれるの待つている

辛抱のカギは微笑む亡母にある

日本間の有無が引つ越しの決め手

枚方市 丹後屋 肇

目を据えて日本語学ぶ脱北者

バーゲンばやり振り向きもせぬ通り客

アベノミクス眉毛に唾を着けている

力抜くコツを覚えて伸びる距離

スマートフォン昭和がセピア色になる

枚方市 寺川 弘一

じゃんけんをすれば従う子供達

神頼み無神論者はせぬだろう

本当のことしかカルテ書いてない

天国に終着駅は無いだろう

幸運はベルトコンベアでは来ない

枚方市 二宮 山久

少しでも若く見せたく紅を引く

まだ若い恋もできます七十路坂

だんだんと若さ消えゆく厚化粧

ナンバーワン新幹線の窓の富士

ライバルを誉める余裕がまだできぬ

枚方市 二宮 紫鳳

Vサイン受験の子らに梅香る

冬をぬぎ足どり軽く二人旅

下向きに揺れて水仙匂い立つ

垣根越し梅の花愛でて長談義

手作りの草餅供え母偲ぶ

藤井寺市 鈴木 いさお

母百句詠みたしやつといま十句

微動だにせず指示を待つ盲導犬

リヤカーに積んで昭和を棄てにゆく

句集を出せとはどなたも言うて来ぬ

「娘よ」を唄うと涙腺が緩む

藤井寺市 津田 シルク

冬の顔で春をさがしに靴を履く

曇降る桜の話もうしてる

手作りの春爛漫の供え物

息するのがしんどい時がある不安

ドリンクを飲めばエンジンすぐかかる

藤井寺市 増井 ヨシ枝

箕面市 出口 セツ子

レプリカの本松にある賛否

耳打はもうすぐ春よ老犬に

電動車お供はいつも保険証

古希すぎて身辺整理ぼつぼつと

春だなあ猫もスキップしているよ

藤井寺市 俣野 登志子

ほんのりとベテラン女優にみる色香

口約束自信を持つて忘れます

良心の谷間に顔を出す邪心

天神裏人出でわかる梅見頃

もうこれきりと追伸でやつと書く

藤井寺市 吉田 喜代子

冬山も見てるだけなら美しい

様な縁に恵まれ善光寺

旅帰りが溶ける我がベッド

春の風誰か分らぬマスク越し

顔形随分変わる自由雛

藤井寺市 若松 雅枝

歯が痛むわたし歯科医師恐怖症

母の留守物足りなくて落ち着かぬ

もう少し先でお願いぼつくり死

バランスを崩さぬように積み重ね

孫の声につられて唄うわらべ唄

子が幸せならば何にも望まない

子がいくつになっても未来案じてる

留守の子に罪悪感の夫婦旅

側に居て欲しい結婚して欲しい

日に一つ楽しいことを捜して

箕面市 広島 巴子

健診のはしごしてまです元気です

冬眠の次は春眠夢現

風神にイエローカード差し上げる

雛人形飾り孫へのラブコール

雛祭りホワイトデーと春謳歌

守口市 井上 桂作

T P P 誰がためになる教えてよ

八重の桜大河ドラマにしつかりね

認知症医師の見解まちまちに

脱デフレアベノミクスよ成功を

寒冷化開花予想もままならず

八尾市 内海 幸生

年寄りの約束手形にある期日

一刻はできる笑顔がすぐ萎む

無理しても笑っていたら明日がくる

白い歯を見せてはならぬ裁判官

老眼に援軍となる虫めがね

八尾市 高杉 千歩

遊亀の梅目指す忘我の小半日
地球儀の小さな日本の島狙う
メモリアルホールに溢れる美辞麗句
一日を喋らず笑わず恙なし
個食孤食枯食 さくら咲く

八尾市 寺川 はじむ

指定席とれてゐるのに急ぐ癖
被災地もきつと見えるよ春の星
雛納め離ればなれに蔵の中
長寿箸買うて八十路へ喝入れる
年一の再会照れる雛人形

八尾市 宮崎 シマ子

目から鼻へ抜ける女を警戒す
信じ合うかたちで寄りそう道祖神
奥の間で貧乏神が寝ています
名乗りあえば余計なつかし久しぶり
ババ抜きの子のカードが来た顔だ

八尾市 村上 ミツ子

啓蟄へわたしもコート脱ぎました
先ず名乗れどなたか分からないマスク
寄り道で尾ひれをつけてきた噂
たかがジャンケン負けて落ちこんでいる
逆転狙い最後まで手を抜かぬ

大阪府 桑田 ゆきの

趣味同じライバル心がメラメラと
天神の牛像撫ぜる仏心で
暫くは流れのままに落椿
鳴いてるだけで事足る初音なり
気に掛かるアベノミクスと花粉症

大阪府 初山 隆盛

花の下総身に春を深呼吸
菜の花が咲いて忙しい漬物屋
幸福を計る目盛は付けられず
時として才女がつける鬼女の面
持ち唄は妻が作った応援歌

神戸市 伊勢田 毅

着飾って足の短かさカバーする
姑のとんち我が家の危機救う
春闘へアベノミクスが背を押す
よもぎ餅亡母の匂いをふと思う
洒落た文添えて友から釘煮くる

神戸市 木村 貴代子

やつと一歳 何歳までを祝えるか
一週間どこか違って見える孫
大抵はからの巣守り一人住む
幼子が笑うと花が咲いたよう
急に来た春に着る物提げる物

神戸市 白川 淑子

街中の猫がウインクして通る
気が付けば後期の列に並んでた
たつぷりと有った未来も黒髪も
自慢の子三人育てひとり住む
終章のおまけ一行詩に感謝

神戸市 山口 光久

この浮世必死に泳ぐ凡夫婦
へなへなと力が抜けてゆく挫折
マイペース時代おくれと言われても
偶然に掴んだものは玉手箱
マンネリをイメーゲンジして飛躍

神戸市 山崎 武彦

原点に還るジグソーパズル組む
透き通る空の青さに溶く迷い
ささやかな幸スルメまだ囁める
ささやかな余生楽しむ赤いシャツ
お言葉を返してからの反主流

神戸市 山田 婦美子

如月と言う名も小の月も好き
モノトーンの殻を破って春の顔
雲間から幼い春が迷い出る
ピカピカの靴から春が踊り出す
深呼吸すれば五臓が生きかえる

相生市 中塚 礎石

物忘れ痴呆症かとふと思い
一合の酒屋の椅子は瓶の箱
かつこよい義理の拍手は響かない
真田編む昔話のテレビ見る
生き延びて裏も表もない鏡

明石市 糀谷 和郎

どこにいても笑顔咲かせるありがとう
遠ざかる昭和を閉じて悔いは無い
できるところまではやろうと石を積む
窓拭いて猫に添い寝の日向ぼこ
ちよつとここだけの話に花が咲く

芦屋市 黒田 能子

酸欠の街で真紅のバラを買う
おかげさま生命線が伸びている
あつけないお世辞ひとつも言えぬ人
母の胸ゆらりゆらりと眠らせる
童謡は今でも宙で唱う老母

芦屋市 竹山 千賀子

漬物で我が家の歴史語る母
同窓会酒の肴は孫自慢
サングラスかけると魔女になっていく
誕生日のこのこ老いがついて来る
つまずいた石を時折撫でてみる

尼崎市 市坪武臣

球春が待ち遠しいな吠える虎
花見の宴雨天決行居酒屋で
義理チョコが僕のハートを悩ませる
お伊勢さん心の洗濯して帰る
四度目は私も首を横に振る

尼崎市 加川靖鬼

白蛇の神秘ルビーの目も愛し
凍てついた空に三日月動かない
スクラムでテトラポッドが立ち向かう
水断たれトマトは甘くなつていく
すれ違い犬もわたしも一目惚れ

尼崎市 軸丸勝己

小遣いを三日得するよい二月
スケジュール趣味より増えた医者通い
医療費に税もお見舞還付金
エンディング本は買ったがまだ目次
国際化相撲もやがて五輪の日

尼崎市 長浜美籠

せかせかとするには惜しい梅日和
雑踏をさけて一人の紀伊国屋
ライバルという何よりの起爆剤
あれこれそれ仲間内では通じ合う
決断に先入観が邪魔をする

尼崎市 林昭三

ばあちゃんが灯明消してありがたや
此の冬を越していつもの空元氣
母さんが背中を押して学校へ
お隣が無理難題を言つてはる
友と寄る帰りは同じ終電車

尼崎市 春城年代

唄を忘れた亡夫の部屋の鳩時計
威勢良い隣の雨戸開ける音
雛の灯の孤独と老いてゆくひとり
出迎えてくれた土筆よ亡母の駅
深夜目覚めて昼あんどんになつてゐる

尼崎市 山田耕治

本箱が雛段になる一ヶ月
ダメな人と言われてのんびりと生きる
あの年の桜を思い出す桜
空いた席見つけておじいさんを呼ぶ
受取人わたしようやく満期くる

川西市 西内朋月

焼酎が今日一日の締めくくり
棚の奥埃をかぶるパン焼器
トイレだけ三日に一度掃除する
かさ蓋を剥がして過去を捨てている
延命の治療するなと言ひ残す

川西市 米原雪子

親切がまさか裏目に出ようとは
育て甲斐あつたと親の欲目かな
恩師の文乙女の私浮ばせる
未練あり置き場所替えて飾つとく
春嵐黄砂を連れてやつて来る

三田市 石原歳子

寒い日も悪くはないな汁おいし
法要を営み心晴れ晴れと
歳とつているから着ます赤い色
独り居に地元楽しむ地図をみる
学校で負けないように塾へ行く

三田市 上垣キヨミ

私の心を見抜く名画の瞳
ばあさんもWBCに汗握る
国挙げて五輪招致にゴマをする
あつい茶を足してお開き急かされる
年重ね胸のマグマを置き忘れ

三田市 尾崎一子

チャンスがあろうが無かろうが青春
負けて知る人の優しさ思いやり
声変り夢は無限の青リソング
生きのびてときめく星に住む奇跡
早や十年貴方はいつも若いまま

三田市 北野哲男

ネズミには効いた薬で試される
不器用で大きな音を立てて生き
順調な加齢とほめて薬なし
戒名の前に病名いくつ付く
鯉幟り並みの寸胴だが元気

三田市 久保田千代

飲み込んだ言葉に感謝する後日
反論に背筋を伸ばす気の強さ
狡猾な尻尾たやすく掴まらぬ
振り返り何をそんなに走ったか
気持びつたりそんな昔もありました

三田市 田中章子

お財布の夫の名刺は迷子札
母さんのくぎ煮の味は絶やせない
いかなごもくぎ煮になって自己主張
電車内まるでスマホの展示場
かなえない夢あつたろう被災者に

三田市 堀正和

温暖化冬の間は許します
いいニュースないかと探す地方版
アリバイを聞かれて困る記憶力
いいヒント拾いましたよ屋台酒
青春は遠くなつたが春は来る

西宮市 秋 元 てる

パスポート未だ仕舞つてる老母と知る
ちと可愛い卒寿過ぎての天の邪鬼
呆け多発笑つてばかり居られない
何となく過ごしひとりの箸洗う
角度替えて見たら案外いい男

西宮市 足 立 茂

雀の涙は蚊の涙よりちよつとまし
負けつぷりがよくて上がった好感度
湯呑みから名前覚えた寿司のネタ
句会ではしょんぼり反省会で燃え
せつかちの話文脈つながらぬ

西宮市 緒 方 美津子

かわいいな梅干舐めたややの顔
わたくしが縮んでました換気扇
犬を抱いてボクを叱るママ嫌い
よく噛まぬまま呑み込んだ誤字脱字
遠くを見ると軍服の亡父が佇つ

西宮市 片 山 忠

東京家族山田洋次はすぐれ者
コップ酒似合わないから呑まぬ主義
気配りのすすめと書いてあるベンチ
無条件でおもしろかった時代劇
生活保護でペット飼うのは駄目ですか

西宮市 亀 岡 哲 子

弱り切った子猫を神が連れてきた
育てる気獣医にしかと試される
長生きを共にしようかなあ子猫
魅せられて買った花の名も忘れ
日向ぼこ長うてつくし顔を出す

西宮市 西 口 いわゑ

熱燭よ今日わたくしの誕生日
炬燵からお茶やお菓子や忙しい
つくしんぼ衛兵の如並びおり
信号の赤にひとまずほつとする
空の青花火のような生もある

西宮市 牧 渕 富喜子

出来ることからふくらんでゆく朝
即決の流れで開いた春の窓
口角をちよつと上げれば美人だよ
めがね外して今日のくもりを拭いている
元氣だと言えば喜ぶ友がいる

西脇市 七反田 順 子

株上る私の株は余所見する
クシャミ出る花粉に好かれたまらない
黄砂まで一人前の顔でくる
天辺をぼんと叩けば知恵が出る
チャルメラに耳を立ててる猫がいる

姫路市 古川 奮 水

鳥取市 池澤 大 鯨

理髪店選び髪型春にする

チューリップはつと開いてご挨拶

熱燗にスルメを焙りよく弾む

酔い冷めに機嫌伺う夜泣きそば

春好日お札ひらひら散歩する

竹原市 石原 淑 子

もつともつと生きたかつたる鎮魂歌

震災の風化が怖い防災日

野に御座すお地藏様の愛満つる

両隣PM2.5核兵器

目標を持つこと大事だと米寿

竹原市 岩本 笑 子

平凡な一日夫婦と一匹と

ケンカせぬようにゆつくり送り出す

玉子焼き覚えた夫の塩加減

まだかなまだかな土筆を待っているのです

病院に居る時だけ病人になろう

宇部市 平田 実 男

実印を捺すと重たい紙になる

同居してくれた仕合わせ不仕合わせ

子の宅へスープが冷めぬよう運ぶ

肩書きが増えて自分を見失う

ほつといてくれたあなたの思いやり

変哲の人生とかや小沢逝く

真面目すぎ箍をはずして締め直す

思いつきり茶化してみたい半生記

魔がさしてこの歳で響盤を買い

とし頃の娘を見ると無視できぬ

鳥取市 加藤 茶 人

神棚が埃被っている平和

職退いて四日目からは蚊帳の外

聞く事が恥だと思いう時に負け

子に良かれ敷いたレールが重荷過ぎ

売れる物作る女の舌加減

鳥取市 岸本 孝 子

一枚を減らすとすぐにくしゃみ出る

風は寒いが陽の色やつと春を告げ

芽吹く木を見ると元気をもらいます

淡い色の服を嘆かす皮下脂肪

山坂を歩いた足をなでてやる

鳥取市 鈴木 一 弘

風紋をラクダの舟でわたる月

いさかいは腹に溜めずにみんな吐く

我慢して二番煎じのお茶を飲む

枝枯れ葉ぶらり糞虫冬を越す

偉い人演じるのには髭が要る

鳥取市 竹口 清信

今日もまた何か一つはいいことが
叶わない夢でもみんな生きられぬ
晩酌の肴の骨が取つてある
変わらない時は自分を変えてみる
無事だったことが何よりいいことだ

鳥取市 倉益 一瑠

泣くたびにしたたかになる花の芯
平和つていいな義理チョコたとと買う
憶病なカラスむかしの私だな
花束の中に潜んでいる刺よ
鬼遣らい鬼より怖い人もいる

鳥取市 高浜 勇

十字架を秘かに背負い生きて行く
白線をはみだし前へ出たいもの
夢だった落ちるはずない熱気球
飾ってもチラリ隙から素がもれる
生きてきた同じ年月違う位置

鳥取市 土橋 はるお

お隣のご隠居さんはウォーキング
八十路すぎスーツ詠えどげすーだ
激しい人と激しい人が話し合う
句集など出せる作句をしていない
フッフッフ笑みが出そうな句集読む

鳥取市 永原 昌鼓

年金に縋り細々生きている
逝く準備まだ本気にはなれません
スーパ―へ急ぐ割引き時間帯
昭和史にもしも戦がなかったら
予約ずみリングが光る薬ゆび

鳥取市 中村 金祥

見ないふりする暴力に立ち向かう
したたかな気持ちで介護続けてる
仏前で孫子の代を考える
骨粗鬆症予防でしないダイエット
殺生はするな桜が満開だ

鳥取市 夏目 一粹

喧嘩した訳も知らずに肩をもつ
ぐつすりと眠ると丸い人になる
悲しみを溜めてる人は泣きなさい
貧しくてもいい平和であればよい
老いふたり会話が絶えてしまいたいそう

鳥取市 西川 和子

子を産んで女の肝は強くなり
乗り越えて肝が据つてきた笑い
肝入りの話に掛けて見る老後
肝試しするほど度胸などはない
八十年鍛えた肝で動じない

鳥取市 春 木 圭一郎

今ベスト尽くせば夢へ近づける
芽が出ない五年十年やる覚悟
言い訳で逃げる人生だけはせぬ
経験に無駄なことなど何もない
今できることを続けてやればいい

鳥取市 平 尾 菜 美

鐘ついて器も欲を捨てなされ
予備軍と姑も手首に輪ゴムかけ
馬鹿になる器それなり徳を積み
ゴマの手にかかる百菜大変身
器には向かぬと父の腕一本

鳥取市 深 澤 千恵子

競い合うライバルがいて若返る
日韓に三寒四温春を待つ
カラフルにアルバム飾る孫写真
夢一つかなうとひとつ増える皺
体より心が老いを左右する

鳥取市 福 永 ひかり

百菜の長を休まず風邪葉
ハングリーきつと明日はを抱いている
今は未だ介護予防に要る車
アバウトで添っているのは理数系
組板の鯉になる道長かった

鳥取市 前 田 楓 花

辛い人生なんて無いこの世
悲しみの上に重たい雪が降る
還暦でやたらと昔思い出す
春一番隣のゴミも連れて来た
甘い物背中を向けて食べている

鳥取市 宮 脇 道 子

宝籤真面目に生きて当らない
山茶花がやけに真つ赤で終る冬
御高齢と言われてピンとこない今
国際的埃が人間狙ってる
ばあちゃんの魅力年金だけどころか

鳥取市 森 山 盛 桜

階段かエスカレーターかの違い
得意技あり背を向ける下を向く
飲んでいる薬の名前など知らぬ
どのチェックリストも丸が多くなる
手書きには手書きで返す事にする

鳥取市 横 田 春 名

春なのに友は遠くに逝つたまま
月予定なんとか埋まりほつとする
尊厳死語り散策桜土手
茶柱が立った合格電話待つ
死にたいわ殺し文句の友と会う

鳥取市 吉田 孔美子

日本海大きなマスクしておくれ
恐らくは私で終る袋帯

大きな目の袋帯に常備する

隠居するなら延命不要明記せよ

腹持ちが全く違う昼二膳

鳥取市 吉田 弘子

春なのに依存マスクを手離せぬ

大気汚染春を素直に喜べぬ

肩の荷を降ろせば呆けがくる予感

生き延びた喜寿を臆せず派手を着る

湿布薬貼り合うふたり老いの景

倉吉市 猪川 由美子

エンディングドレス生前じゅんぴ隠し置く

異常寒波地球の怒り謀反だ

竹島へ神経戦の日韓だ

TPPさあ幕が開くどう変わる

三年天下の民主国取りまたなるか

倉吉市 野口 節子

紅椿冬のハートに灯をともし

侘助が茶室の空気とませる

知力体力フルスピードで逃げて行く

天辺の名句と肩を竝べたい

春だ春だ春が大きく深呼吸

倉吉市 山中 康子

真ん中でタクト振ってるお母さん
決められた嫁の掟に手を出さぬ

底のそこ極める川柳テツガクか

大地震津波を知った子のネバリ

割り切つて老いの暮らしに浸かるのみ

倉吉市 山本 玲子

いつ罹りいつ治つたか春の風邪

試食品腹はべこべこみな旨い

料理番組わたしの知らぬ調味料

体験はできぬスカスカした五体

春は欣喜めでたつづきで金は飛ぶ

米子市 後藤 宏之

三割引もう一声と客はやす

湯たんぼがやはり欲しいと身体言

いやいやと言いつつ写真真ん中に

もしもなどあてにはしない処世術

海峡をはさんで只今口きかず

米子市 後藤 美恵子

年金日通帳しばしほつとする

花粉時期ティッシュ抱えて集う居間

とりあえず輪ゴム手首に溜める癖

離れないか離せないのか子どもの手

幽霊に福祉手当てをつけている

米子市 竹村 紀の治

入院する度にイヤホンが増える
ネーム入りの腕輪も外れ退院日
デザートのあとの薬でフルコース
春らしい膝の機嫌が好くなった
こつそりと唄うハッピーバースデー

米子市 中原 章子

悲鳴など上げたことない太い足
徘徊と間違えられぬよう闊歩
幸せは五角に会話出来ること
沙羅ちゃんに天使の羽が生えている
見て回るだけの息抜きシヨッピン

米子市 成田 雨奇

お経聞きやつと五言とわかるだけ
弔辞終り思わず拍手したくなる
まずい酒この店これで稼ぐ気か
ストレスをためない酒がありがたい
若者の顔みな同じ親族か

鳥取県 石谷 美恵子

気の早い蓄カウント待ちこがれ
人生を何とか踊り終えた靴
コンセントまめに外してくる嫁
春の色添えてカタログどつとくる
その時の気分で歩幅変わって

鳥取県 岩崎 和子

浴槽のこぼれるお湯を気にしてる
支え合い転ばぬように湯に浸かる
妄想か美肌に見えた宵鏡
夢を見た確かに見たと思ってる
載った句をしみじみと読む午後一人

鳥取県 斉尾 くにこ

憧れた自由な時間敵となる
友斬った舌に寄り添う夜の闇
またねって言葉信じてみたいとき
見栄張れるくらいの距離を保っている
眼差しの先は春が芽吹いている

鳥取県 竹信 照彦

温度差が十度弱者はカゼを引く
好天に勝手に伸びる庭木切る
剪定する脚立に乗るもひと苦勞
うずうずと太公望が疼きだす
ガン系統じわり兄弟攻めてくる

鳥取県 西谷 悦子

新鮮なところに明日の種を播く
欠点を晒し合ってる温い仲
老い向かうわたしの真価試される
何もせぬ日などあり得ぬ主婦であり
無言で落ちる椿にも私語きつと

鳥取県 細田裕花

大根の穴にも春の陽が届く
真ん中が落ちつくあいまいな私
良し悪しは素つびんの時決めている
大笑いしてはならない活断層
時はホットラインへ声流す

鳥取県 松川行男

小さいが押しつけ役がまだすまぬ
十五日 私の苦勞投句する
胸を打つ成功記事に追いつけぬ
爆発だ五月連休矢印へ
感謝して何かする事ないですか

鳥取県 山下節子

ふる里が瓦礫になつて消えました
気の早い虫が蠢く陽の光
やさしさとしたたかさもつライバルだ
狭くても私の領土花植える
一日をカウント無しで一人住む

鳥取県 山本正光

ぼろくそに言われながらも芯通す
ロボットよお酒の味は分かるまい
あれこれと言われ原電動いてる
踏ん切りがつかず一日すぐ暮れる
元氣でる大きな鍋が眠ってる

松江市 石橋芳山

旋風めんどろばかりおいて行く
口開くたびに狡さが増してゆく
雨の中突つ込む全て承知して
疑いはキラキラ万華鏡まわる
引つかかるものあり華やかな話

松江市 小川注湖

この胸に膨らむ明日の米を研ぐ
重い雪曲つて撥ねる若い竹
赤子の手銃は持つなとさすります
可愛いなほが白くて手も白い
耳底に消したい言葉こびりつき

松江市 錦織禮子

暖流にテンション上げる好奇心
有能な脳をレンタルしたくなる
方言で作る川柳笑えそう
復興支援マッカーサーが来ていたら
巣立つ子に門出を祝う腕時計

松江市 松本知恵子

雪解けの水に流そう冬のウツ
イベントの旗目出ちだす春の風
レンタルを使いさっぱり生きてゆく
お雛さま流した川が見つからぬ
紅梅の咲く公園へ回り道

松江市 松本文子

あつという間に老いる一日長いのに
白鳥帰るか湖へ自転車走らせる
逆転しちゃった医療費と化粧代
阿修羅似になつた頬つぺを叩いている
その俣でいいと優しい風が来る

松江市 三島 湊 丘

喜寿の春ブギのリズムでやって来る
深爪の癖がなおらぬまま喜寿に
のほほんと生きて答えがまだ見えぬ
爪立てて心の痛み耐えている
共に泣き笑う家族という絆

出雲市 石倉 芙佐子

オイで始まりオイで終りになるらしい
隣に住んで黙って遠出するなんて
桜咲くとなりの奥さん呼んで来る
君遠く烈しい戦の影もない
泣いて笑って八十路の春はゆつくりと

出雲市 伊藤 玲子

とめどなき想い菜の花七回忌
ひたむきな君に豆腐と木の芽和え
早起きのご褒美花の開く音
世の中の裏を見過ぎた眼が痛い
ふつふつと郷心湧く蜆汁

出雲市 岸 桂子

錯覚のまま人生を折り返す
旅の記念に指紋一つをつけてくる
事足りる座ったままの四畳半
死ぬことよりも家の片付け考える
駄目でいいテルテル坊主吊っておく

出雲市 小白金 房子

登校の自転車光る春の道
引き出しに仕舞いわすれた恩がある
どの味も使い上手な老母の鍋
垣根ごしクシヤミが届く農の春
トンネルの犠牲を偲ぶ遅い春(開通へ思う)

出雲市 多久和 敬子

一言が心の海を掻き混ぜる
ここだけの話が海を越えてゆく
一つ知り二つ忘れて陽が暮れる
まつ青な空が味方になつてくれ
衣更えポッケの中に眠るメモ

島根県 伊藤 寿美

再生の褥りが響く被災痕
握りしめたのは春の風だった
終章の絵皿に残す風の彩
高望み捨てると風の彩が見え
余命ふと指折る亡夫の十三忌

美作市 大石 あすなろ

ふところの内緒冬眠から覚める
カーナビで自分探しの旅をする
あれこれと夢がひろがる試着室
増税へ家計の線を引き直す
写経する悟りに遠い筆の跡

岡山県 福原悦子

生きているデーター今日も飯を炊く
絡ませて人間作りはミステリー
手段から始まる愛の一行詩
放置した領土もほしくなる欲目
したたかな息子の意地か無口劇

唐津市 坂本蜂朗

窓際で表と裏を理解する
小細工が奏でる転落の序曲
面白い人だ昨日とまた違う
喜怒哀楽みんな流れて喜寿の春
孫自慢年年声が小さくなる

熊本県 岩切康子

当地マラソン知人の姿探し視る
年賀状の気になる友を確める
一寸の草も綺麗な春の花
日に5千歩目標変える新年度
梅満開梅ヶ枝餅の宮土産

東かがわ市 川崎 ひかり

桜餅もうすぐ母の八回忌
?だんだん増える孫二歳
カットした絵に真実が写ってる
句読点打って呼吸を楽にする
能面の下に生身の顔かくす

松山市 高橋宏臣

春めく夜人を疑う場所がなし
背骨に沿って夢が崩れてゆくある日
永劫に続く階段夕螢
叩き独楽誰もが夢を持っていた
チョコの銀紙丸めて星の一つとす

松山市 宮尾みのり

明日がある未来があると思つてた
どう泣けばいいのと涙すら出ない
逆縁の覚悟を子から諭される
泣き言を言えば深まる自己嫌悪
まあまあでいいさ五感も衰える

西予市 黒田茂代

しもやけから解放されぬまま春に
芽柳と風の話が終らない
途中下車したい日もある花の鬱
偶然の一致電話のベルとドアチャイム
思いきり転んで自制心消えた

高知市 小川 てるみ

貧乏が恥でなかった戦中派
敵か味方かロボットが進化する
歌って笑って若さをキープする
亡母に逢う夢の続きをキープする
一万歩ぐらいで減らぬ皮下脂肪

高知市 小澤 幸泉

お荷物が届く何かが起りそう
七十の顔が昭和を語り出す
終りまで生き抜く勇気持ちなさい
四十年荒野の歩みくりかえす
土佐の雨どこか陽気でおしゃべりで

黒石市 佐藤 古拙

葉桜の下で指おる余命表
上着だけとり替えうすい句を作る
肺活量大きな人の嫁になる
大雪で裂けたりんご樹託びて伐る
古稀こえてケーキの灯り消せぬ俣

平川市 小寺 花峯

天気予報赤いマークに安堵する
授かった足の裏ですたと拭く
桜散る涙が重い海の底
華やかな黒髪でした青春期
五時半は銚子を退治する時間

弘前市 稲見 則彦

熱愛も三日目あたり峠です
義理堅い人には辛い万歩計
徹夜して仕込んだカンベ見当らぬ
近道をよく知っている渡り鳥
お点前が終わって裏でかく胡座

弘前市 岡本 花匠

市の除雪今日でおしまい雛の笑み
氷雪を割って春掘る北の性
生きる知恵教えてくれた木瓜の花
平均寿命 最低県に苦笑い
晩節のふんばる男種を撒き

弘前市 今 愁女

啓蟄も虫の天井厚い壁
白鳥が旅立つ朝のにぎやかさ
逆Vに組んで白鳥北に飛ぶ
排雪に七億円の地方自治
メディアからサクラ北上知らされる

弘前市 須郷 井蛙

三次会で竜宮城の美女に会い
飽食の犬は衣を着て歩く
幸せはオール電化のウサギ小屋
顔だけじゃ足りず足まで化粧する
カラオケを毎日老化防止剤

弘前市 高橋 洋子

ヒートショック風呂もトイレも命がけ
二センチの段差でぶつ飛ぶバツ悪さ
二の足を踏んでばかりで日が落ちる
今ひとつ焦点合わぬワンルーム
きつかけはポッケにあつたマツチ箱

弘前市 福士 慕情

認知症だとは気付かぬ初対面
綱引きは何時も妻には負けてやる
耐えること教えてくれる仮設の灯
シャガールの馬で銀河を駈ける夢
ふんわりと雪を被つた六地蔵

青森県 松山 芳生

正確な写真にあいまいな記憶
深呼吸して通り過ぎてゆく男たち
世代交代キッチン賑わすカタカナ語
光の束だった君の重き語よ
長いながい冬を沈めて土燃える

札幌市 小沢 淳

取り扱い注意の札を張っている
優先席足が自然と向いていく
中身ない箱物だけが積んである
もやしつ子教育ママに背を向ける
発芽させ育てられないものばかり

札幌市 三浦 強一

周辺は脳梗塞や癌手術
妻知らず僕は今でもサユリスト
男気と貧乏神の息が合い
最果ての街人情が温かい
公園のベンチも少子高齢化

砂川市 大橋 政良

愛一つうつろな夢の中にいる
プライドの捨て場求めて旅に出る
居酒屋で楽しむ酒と怒る酒
溜めている夢を小出しに爺と婆
うまかつた話 回転寿司回る

(前月号) 東大阪市 米田 水昇

幼な子がきれいに並びすべり台
逆上がりくるり回転春日ざし
孫曾孫ひきつれ園へおばあさま
津波隕石どこまで地球あばれるの
理屈では割り切れないから楽しいの

同人名簿発行のお知らせ

七月一日付けで川柳塔社同人名簿を改訂発行します。
住所・電話番号・雅号等に変更のある方は、本社事務所へご連絡下さい。尚、個人情報につき本人からの申し出に限りません。
締切り日 五月二十五日

自選集

小島蘭幸

まつすぐな眼だった耳は立っていた
わたくしのうしろに三人の笑顔
サングラス外すとオーラまで消えた
ときめきはまだあるてのひらの微熱
井めしが似合うわたしもムーミンも

政岡未延子

分別を植えず皆にけむたがれ
一本の木も傷つけず森を出る
虚を庇って父の樹らしく風に吠え
植えた木も植えた男も枯れ気味に
やがて腐葉土潔く葉を落とす

三宅保州

騙し合いなら人に負けると言う狸
所により事故が起こるでしょう今日も
平行線のままのルールで役に立ち
ヤマトと言えば戦艦と言うご同輩
道ならぬ荷物を背負い込んで

宮西弥生

忘れてはならないことが多くなる
裏表字に表情がある和紙の顔
雲ゆきをドラマチックにする春霞
転がった石にも明日の夢がある
日によって花にも咲く日咲かぬ日

椿の実

八木千代

恩の名を問わぬ日はない椿の実
花に習ってわずかなりとも実を充たす
その気になれば今からだって老いだって
オヤスミナサイ 死者のなまえを聴く蒲団
漂うて現の岸を離れゆく

八十田洞庵

鮮やかな腕は包丁知っている
観光を当てこんだ寺青畳
ヘルメット脱いで飯場の昼にする
ピエロってはにかむ顔も持っている
新人の意外に伸びた棒グラフ

両川洋々

本気度を計る目盛りは銭だろう
なぜ過疎の叫び政治に届かない
お前だけが味方一升ビンを抱く
マジかいな生前葬をやると言う
宿題の辞世一句がまだ出来ぬ

板尾岳人

冗談を囃んでのみ込む聞き上手
追突をされておんなになりました
土踏まずいつもきれいなひとでした
首落ちた音するキャベツ試し斬り
三枚に開いてくれた妻の愛

奥田みつ子

エステより食のバランス考える
焦っても焦らなくても季はめぐる
墓地の草抜き幸せ問うてみたとても
黄昏れて白木蓮のほのあかり
自分では気づかぬ愚か繰り返す

河井庸佑

温度差が違う話で纏まらず
遅しく生きる雑草見て思う
こつこつと登り詰めたが軋む椅子
どちらとも取れる返事で時稼ぐ
意表突く秘策が洩れたとは知らず

川上大輪

無くなったゆとりへ笑いひと掴み
脳味噌に今日も乾燥注意報
答などどこにも置いてないこの世
教科書の桜は散ったことがない
猿ですかいいえ似顔絵なんです

小西雄々

白梅を好んだ亡母を追慕する
懐かしのメロディー歌手も年をとり
近頃は一度もしない回れ右
戦力外通知へ暫しオルゴール
税務署の階段足が重くなる

斉藤 劼

この闇もやがてさくらが舞うのです
水芭蕉の白この水が生んだ色
スタートの位置で呼吸を整える
葉脈を辿ると里の桑畑
ふるさとほりんごの花に包まれる

塩満 敏

シンブルが一番私の処世術
柳友が増えてにんまりしています
孫のため憲法九条守りたい
新しい日本の夜明けもうすぐだ
ツバメさん遠い島からお帰りなさい

新家完司

まだ冬が貼りついている膝小僧
ストレスは溜めぬ悪口噛み砕く
いつの間にパンツになったのかズボン
アドベンチャー・ワールド駅裏飲み屋街
酒量減る元氣印が失せてゆく

恒松町紅
春めいて来たと木の芽が言っている
腰曲げていてもやりたい欲が出る
もういいかい昔遊んだ友も老い
青空に誘われ背伸びするベルト
春うらら庭で明るい声がする

津守柳伸
イヤホンを借りた歌舞伎でフラメンコ
精一杯翔んで八十路の事勿れ

決まらない衣装本番もう間近
春告げる苦さほろほろ路の臺
完璧の掃除促す春の風

遠山可住

忘れたい昭和が日毎老いを責め
男ひとり夕べのおでんで朝が済み
御先祖は知らん知らんという八十路
高齢化過疎化給油所が消える
老いらくの恋木炭でお茶を点て

都倉求芽

記録的寒波がつづく梅だより
姿だけ一人前の冬トマト
戦時中の舌に外国語の調味料
呆けぬよう朝夕薬7種類
ゆったりとオーラを放つ春の森

土橋 螢
七草粥を汁椀にもう一杯
にんげんにもどれる水をもう一杯
花いっぱい植えて寿命と根くらべ
年齢がひとつ大きくなった春
極楽を探して歩く月あかり

西出楓楽

怖ろしや九九が怪しくなってきた
古稀すぎてからはもっぱら片想い
自信あるので真実をさらけ出す
後期高齢いまだ助走をくり返す
尊厳死希望さりとて餓死はいや

仁部四郎

転入児「八十八夜」で慣れたころ
前文を憲法記念日子らと読む
おむすびを孫と公園みどりの日
こどもの日ババの仕事の話聞く
母の日に子らの出資で財布買う

林 瑞枝

歯磨きを欠かさぬ若い虎の牙
無雑作に描いて絵になる北の海女
桜見に誘う昔の教え子たち
蜜蜂のきそうな菓子を誕生日
東京のニュースにそばの江戸風情

奈良番傘川柳会 創立65周年記念川柳大会

と き 5月26日(日) 11時30分開場
(昼食は済ませてご出席ください)
ところ ならまちセンター(奈良市東寺林町38)
TEL 0742-27-1151 近鉄奈良駅より
約10分・JR奈良駅より約15分

事前投句 「笑 顔」 大楠 紀子 謝選
(葉書に1句・4月30日必着・出席者に限る)

宿 題 「 仏 」 小島 蘭幸 選
「大 勢」 杉森 節子 選
「元 氣」 住田英比古 選
「新しい」 谷垣 郁郎 選
「実 る」 宮田 宜子 選
「時 間」 森中恵美子 選

出 句 各題2句・締切 12時30分(欠席投句拝辞)
会 費 2000円(お土産・発表誌呈)
懇親宴 5000円(申込み制・事前投句と同じ)
投句・問合せ先

〒630-8014 奈良市四条大路1-4-52-401
山田 順啓 TEL/FAX 0742-34-4157
主 催 奈良番傘川柳会

第136回 大阪川柳の会

日時 6月3日(月) 午後1時開場・2時締切
会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
宿題と選者(各題2句・席題なし)
△「鳥」土田 欣之 △「書」天根 夢草
△「素人」垣花 和夫 △「喧嘩」住田英比古
会費 1000円 欠席投句6月1日まで 本田智彦宛
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706

いとおしき互いに抱いて五十年
信号を走り体調確かめる
大学を祝える孫が居てくれる
PM2.5啓蟄首を引っこめる
気がつけば神さまいつも傍にいる

前 たもつ

温故知新

「谷垣史好句集」より

ほしがれいところん搾取された貌
思春期のある日突然だまり込み
大本営発表ある日突然負けました
天井も屋根もぶち抜きたい暑さ
出直すより外はないのにまだ夫婦
塩されて焼かれて鯛の晴れ姿
寮歌歌えば中年の血もたぎり
無縁仏にきょうも季節の花があり
口も耳もふたして社宅に住んでいる
訥弁のはらわた煮えくり返ってる

谷垣史好

大正15年1月2日 兵庫県明石市に誕生
昭和17年4月 大阪商科大学に入学
昭和18年 学徒動員で台湾に派遣
台湾動員中に肺疾患に冒される
帰国
羽曳野病院で川柳入門
川柳塔社同人
川柳塔社編集委員
常任理事
逝去 68歳
昭和20年末
昭和39年頃
昭和43年11月
昭和56年(63年)
昭和58年(平成2年)
平成3年10月26日
平成7年6月
『谷垣史好句集』刊行

川柳塔の

川柳讃歌

(101)

木津川 計

あつ春が来ている福寿草の蕾

澤井 敏治

だれかさんが見つけた小さい秋があるように、敏治さんは小さい春を見つけたのです。福寿草がいいですね。「スプリング ハズカム ウインター イズ オーバー」を告げて小さな蕾が爆発する日を待っています。

詩人・杉山平一さんは、つぼみが雷を抱いているのに気づいたのです。「とき至って野山に／花よ爆発するのだ／遠い遠い花火のよう／その音はまだ／この世にとどいてこない」と。優しい心はええの人に届くのでしょうか。

三番目に婆ちゃん好きと言つてくれ

齋藤 さくら

「残念ながら世界で二番目の味です」とPRしたレストランがありました。一番は、無論おふくろの味です。女房の味を売り物にしないのはなぜでしょう。「フクロの味やさかい」と言うたひともいました。

幼な子にとつて一番好きな存在はママです。二番がパパで、三番がお姉ちゃん、四番が——ちゃん、五番目はええと……でなく、三番目でしたからさくらさんは「寿司くいねえ」の森の石松以上の喜びです。

知っているが私知らぬと姑を立て

樋口 輝夫

今日び珍しくよう出来た嫁さんです。「誰でも知ってるやないの」と返されたら姑さんは立場がありません。「へえーお姑さん、よう知ったはりますねえ」と感心されて腹立てる、そんな変人はいません。家庭の平和は相手を立てること、と「サザエさん」一家はマスオさんをはじめ、みんな気配りストでしたから三世代が同居してモメごととは起こらなかったのです。今号、敏治、さくら、輝夫お三方のうれしい句を喜びとします。

歩いてても歩いてても星がきらきら

三好 專平

「曾根崎心中」のお初徳兵衛は道行の途次、見納めに「空も名残り」と見上ぐれば、雲心なき水の音、北斗は冴えて影うつる、星の妹背の天の河、を最後に見たのです。その夜が曇りでなかったのを救いとしします。

専平さんの「民族の詩歌」が力作です。同人にこれほどの碩学を擁する川柳塔の強み

です。民族の詩歌は月ばかりでしたが、星が古代どうたわれたか、いつかお教え下さい。

真つ赤な夕陽に学ぶ人生終い方

古手川 光

最後の最後まで燃えながら退場する人がいます。新藤兼人さんは最後の作品「一枚のハガキ」を九八歳で完成させ、一〇〇歳で逝きました。日野原重明さんは「一〇〇歳なんて、まだまだゴールどころか始まりです」と二年前の新聞で言われ、今一〇二歳。

光さんもこんなお二人に倣おうとしておいでしようが、僕は諦め、あと三年ぐらいを中ぐらいの光度で退場することにしましょう。

水を買うまでに健康氣をつかい

早川 遯行

そんな人がどなたの回りにもいたはりません。塩も砂糖もグラムで計るほどな知人がおいででした。人混みに出るときは夏でもマスクをし、屋台のラーメンは不潔やからと決して食べず、六四歳で逝かれました。

健康目的の生き方は制限されます。僕はどれほど逆らった七七年だったことか。今を精神的に豊かに生きられるなら、健康にはあまり気をつかわず、好きに自由に生きるのが一番と思うのですが。

〔上方芸能〕誌発行人

新川柳鑑賞

(15)

麻生 路郎

時代ですなアと息子を持つ同志

(日本村)

「うちの息子は僕はお父さんをよう養わんよと、ハッキリしたもんだ」

「フーン」

「では働けなくなったらどうしたら、いいんだと言ったら、養老院へ行つたらしいじゃないか。有料の養老院があるよと澄ましたものさ」

「そうかね。うちの息子も、僕は医者のおとなかつがんだよ。医者なんか莫迦々々しくて、全然うけつけないんだ。聞いて見ると映画の監督をするつもりらしいんだ」

「時代だね」

「全く時代だよ」

親だけが大事晩成まだ信じ

(薫風子)

大学を出て、コネで就職はしたが、さてそれからの出世街道は遅々として進まない。いつまでたっても係長である。しかし、親というものはありがたいもので、

「うちの子は大事晩成型でなア」

と、誰にでも話し、いつかは課長になり、部長になり重役の椅子にもつくように信じ切っているのである。親としての愛情が巧みに描かれている。

断固許さず戒名にして拌み

(一 瓢)

この句は構成上、非常に省略されていることに気付かれるであらう。「断固許さず」は何を許さないのか、それは結婚を許さないのであることは想像に難くないであらう。誰が許さないのか、それは両親と言うよりも親父が許さないものであることは、断固と言う堅い文字を使っているところから想像し得られる。その結果事件が発展し、この世で添えなければあの世で悲劇に終つたことを「戒名にして拌み」と省略している。これほど時間的にも省略がほどこされて内容がハッキリとつかめる句は稀である。

焦げ臭いぞとだし抜けに父歸る

(春 巢)

朝出たら晩にならなければ帰らない父—それが思いがけない時に、ひょっこりと帰つて来るのも父である。

それもカドから「オイ焦げくさいぞ」と言い／＼戻つて来るのである。

父の一面を巧みに描出して余すところがない。

金盞父の叱咤のように落ち

(淡 舟)

ガラガラガラと大きな音をたてて、金盞が棚から落ちただけであるが、それを父の叱咤のように落ちたと比喩法で描写したところに、この句の面白さがある。ガラガラとよく叱りするが、ケロリと忘れて朗らかな父の人格がうかがえるではないか。

父なるが故にテレビも値を調べ

(清 潮)

テレビブームではあるが、まだまだテレビへまでは手にとどかない階級が多い。こどもたちにとってはせいぜい風呂屋や喫茶店などで楽しむぐらいのものである。「お父さん、テレビが欲しいなア」と言う声がお父さんの耳にたびたび這入るので買えないことは百も承知だが、一体幾らぐらいで買えるものかと値を調べたというのである。父親の心理をうまくつかんでいる。

殴打されて父兄皮肉な禮を言い

(夜 潮)

「うちの子はたたき直さねばモノにならんせん。ようたたいて下さった。」

と父兄は言うが、腹の底では決してそうは思っていないのである。あの教師は怪しからぬ。あんな教師に可愛い子供は安心してあずけられないとフンガイしているのであることを巧みにこの一句に盛り込んでいる。



西 出 楓 楽 選

大阪府 小 栢 こずえ

平凡という暖かい日を浴びる
晴は烟雨は大脳きたえてる

種袋振れば春恋う音がする

育てたい花は枯れても草は増え

毛糸編む一目一目の子守唄

箸だけを持って食べられる幸不幸

川崎市 成 田 せいじ

歌舞伎座を持って行きたい黄泉の国

タダ友と電池切れまで長電話

義理チョコが絶えて親父の権威落ち

寒暖差一日置きの衣替え

乾盃のビールも温む長ばなし

I Tに辞書も書籍も呑み込まれ

唐津市 岩 崎 實

わが棚は奨励賞の小さき楯

いにしへの祈りやさしき紙の雛

雛飾り何とゆかしき桃の歌

パンジーの霜に負けないその強さ

地藏さん春がきました歩きましよう

特例をつくり原則乗りこえる

北九州市 岡 田 幸 生

父からの小言八十円でくる

美しい人に出会おうと目が冴える

子との距離広がつてゆくカタカナ語

レンジでチンそんな暮らしに馴れ独居

生活の知恵が湧かない全自動

家計簿を開くと夢が萎みだす

尼崎市 小 池 幸 子

八十路坂試行錯誤のスロー旅

寒さ除け囲うボタンに春陽さす

雨音もやつと春めく弥生月

寒い夜は家族揃って囲む鍋

散歩道小川のさぎに会える日も

推敲に推敲重ね迷路入り

八尾市 前田 紀雄

世の中は金じゃない真心想だ
被災者は今も心は変らない

貴方が居て私が其処に居る至福

地団太を踏む行方不明の遺族

はんなりと老いほんのりと味を出す

最終章糊代多く取っておく

横浜市 巖田 かず枝

子も孫も元気であればそれで良い

能トレに孫のドリルが丁度良い

ルビー婚やつと仲良くなれました

良いらしい惚けないための口喧嘩

祈る事多く今夜も眠れない

物忘れだけとお酒は忘れない

和歌山市 平田 元三

素人でこそそのプランが大ヒット

新道路一つで街が様変わり

犯人がらしく見せないサスペンス

勿体ないからも始まるごみ屋敷

入れ歯して急に優しくなった顔

また連休愚痴をこぼしている財布

泉佐野市 稲葉 洋

笑つたら残っているよ幼な顔

潮時だ許そ深手になる前に

人情を杓子定規の線で裂き

法律は温味冷気の使い方

IT派も験を担いでいる不思議

数字にはならない勘という成果

米子市 野川 宣子

納豆を百回混ぜる律儀な手

満点の答え付け入る隙もない

変わり身が早くて影も踏ませない

付かず離れず寄り添う影は母だろう

円満が好きどつちにも転ぶ知恵

ダンボール中で新芽が自己主張

箕面市 酒井 紀子

失言が気になりだして不眠症

一段ずつ静かに上る恋二章

家の階段お助けマンは手摺です

山寺の石段仰ぎ足竦む

尖った話酒で濁して丸くする

イエスです返事してから不安です

松原市 市川 雄太

花粉どき空気汚染も引き連れて

目を閉じて心のレンズのぞきこむ

集会で一人浮いてる能天気

卒業の季節別れが待っている

ありふれた言葉で思い届けます

態度次第で周りの目線変化する

広島市 岸 本 清

息抜きの旅の疲れがどつと出る
靴下の指のあたりに通気孔
長老の誰に聞いても腹八分
差し迫りやつともたげた重い腰
引き摺らず湯船に流す蟠り

竹原市 國 實 力

日向ぼこしてりやいいのに杖で出る
オーイお茶言える幸せあと少し
かばい合う為の相槌だつてある
ご近所に聞こえるようにお経あげ
美しい嘘なら正座して聞こう

竹原市 土 井 輝 恵

斯かる時へそくり使う主婦の知恵
花咲かす自然に感謝陽を仰ぐ
嗚呼親子生きる姿勢が似て来たな
点滅の青信号に足もつれ
救急車呼んでドラマは続いてる

山口市 中 前 幸 子

疑いが晴れてこころのくもり拭く
参道の鳩も九条意識する
日本人だ冬でも美味い冷ややつこ
亡父の樹にジャンプしている愚かなり
シーソーゲーム貸し借りは無しにする

宇部市 高 山 清 子

横道にそれた話が弾んでる
笛吹けど踊らぬ人は芯があり
そらされる話と知りつ風を向け
八月の雲は昭和を呼びさます
口裏を合わせ肩の荷重くなる

松山市 神 野 きつこ

春一番鳥の鳴く声艶つばい
風流れ人の一生四季に見る
右を見て左向いたらすぐ忘れ
赤い靴まだまだ似合うフラメンコ
彼岸来る実家の墓に参ろうか

今治市 渡 邊 伊 津 志

冬林檎大きく齧り合いたいよ
自画像が何処へ逃げてもついて来る
嫌なことだけは忘れぬ記憶力
作句から人柄が出るほのぼのと
人の輪の中で揉まれて錯落とす

大洲市 花 岡 順 子

良薬の苦さを挫折知っている
学歴後職歴のない素浪人
還暦はスタートの位置赤を着る
埋もれ火に油を注ぐおせっかい
アベノミクス家は前から火の車

四国中央市 篠原 久

後期高齢膝の痛みは本物だ

この頃は鏡もジョーク上手くなる

口喧嘩妻に一勝していない

麦踏み of 記憶脳裏にちゃんとある

煙立てねばサンマは焼いた気がしない

香南市 桑名孝雄

おおよその進路決まった孫四人

必須科目の酒は老爺が受け持とう

時代がかった酒だが孫に引き継ごう

アベノミクスあ of 紙切れが生き返る

あざなえる縄を経験した八十路

宿毛市 増田純子

占いの好きな女の薄い肩

ピアノソロ聴こえる本を開くとき

汚染する空にんげんに罪がある

切なさを哀しみを抱く海が好き

励ましは寄せては返す波の音

北九州市 小松紀子

魚にも骨抜きなんて味けない

平穩無事今日も幸せありがたい

とんがるのはよそう七十二の春だもの

母さんの膝大好きと猫昼寝

きのうより今日少しずつ変りたい

佐賀市 清水園實

露天湯も薬用風呂で間に合わせ

あれもきくこれもいいよとテレビ言い

人生は老いて川柳おもしろく

ふるさととは心ときめく山や川

八十になつて今更ダイエツト

佐賀県 真島久美子

その中で掴む小さな小さな春

雲一つもう思い出す事もない

散らかしているのは誰の嘘ですか

絵心の無い人の絵がよく響く

綺麗事だから綺麗に組み立てる

札幌市 佐藤登美子

ボカボカ陽気猫も家出 of 恋病い

暮れ泥む漫ろ歩きのショッピン

朝ぼらけ夢見心地で聞くラジオ

謝れぬ男 of 意地が躊躇する

書き順が違ふと孫に教えられ

弘前市 肥後和香子

銀の皿にわたし盛りたい夜がある

まだ歩く波瀾万丈の闇

風通し良い男と飲むハイボール

なつかしい時間分けたい人と居て

雪よりも白いこころを差しあげます

塩竈市 木田 比呂朗

連休に孫とベツトも預けられ
七十路の妻カルチャーで磨き出す
マンネリか三時のお茶が渋くなり
投薬もオプシヨンですという主治医
終活のマニユアル妻が読みはじめ

東京都 井上 つよし

八十過ぎた昔の餓鬼のクラス会
叱られた頃思ひ出し孫叱る
頬つべたを抱えて順番待つ歯医者
水仙が笑顔並べる友の家
平凡を幸せと知る世界地図

東京都 高岡 弥生

ニッコリと都合のいい事だけ聞いて
味噌汁とお米要求する身体
何処へ行く日本の四季の春と秋
どうみても私初老の仲間入り
肌は無理気持ちだけでも二十代

横浜市 長島 亜希子

柳誌開け先ずはあなたの句を探す
塩麴様料理ほめられる
児が見てる赤信号は渡らない
路のとう食べ頃なのによその庭
日本人なのに展示の書が読めぬ

富山市 有澤 嘉晃

子育てが母の若さを吸い尽くす
来世まで歩いて行ける二人なら
二度とない人生だからゆつたりと
補聴器がそつと聞いている春の音
もう少し現世にいたいから歩く

岐阜市 平野 あずま

珈琲の香り感性蘇る
誰にでも開く私の自動ドア
脳みそへ仕舞った文字が出てこない
バツカスの招きへ嬉々と裏通り
迷いなく来た年金にハグをする

江南市 脇田 雅美

途上国に一步入ればスラム街
同僚の噂話を聴くトイレ
残高と余命と合わす老いの日々
ストレスを捨てなげや今にパンクする
一番より真ん中狙う人間味

豊橋市 藤田 千休

金欠できつと始まる長寿税
メモ帳に未定の予定入れておく
ネオン街紳士の仮面脱ぎすてる
宝石は嫌いと妻のおもいやり
上賀茂で十二単の風と遇う

京都市 清水英旺

盆梅は窮屈そうに匂つてゐる
寄付募る盲導犬に寒厳し
寒ゆるむ春を探しにウォーキング
春一番余計なおまけスギ花粉
被災びとを鼓舞する春の息づかい

八幡市 今井万紗子

一番風呂呂男の序列保つてゐる
人生はバズルのんびり解いて行く
手の内の秘伝ようやく陽の目見る
よう笑う妻に預けたボクの下駄
黄信号すぐアクセルを踏みながら

大阪市 阿野寿美子

相性も長い年月歩みより
格好良いらせん階段倍疲れ
うっかりと滑った意見喜ばれ
突然に優しい妻の下心
昔ばなし語る楽しみ祖母にあり

大阪市 太田としお

言い訳無用勝たねばならぬ勝負事
失敗を笑い飛ばして生きている
新婚です仮免ですのお許しを
だらしないこんな日本に誰がした
石は嘘をつかない黙つてゐる

大阪市 柴本ばつは

殺し文句これには弱い石頭
石頭ふにやりとさせるお母ちゃん
あの父に我慢したのね母の嫌
待つことに耐えて小さくなった母
引き金を上手に握る母の勘

大阪市 高杉力

ユニクロと分かるダウンにまた出会い
飲みに行く話まとまる煙草部屋
酔つても高そうな靴と履き違い
中締めで一人もいなくなる宴
失恋のたびに作つた恋の歌

大阪市 栃尾奏子

明日船に乗らはる方と見る桜
さくらさくらあの日に置いて来たもしも
子供からもらう迷いのない明日
私を乗せて孫らの縄電車
向き合つてみりや黄昏も良いもんだ

池田市 上山堅坊

空の旅着地にそつと拍手する
僕目の目をばちばちさせる春の風
健やかな命を延ばすフィットネス
健康に感謝してるよお母さん
泥臭いまんまの僕が好きである

泉大津市 助川 和美

嫁さんに長生き詫びる母卒寿

駄菓子屋で五円で買ったラムネ菓子

青田消えまた新築の家が建つ

母が言うそんなもんやに励まされ

晴れの日ば車椅子にもスケジュール

貝塚市 石田 ひろ子

老人会スマホ使つて座が白け

善哉のおかわりをして鬱を抜く

冬の旅蟹ばかり出る海の町

百均のチョコもリボンで格を上げ

合格の頬に寒風暖かい

貝塚市 吉道 あかね

雑草も春だ春だと騒ぎ出す

人は人歩幅を変えないことはない

もしももしもを心配してる返し縫い

悲しみが透きとおるまで煮詰めてる

祈ること忘れないこと震災忌

河内長野市 大島 友子

成田屋の睨み利かせる河岸の魚

あれこれと世話焼き出掛けカギ忘れ

同窓会セビアの縁が蘇る

年毎に早く来すぎるバースデー

五十などとうに越えたが五十肩

河内長野市 辻村 ヒロ

友と会い口が勝手にしゃべりだす

出無精に刺激を持つて友が来る

羨ましい行動的な友元氣

おしゃべりがしたいと口が寂しがる

背中抱き押してくれてる友がいる

河内長野市 穂口 正子

息を継ぐ仔猫の命あと少し

うちの子になった猫の死浅い縁

一日中夢の続きが気にかかる

一合で刺激が巡る脳天に

九条に揺さぶりがける島二つ

堺市 羽田野 洋介

脳トレのつもりが刺激強過ぎて

ガーデニング土地は買えぬが土を買う

新天地人縁地縁何もなし

万策尽き後はよろしく神頼み

自信過剰慢心油断忍び寄る

堺市 増田 和幸

軍隊は新型兵器持ちたがり

軍隊は兵器を持てば使いたい

ケイタイもアナログ族は重荷です

円安は大手企業が一人占め

家電品過剰な装置付け過ぎる

堺市 大和 峯 二

しなやかな強さやさしく滲みでる

輝いて見えた未来がこの程度

国防と言つて九条いじる人

物価上げ年金暮らしたまた泣かせ

荒れた世を生きる人生また楽し

高槻市 田 中 由美子

下手な字が不気味にカルテ埋めている

深い絵を見たそれから不眠症

もう一步駒を進めてみる勇氣

踏み台にされる男もいて平和

今日生きた証の一句積んでおく

高槻市 鳥 居 宏

もうすぐに梅が咲くねと日向ぼこ

ちとばかり角のある人味もある

くしゃみしてよい噂だと決めておく

三峽を下る諸葛の夢を追う

ガウディの塔は未完がふさわしい

豊中市 荒 巻 夢

雪国の人も巻き込む大吹雪

かき餅を編んで吊るした囲炉裏端

友の字の乱れに心ざわめける

ひとり居の友へぜんざいおすそ分け

コーラスの声ひろがりて春近し

豊中市 石 橋 優 明

反抗期インターナショナル歌いなさい

雪の白多くの色を幻視する

まんぼうが寝転んでゐる四畳半

月明かり電信柱のびをする

廃校のグラウンド刹那笑い声

豊中市 源 田 啓 生

塩鰯食べて厳冬乗り切つた

酒絶つてそれで長生きするつもり

八十路来て何やら楽しいことばかり

生かじる宇宙論読み眠り付く

三月は桜と共に疼き出す

富田林市 関 よしみ

今日一日を咀嚼する二十四時

青写真どおりに歩む定年後

結び目をほどこいて蟠りを解く

リーダーへすべて託して渡り鳥

暴走の噂にレモン絞り切る

富田林市 山 野 寿 之

咲くまではじつと我慢をそれも愛

今日こそは決断せよと言う鏡

朝一番ラジオと話す基礎英語

たつぷりの朝日はいじめなどしない

微笑んだ春にはらはら名残雪

寝屋川市 荒川 鈍 甲

箕面市 村田 恵子

紅梅の枝がからめる天守閣
黄昏に枝垂れて愁う夫婦梅
ひと雨が春を迎えに二月尽
わけもなく月に向つて吠えてみる
永い世にわが一日の陽が昇る

寝屋川市 岡本 勲

歩幅合わぬが不思議ともった五十年
化粧落すと皺の素顔がおどり出る
よその子も叱る人居た路地の裏
少年の僕にばったり出合う路地
いい苦労したんでしょねいい顔だ

羽曳野市 磯本 洋一

寒椿小声で春を呼んでいる
遠い日のアルバム開く金婚日
わかったか叱る言葉の接続詞
山笑う休む間もなく色替える
べつたらがまだ嗜み切れる嬉しさよ

羽曳野市 藤原 大子

女三人寄つて会話に不自由せず
吼えるのは弱みを隠す時らしい
親離れする子に親が離れない
やめますか言われて未練迷いだす
人好きで三猿無理と悟らされ

針の穴こんなに小さかったとは
知らない時はだまって笑つてます
東大でなくとも名医あちこちに
真夜中のラジオ体操ユーチューブ
いとこいの漫才も見るユーチューブ

八尾市 田邊 浩三

三つ星をにらみドア押すレストラン
マスクしたら知らぬ人から会釈され
腰痛に一番辛い下り坂
わが財布ポイントカードで膨れてる
晩酌を旨くするため散歩する

八尾市 西川 義明

体罰か愛情ですかその拳
満開に誘われ伸びる万歩計
庶民派の居酒屋知らぬ永田町
中高年きみまる節が消化剤
生き様は寿命の長さより深み

八尾市 山根 妙子

密やかにきざらぎが過ぎ芽の柔ら
冬と春綱ひきをみてお出かけて
通勤の波に点点春コート
春霞それにつけこみ黄砂風
T P P 議論ばかりが上すべり

大阪府 神野 千恵子

紫煙とは誰がつけたかおこがまし
煙たいなそれも存在感のうち
化けて出るほどの未練もないこの世
齢ですと言われるだけの医者通い
アベノミクス笑う富裕と泣く庶民

大阪府 畑 中 節 子

もう少し話がしたく回り道
息白し歩いて一句万歩計
さざん花の丸く刈られて丸く咲き
何もせぬ事に疲れて日が暮れる
衰耗の耳にも目にも雲掛かる

神戸市 木 村 忠 義

ありがとう言うとか心が春になる
捜し物おかげで部屋が整理され
おまじないみたいに使う塩・胡椒
いくら得でも今要らぬ物要らぬ
腹八分酒も八分で我慢する

神戸市 玄 番 美恵子

思いきり泣いていいよと母の膝
味付けに迷えば母のさしすせそ
世渡りは下手だがいつもいい笑顔
ワンチャンス見事活かして夢叶う
風さやか老春の夢ペダル漕ぐ

神戸市 新 保 登美子

千円になれば止めるという煙草
迷う程ないが決まらぬ今日の服
ちよつと手間かけておしゃれの上手い人
燃え尽きた私を睨む達磨の目
偏差値が勝手に決めた志望校

神戸市 能 勢 利 子

川柳に出会って視野が広くなる
空気抜け毬も私も弾まない
占いはいいことだけを信じてる
行き詰まり空を見上げて雲に問う
諦めて売った投信値が上がる

川西市 大 坪 一 徳

選抜が春を呼ぶ呼ぶ甲子園
書くことの無い日が続く日記帳
ウォーキング星取表で続いている
夢よりも思い出ばかり浮かぶ日々
延命の治療はせずと約束す

川西市 山 口 不 動

うぐいすの初鳴き聞いて豆ごはん
人生の下り階段たのしまん
老人会階段避けるコース行く
昇天もエスカレーター使いたい
売国奴罵声の中のおぞましき

無器用な男に惚れた影法師

篠山市 佐々木 勇

何よりも人間味ある手紙好き

涙腺の刺激が緩むニュース記事

茜色浴びて至福の湯に浸る

恙無く一日が過ぎていく平和

篠山市 谷 田 多美子

待ちぼうけ心くばりが無駄になり

へなへなとしては居れない春のおと

フライパン老婆一人の昼料理

みちづれの腰痛しずか五月晴れ

川の字の真ん中で猫躰かく

三田市 雑 賀 一 泉

トンカチで叩くトンネル事故のあと

下戸だけど新酒となれば別のもの

寝不足を昼寝で埋めて野球見る

賞味期限妻は僕ほど気にしない

CTの結果ともかく縄のれん

宝塚市 丸 山 孔 一

何となく怖いカラスと睨めっこ

若者よ指で話さず声を出せ

晴れ曇りところによれば雨とやら

不況でも春の草木は目を覚ます

脳が出す指令に手足遅れ出し

知らず知らず手摺を杖に歩いている

旅立ちの朝母が持たせた守り札

カリスマのひと言会議凍りつく

光る海いかなご漁にカモメ群れ

良い人というイメージは重荷です

岩出市 村 中 悦 男

おだやかに余生を刻む日向ぼこ

肩に手を置けば二人に春の月

足跡を真つ直ぐ残し義理の道

意識して余生の道に腰のばす

シャッター街靴音だけを置いて行く

紀の川市 楠 原 富 子

口車に乗った愚かな欲の皮

いじめの根芋蔓式に現われる

戦意喪失妻に弱点にぎられる

語り継ぐ家風消えつつある社会

瀬戸際で踏み止まった自尊心

田辺市 大 峠 可 動

はや五月出雲大社は太祭礼

晩年のわたしが抱くは膝小僧

悠久の時を刻んで物忘れ

輝きを捨てた種火を抱いている

風を押す風も男よいつびきよ

田辺市 小川イセ

やわらかい陽射し待ってるすぎなの子
やわらかい言葉待ってる日暮れ時
分け隔てない陽の温もりのありがたさ
洗いざらい聞いてもらえる無二の友
好奇心衰えぬよう竹を踏む

和歌山市 森下よりこ

ぼたん雪春のけはいを連れてくる
水ぬるむ芹を散らしたちらし寿し
後期高齢モデルチェンジをして生きる
リフォームが楽しい祖母の着物たち
孫の振袖仏様にも見せてあげ

鳥取市 近藤秋星

待望の春に背いて入院す
麻酔が切れた途端傷口痛み出し
手術した夜は転々と眠れない
手術跡見たは翌日午前五時
病棟の看護師みんな優しくて

鳥取市 谷口回春子

宝くじ当たると怖いから買わぬ
無理なこと考え続けくたびれた
したたかな心が覗く二枚舌
できもせぬ口約束を反古にされ
耳元のささやき声が嵐呼ぶ

鳥取市 津村律子

古稀の雛ボロは着てても凜と座す
蔵入りの大皿小皿出番来ぬ
手作りのいかなご届き春を盛る
我が日本初夏の南国北吹雪
父の愛娘を抱いて天寿する

鳥取市 山下凱柳

内緒だよ言って告げ口触れまわる
ダンス教室通う主人にふと疑惑
金運を願う財布に蛇の皮
大器晚成そうは言ってももう古希だ
招待席小さくなつて椅子座る

倉吉市 岡崎美知江

寒くても春への角度ゆるくなる
寒い夜は愚痴も煮込んだキムチ鍋
生きがいにそえるいい彩見つからぬ
風知らず飾られている奴風
許される角度を知つて舵をとる

倉吉市 中村毅

脱原発アベノミクスに掻き消され
コンビニが明々照らす田舎道
だとしても責めてはならぬ杉花粉
寒緩み釣られて僕の気も緩む
お持てなしするから寄つて福の神

倉吉市 堀 かずこ

わたくしの元気のパワーカラオケよ
お陽さまは人を選ばず照らしてる
サスペンス刑事気取りで推理する
やきもちをやくなと彼はくぎをさす
責めるより許す心がすばらしい

境港市 中井 虎 尾

黄砂飛び夕日は紅い月に見え
財布買う中味の金を全部出す
来た春を背に白鳥は北帰行
ハッキリと紅く咲いてもボケの花
寄る波もリズムで軽し春の海

米子市 池 岡 たけし

ダンボール子供達の夢を満たす家
三寒と四温が遊ぶ春はどこ
平和な世命の限り繋がねば
年老いて日毎に忘れ物が増え
八十路坂息災神に手を合わせ

米子市 小 野 鶴 子

零点でも明日があるさと子の陽気
レントゲン医者が無言が長すぎる
袴はき土手の土筆も晴れ姿
ひそひそ話尾ひれが付いて泳ぎ出す
耳鳴りのつらさ医者には判らない

米子市 田 村 周 子

母の影いつでも胸に住んでいる
社会悪影響受ける子供たち
夫婦円満これから先が難所です
迎春花春の息吹きが聞こえてる
世の為に尽くした人が春待たず

米子市 湯 浅 俊 久

借金を返すと言われ思い出す
ドラマには別嬪さんを所望する
家という器の中で隙だらけ
子に預け孫に使ってほしい金
真央ちゃんをソチで待つてる金メダル

松江市 相 見 柳 歩

ベテランを碎いて時代変えますよ
ふところはあなたの息で温まる
失敗を錨に変えてまた進む
カラフルな絵手紙ころあつたまる
誕生日試すつもりはないけれど

松江市 武 島 ちよえ

桜さくら咲くの待ってるうちが花
郵便がことりと春の音で来る
大気汚染二重マスクをして出掛け
展示会色紙に恥じぬ句が出ない
毒舌も友なればこそ気にもせず

松江市 藤井寿代

ひらひらを巻いて蝶々になる四月

ボランティア94に励まされ

旗振りと口だけは誰にも負けぬ

疑問符をつけたまんまのアベノミクス

曲ったり平らにみえる私の坂

松江市 山根邦代

日向ぼっこしながら弾む毛糸玉

毎日が日曜だけど腹は減る

東北を思えばなにを贅沢な

慰めも在り来りでは掛けられず

耳の日に良い事だけを聞けと言う

安来市 原 煩惱児

病院の窓から覗くそぞろ春

節分も鬼にはなれぬ好々爺

狭い地球何時も何処かでする戦

清め塩丁度いいよとゆで卵

病院から故郷の山山笑い初む

岡山市 工藤 千代子

飲み込んだ言葉ゆつくり吐く湯ぶね

慰めの言葉要らぬと椿散る

曖昧なことばで逃げる柚子胡椒

だとしても言い方もある薔薇の棘

傷つけぬ言葉選りつつ剥く林檎

岡山市 藤成操江

いい事があつて電話をかけまくる

山間の里にメダカを見に帰る

月三度金封書いて身が寒い

意に染まぬ言葉並べた日の疲れ

母さんに似てきたような夜の鏡

瀬戸内市 東 楨 ますみ

ピンク色まとい女をまだ捨てぬ

文庫本ゆつたり私遊ばせる

春キャベツ秘密ペラペラしやべりだす

血糖値上がりシナリオ書き直す

ゴミ袋カラスに中身見すかされ

備前市 森 ふみか

スイッチを切ると素直な風になる

痩せ蛙背骨に刻む山や谷

真つ直ぐに生きたらきつとすぐ折れる

中古車のやたらに高いエンジン音

子は一人それが大きな力瘤

岡山県 田中 恵

生きているよろこび大地強く踏む

おだてられ壺にはまつている尻尾

負けて勝つ夫無口を武器にする

ほめられてネタまで明かすお人好し

大地萌ゆ宝くじでも当たりそう

竹原市 若年幸子

揺らしても主張変えないコルセット
後期高齢使用注意の赤ラベル
アペノミクスお金使っていいですか
生きてゆくしんどい坂よ亡夫を恋う

竹原市 六田半徳

木瓜の花二年振りです蕾つく
被災者の夢よ叶えよ三年目
ガス利用メタンハイドレート有望視
桜咲く前に下見のヒヨの声

高知市 三谷待太郎

小病みして空の青さよ過去映す
いいことが長くもつよな籤八卦
三本の矢安芸の元就苦笑い
うたかたのバブルだったらお断り

福岡県 本田さくら

炬燵つて眠りを誘う魔物です
紙芝居夢をもらった遠い日々
孫と自分どちらが好きか試すタマ
巳年です執念深く日々歩む

唐津市 北村松風

犯人へ声紋という決めてあり
鳩バスの窓から亡母と二重橋
参拝に金毘羅駕籠の世話になり
悔いの無い人生なんて嘘くさい

唐津市 吉富節子

春風も恐怖に変わる見えぬ粉
隕石落ち地球案ずることが増え
あどけない顔でジャンプの金メダル
プライドを脱いで屋台の友が出来

シドニー 坂上のり子

珍味あれこれしまわれたまま賞味切れ
北の港ばかりに別れある演歌
何かある何かあるぞと急ぐ蟻
鈴の音がどこかでしてるような闇

札幌市 富永恵子

冬の空何かせねばと雪降らす
彼岸くる雪のフトンがうらめしい
引き出しに一ぱいあつた夢だけど
サン格拉斯こんなに眼にも優しくて

弘前市 高森一呑

涙こらえてると傷が丸くなる
武者ぶるいしてる傷だらけの鎧
月と星ボタンはいつも掛け違い
かざぐるま水子の風がすすり泣く

つくば市 嶋本喬

妻くしゃみ小春日和に杉動く
さあ春だウォーキングだ再開だ
仏さん見てる仏壇孫閉める
鬼の面かぶって孫は豆投げる

東京都 大竹 一良

矛盾だが正常という無神経
支え合い感謝で過ぐす老いのみち
金の要る話になると雲隠れ
拒否すると決めた信念すぐ忘れ

佐渡市 高野 不二

外出もしないで風邪をうつされる
気味悪い様に上つてゆく株価
一日中閑で本読む一時間

薬呑む順序昨日とまた違い

熱海市 三谷 圭角

富士を觀て知るわが生涯の短さを
脛に疵持つて人間丸くなり
スカイツリー上り人智の極み見る
腰痛に鍼即効の有難し

静岡市 渡辺 芳子

渡す事出来る当てない手紙書く
こだわりは捨てて生きよう榮々と
いい曲を聞かせ満開小さき花
陽が昇るから私も生きられる

愛知県 樺 嶺志

名を呼ばれホツとと不安受診待ち
写真見る医師の顔見て重さ知る
手相見て長生きするに嬉しがり
政治家を政治家と言う勘違い

大阪市 浅井 公平

悪女とは噂によればみな美人
アベノミクス新内閣へ風吹いた
飲べえの巢前を通れば中のぞく
句が出来ずただウロウロし日が暮れた

大阪市 内田 志津子

川の下に生きてみたいなささらと
良い人と言われ世間が狭くなり
木洩れ日を浴びて心に春が来る

愛犬が話し相手となるくらし

大阪市 岡田 元

遊びから学んだことも多かった
公園に子らの声なく塾はしご
下手な絵も誰にも描けぬ味がある
チヨコチヨコと孫の突進鳩逃げる

大阪府 坂口 公子

星の夜は少うし刻を盗ませて
出渋ったたつた一步が悩ませて
ひとかどの心算で見入る自分の画
ガラス窓作らぬ貌が住き来する

大阪市 寺本 実

老人の夢は段差のない暮らし
骨づくり朝はミルクと決めてます
いじめる子いじめられる子根はひとつ
石段を見上げためいき引き返す

大阪府 西川 冷子

大阪市 前川 善之

マスクして美人隠すは勿体無い
厳冬で花は枯れても草強し
エクササイズ真似ごとだけで音をあげる
月遅れやつと聞かせるホーホケキョ

大阪市 梅里 南天

雨の日は歌っておくれ蓮華草
世を映す川面にそつと足をつけ
マスクする美人の率がふえていく
雲のよに死んでゆきたし保証なし

大阪市 平井 露芳

円安もガソリン上り喜べず
人相も変える葉の副作用
空海もびつくり高野山赤字
レプリカで一本松が踏んばった

大阪市 藤田 武人

ここ一番亡父のネクタイしめて行く
カタカタが狭いリビング駆け回る
キズありのリング飾らず人気者
コーヒーが繋ぐ夫婦の良い時間

大阪市 藤原 千恵子

私の愚痴愛犬だけが聞いてくれ
古里の荒れた畑を気にしつつ
音も無く誰も通らず深い雪
君の声一本松のバイオリン

生き方を探し求めて遍路旅
表より裏に支える苦勞あり
頑張れば成らぬ事でも悔いはなし
言うなれば仁王は寺のガードマン

大阪市 松田 聡

本質を知らされぬままTTP
恵まれたホームに居ても老い孤独
露天風呂虫も落葉も気にならず
足るを知りこだわりを捨て温い日々

大阪市 吉田 知之

曾孫達何度会うても名を忘れ
怖かった母の躰が今に生き
院号もお布施次第という話
毎食後十粒の薬で生かされる

河内長野市 藤塚 克三

目と鼻が外出嫌と駄駄をこね
助け合う近所の誼み今薄れ
三面鏡溜息ついて右左
皺にしみ妻が欲しがる雪化粧

河内長野市 山本 エミ

はいはいと聞いた振りして手綱締め
病名がはんぱじゃなくて葉漬け
指切りの昔の橋にある秘密
職退いて妻に負けないゴミ仕分け

河内長野市 渡邊 修

打ち上げたアベノミクスが助け舟
はすされたバツジ恋しいチルドレン
でかしたぞ男女複合金メダル
美ら海でお国ことばの出会い旅

岸和田市 中岡 香代

再会の来る日を願う拉致家族
筍は茹でてくれたら尚うれし
ロボットが地球支配の近未来
一人だけ逆流にのり疎まれる

堺市 梅木 澄空

明け方に手洗いへ行き眠気覚め
聞かされて胸に納めて言われても
順調な時は連絡ない子供
傍目にはのんびり見えて苛ちです

堺市 近藤 治子

孫の供テンション上げて疲れはて
しあわせ度気分次第で上げ下げす
打ち上げを北のニュースが角ばって
考える時間が出来て悩みだす

高槻市 原 洋志

よく笑う気楽な風を道連れに
白髪染め賞味期限を引き延ばし
人参を残す頭上に母の声
加害者の人権ばかりでかい声

高槻市 三谷 白黒

お返しの注文ついたチョコレート
おしゃべりが居なくて寂し独り寝は
女子会はダメな亭主を肴にし
今回もどうか宜しく花粉症

豊中市 貝塚 正子

味気ないテレビも本もない眼科
ふるさとはネオンかがやく繁華街
蹴躓きどんな石かと確かめる
空豆の五人家族が羨まし

豊中市 西村 康子

手品かとパソコン追う目手が泳ぐ
受験生雪に転ばずサクラ咲く
読み返す嬉しい手紙何度でも
好奇心へこまず育てこの五感

富田林市 古田 千華

乳母車消えてバギーが闊歩する
サラダ盛るギヤマンの皿夏謳歌
チャイナさん大気汚染をなすり付け
しら魚の玲瓏として骨格美

羽曳野市 安本 美喜

春よ春遊びも歌もみな愉し
生きの良き鰯と新子手土産に
老夫婦伸縮できるパンツ買う
古線路を歩く新樹に囲まれて

東大阪市 西田 いくひろ

水墨の滲み具合で絵が生きる
慌てない急ぐと何か忘れてる
つまらない話もあつて場が和む
気構えが無いとチャンスも見抜けない

枚方市 河田 洋子

癌の友見舞の言葉見つからず
誰よりも貴方の顔を待つ見舞
夫見舞代れるならば代りたい
友見舞幸せそつと嘯みしめる

枚方市 坂本 ミヨノ

梅花散る実の熟するを梅酒にす
趣味多彩寿命と歳に老い寂し
猫抱いて独り身聞かすつぶやきを
定年の夫馴らされ妻の紐

枚方市 松原 保

リークネタ飛びつくだけだマスコミは
日本を沈めた大臣再登板
古ぼけた出て来る夢は歳のせい
CMを見たい人など少数派

藤井寺市 田付 絹枝

旅プラン聞けば足腰立ち上がり
むずむずと人も草木も笑う春
腰カイロヒートテックで雪まつり
息抜きを阻む携帯叱れない

藤井寺市 肥山 一文

父の日も母の日も同じ一日
逃げるのは幼いころの得意技
俺に似て孫まで続くダンゴ鼻
趣味の道歩きつづけて悔いはない

松原市 大嶋 信次

会話にも三寒四温春近し
学名を持つ雑草が生えている
言い勝つて後で寂しくなっている
携帯の亡き友のメールは消せず

箕面市 大浦 初音

吸って吐いて息するだけのダイエツト
介護した母の歳まで生きられぬ
病室の窓に四角い空がある
真相は胸におさめて持つて逝く

箕面市 寺井 柳童

絵手紙に出会い余生はバラ色に
酵素パワー赤く大きなミニトマト
同い年思えぬギャップ同窓会
被災地に明るい光いつの日か

八尾市 赤木 妙子

菜の花のこのほろにがさあざやかさ
うぐいすはまだかと蕾待ちあぐね
生きがいとした書の道今は立ち止まり
惜しい人の緞帳早く降りすぎる

大阪府 高木道子

早春の風に応える花粉たち
整頓の果てなる先の捜し物

二幕目の道は如何なるミステリー
PM2.5花粉黄砂の春が来る

神戸市 井上忠貞

ボータスがなくなつてから立つて呑む
食べ物を通じて食べるありがたさ

健診の数値改善青い空

妻の絵をほめて晩酌少し増え

神戸市 興水弘

流すだけ流してすつきり涙痕
的外れトンチンカンで和ませる

薄い髪悩み梳かして五十年

この人と決めたあの頃霧の中

神戸市 松井文香

迷う闇仏の光道標

医者帰りちよつと浪費で気分晴れ

幸せになると信じて今日を生き

決断は迷つた末の手術拒否

神戸市 山根弘子

平凡がよいと私を慰める

狙い撃ち呆けたふりしてのしぼる

幸せのハート狙つた恋心

うつうつと二十春の悩みごと

加東市 岩本美緒子

八十路経し終の命の美しかれ
帽子深々散歩す不承の足慣らし

習い部屋二十数年よう飽きず
スケッチ帖浮かれ浮世忘れさす

加東市 黒崎美紗子

診察を待つ人達はみな無口
温泉へ誘つた友のあたたかさ

しつかりと春を忘れぬ路のとう
悩みあるのに体重はまたふえた

川西市 日野岡和之

負け犬と呼ばせてなるかど根性
長生きは国の誇りか危うさか

年金は減らして長寿願う国

白熱の議論の果ての妥協点

篠山市 石田久子

あの頃はよく笑つたねロマンあり

聴診器自分で聴くとすごい音

寝たきりが恐くて今日も歩きます

惚け防止日記家計簿つけてます

篠山市 北澤稠民

旅先で朝の食事はよくすすみ

アルバムを開いて時の流れ知る

お変りは自由寂しい一人酒

被災地で主のいないペット生く

篠山市 酒井 健二

ケーキ食う食わぬで悩みにいて

生れ落ち二十歳の今日もまだ不況

国債の残高知らず孫はしゃぐ

立春と習字も書いて老母逝く

篠山市 永井 かほる

誕生日特別料理腕ふるう

あんこ炊きとことんさらえ鍋の底

だんだんと食べられなくて無駄多い

傘寿すぎ一日無駄が多くなり

篠山市 藤井 美智子

野次馬に乗った同情お断り

無駄時間失せ物さがし今日も又

考えを変えてやさしい風に逢う

人様に自分の尺度あてられぬ

三田市 足立 つな子

口下手で笑いもなしの人と居る

旅行するお天気女福の神

さくら鯛ひと手間かけて昆布じめ

四季たのし山菜の味春告げる

三田市 上田 ひとみ

子供たち夢はいつぱい持ちなさい

真夜中にかぶりと林檎泣くもんか

初恋のポニーテールが揺れている

助手席にバラの花束置いてある

三田市 多田 雅尚

つき出しと箸でその店値踏みする

宝くじ次に買うのは招き猫

沙羅ちゃんハイト科でなくてトリ科かも

原発の恐さ知ってる活断層

三田市 辻 開子

晴天に昼寝の時間いただけた

朝寝坊介護中ですやっちゃった

啓蟄だ老いも負けじと春うらら

携帯のゲーム覚えてポケ防

西宮市 株元 玲子

怪我をして怠けの着物脱げぬまま

リハビリで撫でられる足赤くなり

杖を買いえいいえ買わぬと押し問答

MRIガガッと体切り刻む

三木市 山口 久子

毎日をたのしく過し感謝のみ

人の世話していた自分世話になり

川柳を千両箱に変えてみる

米寿祖母何時ニコニコ幸せ顔

奈良市 尾畑 なを江

歳月は恐ろし二か月何もせず

二人居が上と階下に住み分ける

鍵開けてみれば昭和が積んである

病院はすっかりマスクしてとこ

奈良市 前田 弘恵

元氣的弱音を吐けず辛い日も

コマーシャル葬儀の保険見たくない

腹の中鬼を一匹飼っている

拒んでも吸わねばならぬ汚染風

和歌山市 磯部 義雄

衰退の脳へ活字の種を蒔く

金星に息も絶えだえインタビュー

オンとオフ取り間違えて大火傷

自尊心高く折られた鼻の数

和歌山市 北原 昭枝

丁寧にいねいに蒔く夢を蒔く

策のない垣根に油断してしまう

被災地へこころを込めた千羽鶴

親離れ子離れをする春の空

和歌山市 さかた きく

マヨネーズ逆立ちさせて頑張らず

年金に守られている苑の母

ドキドキと小さなスリル音たてる

春を待つはだかで焦る冬木立

鳥取市 大前 安子

言い合いもブランコの揺れ同周波

すれ違う独り歩きの思い遣り

お互いの短所を知って頼り合う

怒らせて元気の度合い知ること

鳥取市 坂本 とも湖

細腕で寡婦の領土を守り抜く

消費税私の夢を枯らす気か

背に腹は代えられませんが再稼動

平和ボケ神の天罰忘れたか

倉吉市 田中 紀美恵

犬と祖母元気に歩き春探し

白足袋を履いて元気に舞う米寿

遺影には微笑みの顔撮っておく

名残雪桜まだかと待ちにまつ

境港市 森脇 美和子

ウィッグ付け入れ歯忘れて行く病院

一時間聴いても飽きぬ口上手

お祝いと不祝儀続き目が回る

韓ドラの中毒症になりそうだ

米子市 生田 寒之

月末は古い塔誌を出して読む

濁声であるが好きです女唄

安眠に邪魔と頻尿責められる

解りませんアベノミクスの浮沈など

米子市 加藤 正二

口上手天下をうまく綱渡り

天地人軽くなつたかよくゆれる

独り者病探しに忙しい

目薬をさしてしつかり時代読む

赤ちゃんは泣いても屁にも大騒ぎ
頭のネジ時時ゆるみ老い告げる

飛べた川今年はドボンと落ちました
悔しいけど親の気持が今わかる

鳥取県 飯野 菖子
バックミラー赤い夕陽がついてくる

凍らせて鮮度を保つ海の幸
あわてるな心に年を聞かせてる
今日の日は一度しかないそう生きる

鳥取県 大塚 美代子

古民家も匠の技で蘇る
故郷の土は忘れぬ足の裏

携帯に故郷の景色ぎゅつと詰め
影法師あなたの背なが丸くなり

鳥取県 岡村 孝明

Gゴルフ狙うがボール入らない
売り抜ける機会を狙い株価聞く
旅行して風邪を貰って大弱り
体調を詳細メモし受診する

鳥取県 下田 茂登子

赤い糸切れたまんまで繋げない
家柄を自慢したとて嫁は来ぬ
老夫婦元気なことも嫉妬され
相性は悪いが此処は我慢する

鳥取県 田口 清帆

息詰るアベノミクスの吉と凶
トンネルで天井を見る癖が付き
空澄んで目指す望みが叶いそう
触れ合って心が通う両隣り

鳥取県 吉野 いさお

病名の蒞藩翳すデイケアー
休肝日取れば調子が狂い出す
体罰は必要悪と言う昭和
懐の浅い男は姦しい

出雲市 黒目 英男

夢を追う今日の自分に明日は勝て
明日のため腕いた証残したい
生きている時代の波に洗われて
深夜便眠れぬ夜の道の駅

雲南市 菅田 かつ子

結局はそつとあなたに支えられ
それなりの楽しみもあり井の蛙
仕草まで亡母そっくりの八十歳
風花や黒金封の続く日ぞ

岡山市 永見 心咲

子供手当実は大人が使い切る
花筏去年と違う川なれど
連れ立って来ました今日もこれから
春だからパンプス履いて風にのる

誹風柳多留一篇研究 93

小栗 清 吾・伊 吹 和 男

山 田 昭 夫・増 田 忠 彦

山 口 由 昭

清 博 美

723 松かさり大屋根こぎにして廻り

小栗 根こぎは、樹木や草などを根ごと引き抜くこと（「日」）。
正月の門松は、

門松の穴ハ千年の一里塚
へらさきとつるとて松のあなをほり

門松の穴掘と言しかられる

の句のように、地面に穴を掘って立てたものだが、長屋の大屋が店子に立ててやる門松は、誠に簡略なもの。

鉄づちの入ルのハけちな奈かさり

と門口に松の小枝を釘で打ち付けるとか、

すきくわの入らない奈を大屋たて

門ト奈を大屋はつぶり／＼たて
いそかしく大屋さし木をして廻り

と単に地面に松の小枝を挿して済ませたりしたものであろう。そうになると松の内の終わりの七日に門松を取り除くときも簡単なもので、主題句のようにただ引っこ抜けばいいのである。

七ツおきしてぐい／＼と大屋ぬき

清 賢
むそうさなものの大屋の小松引

724 聖人の代にも二人ハひだるがり

小栗 聖人は、知識や徳望がすぐれ、世の模範と仰がれるような人。神のように万事に通曉しているひと。特に儒教では古代の堯・舜・禹・湯・文王・武王・周公・孔子などをあげていう（「日」）。

周の武王が殷の紂王を討った行動を潔しとしない伯夷・叔齊が、周の食べ物を口にしない決心をし、首陽山に隠れて蕨を取って食べながら遂に餓死したという故事を詠んだもの。句意は、聖人の治める代は飢える人などいないはずなのだが、二人だけひもじがっている者がいる。さて私は誰でしょうということ。

聖人の代に木食が二人有
飢ながら腹一はいを伯夷い、

725 二千里も行いきおいの四ツ手かて

伊吹『白氏文集』巻十四にある白居易の「八月十五日の夜禁中に独直し月に對し元九を憶う」という題の漢詩の援用。元九は、白居易の旧友の名。その中には「三五夜中新月色 二千里外故人心」とある。この文章は、『和漢朗詠集』や謡曲「三井寺」などにも引用されている。月の紋日に吉原へ行く四つ手

の駕籠昇は、たくさんの酒手をもらったものだから、まるで二千里もの遠くへ行く勢いで駈けている。

二千里も行ほど気ばる月のかこ 拾四四
二千里の外迄むす子行気なり 明八満一
清 賛。

726 殿さまハ惣むらさきでござすこたん

伊吹 『日本国語大辞典』の「総紫・惣紫」の項に、蹴鞠が上達して、飛鳥井・難波家から着物が許される紫の袴。武家には総紫、町人には紫裾濃（むらさきすそ）の袴が許された。とある。すこたんは、すかたんと同じで、間抜けたことをすること。総紫の袴の衣裳と鞠の技が釣り合わない、殿様の不様な蹴鞠を詠んでいるのだと思う。

すいかんでころんだ上へまりハ落 二二五
山田 賛。殿様の技はさしずめ名譽紫裾濃で、実技が伴わないのでしょう。

増田 賛。山田氏補説にも、「すこたん」には転ぶ気分もあろうか。
清 賛。

727 かまぐらの汐干つろこのしまい也

伊吹 はじめ北条氏に従った新田義貞の一族二万余騎であるが、一転官軍に應じて元弘三年五月十八日相模国稲村ヶ崎の干潮時を狙ってその他の軍勢と共に前浜に突入し、鎌倉幕府を二十二日に陥れた。そのため三鱗が家紋の北条執権職も、『未来記』に東魚とある九代目の高時が最後となった。潮干は春の季語で、旧暦五月は夏なので季節的には合わないけれど、潮干と鱗は縁語。『太平記』卷十「稲村崎成干渴一事」に、
六万余騎を一手に成て、稲村崎の遠干渴を真一文字に懸通て、鎌倉中へ乱入る。
とある。

義貞の勢ハあさをふみつぶし 初10
汐干て東魚おさへる鍋のふた 三八17
清 賛。

728 かげ膳を人さへくれバはなす也

伊吹 亭主の旅先での安全を祈つて、留守宅でその食膳を供えている女房なのである。しかし、人が来るたびに陰膳のことを話すのは、いま私は孤閨ですと誘惑しているようなもの。

影膳をすへる女房ひもじがり 四八15
山田 賛。

かげ膳ハ人目にかゝるとこへすゑ 幸々安二情1
ところが敵もさるもの、
品川に居ルにかけ膳三日すへ 明八智5
という場合もある。

増田 賛。孤閨への誘いはきびしすぎはしませんか。

山口 同。これ見よがし。
小栗 賛。思惑は様々。
清 賛。

729 絵に書いた餅を師直くいたがり

伊吹 絵に描いた餅を食うは、無理な望みのたとえ。足利尊氏の執事である武蔵守高師直は、塩谷判官高貞の妻に横恋慕して、侍従という女を頼りにしたり、兼好法師に恋文の代書までさせたが、思いを果たせなかった。そのため師直は、高貞を譏言して陥れる。

出来もせぬ事に小侍従骨を折 四三28
けん好はあのつらでかとなぐり書キ 七14
ゑに書いたもちにこひつく浅きうら

小栗 賛。俚諺そのまま。

清 賛。

安八仁6

中島生々庵句抄

(句集『生々楽天』から 昭和五十一年発行)

昭和四十七年・四十八年

禁煙を誓うて今朝の齒を磨く

幸せがせせつこましく干からびる

休憩となればガイドの京なまり

亡母と語るそのかたわらの葉鶏頭

たった一行素敵な文字の旅だより

探しもの探し疲れて妻眠る

賀状さかなに元日の朝の酒

風邪抜けて書き初めうれし墨の色

自慢にもならず座敷でけつまずき

レントゲン瘦せた肋骨いとしがり

春宵一刻猪口の重きもお気に入り

夢二描く首の細さで咳に耐え

手をつなぎ心齋橋は初夏のもの

笑われてから雑魚なりの闘志湧く

決心がつき紙くずとして丸め

写経に座るその筆先に揺れる業

腹いせの執念のまま小さく生き

つき放す医者 of 眼に眼で応え

予約して和室和室と母の旅

笑顔の裏にリアルな影はゼニの事

しとやかさ明日は裏切る目と見えす

一人だからこの名月に窓を閉め

英語 de Senryu ⑪

麻生路郎句集『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE
(岐阜保健短期大学)

青空の いよいよ青し 片思ひ

blue sky

*becomes clean and bright---
one-side love*

お婆さんに限り 死にたがり死にたがり

as for the old woman

she wishes

herself dead

～リバーウィローのため息～ (阿部佐保蘭の交流：麻生葎乃の英訳川柳に関する考え⑤)

麻生路郎の妻、葎乃は大阪のプール女学校英語専修科を卒業し、英語と英文学に秀でた女性でした。創設当時、プール女学校は大阪の川口外国人居留地にあり、キリスト教の布教と英語教育が盛んな学校でした。クリスチャンであった葎乃は学校の二本柱であるキリスト教と英語を身に深く浸透させたと思われます。後に路郎が受洗したのは葎乃の影響かも知れません。彼女が英訳川柳に関心を寄せたことは、彼女が受けた教育から当然のことでしょう。しかし日本語と英語の溝を考えると、彼女は簡単に英訳に手を染めることができませんでした。

そして彼女が英訳を躊躇する理由は大きく二つありました。第一は、川柳という日本独特の文芸が、文化背景の異なる英語やその他の言語に忠実に翻訳できるかどうかの問題、第二は、韻律、リズムの問題です。川柳を英訳した場合には、海外では英語の詩として読むことになります。その場合、川柳の英訳がシラブル（音節）、アクセント（抑揚）、破調、脚韻などを如何に消化でき得るか、葎乃は英詩創作法と対比させながら論じました。彼女の遺した文章は論理的で説得力があるうえ、さらに父親である川柳作家、河盛蘆村譲りのユーモアと諧謔を備えています。阿部佐保蘭が望む川柳の海外普及に心を動かされながらも、葎乃は英訳にのめり込むことはありませんでした。しかし阿部の熱意に応じて数例の英訳を行い、それらは素晴らしい英訳になっています。その一例を紹介しましょう。

(菜の花はあの屋根のはて屋根のはて)

Beyond the roofs extending far / There's a vast rape field.

参考文献：「川柳の英訳に就いて」『川柳雑誌』11月号（1951）阿部佐保蘭『川柳と翻訳』（中央公論事業出版 1966）麻生路郎読本（川柳塔社 2010）

愛染帖

新家 完司選

米子市 加藤 正二
 久し振り髪を刈つたら男前

(評) 経費節減のために我慢していた散髪。仕上がり鏡に「おっ、まだまだいけるぞ!」。気分も十年ほど若返って、恋でもするか。

大阪市 古今堂蕉子
 髪を切つたら顔がでかくなり

(評) このようなジョークに対しては、「いや、別嬪になったよ」がベスト。「初めからデカイやんか!」などと言つたら一生恨まれる。

大阪府 初山 隆盛
 もう喜寿が言つたあの日はもう昔

(評) 喜寿になったばかりなのにもう傘寿。あれあれと思っているうちにもう米寿。歳月は新幹線よりも速く飛び去ってゆく。

神戸市 松井 文香
 胸豊か形状記憶なら良いが

(評) 洗うとパリッと元に戻る形状記憶シャツのように、風呂に入るたびに二十歳に戻るオッパイ。遺伝子組み換えで何とかならぬか。

三田市 上田ひとみ
 忙しい人はいたい美しい

(評) いそがしい人は行動に無駄がなくテキパキ。雑念に惑わされず、目が輝いて表情に張りがある。内面から滲み出る美しさだ。

枚方市 寺川 弘一
 猿見ても先祖だつたと思えない

(評) 確かに、あんな小汚いのが先祖だとは思えない。だが、温泉に浸かつてまったりしているのを見ると「俺とそっくり!」と思う。

奈良市 大久保真澄
 文楽の余韻タコ焼き食べながら

(評) 伝統芸能を目で楽しんだあとは、あつあつのタコ焼きを口で楽しむ。大阪の代表的観光コースはだんぜんこれだつて!

枚方市 松原 保
 新しい靴がささやく「背を伸ばせ」

(評) 背中を丸めてとぼとぼ歩いていては新品のスニーカーが泣く。シヤンと背筋を伸ばせば「あと十年は大丈夫!」と自信が湧く。

香南市 桑名 孝雄
 スキップの代わりに酒を飲んでいる

(評) 酒を飲む理由や言い訳はいろいろ聞いたが「スキップの代わりに」とは初めて。確かに気分は弾むが、身体にはどうだ?

高槻市 富田 美義
 合図あり俺の余命も秒読みに
 (評) あつさりど覚悟を決めておられるが、

身体への信号なら精密検査をして対処すればカウントダウンを止められるかもしれない。

堺市 増田 和幸
 吉本のお笑よりも575

和歌山市 柏原 夕胡
 川柳は好き人間は大キライ

三田市 北野 哲男
 広っぱでした川柳の奥の院

鳥取県 西谷 悦子
 風呂浸かりさて川柳の題はなに

札幌市 三浦 強一
 会心の作に選者の声がない

青森県 松山 芳生
 不完全燃焼作句もわたくしも

池田市 栗田 久子
 早掘りの筈ですか高そうね

三田市 足立つな子
 まけといて関西人の口癖よ

八尾市 宮崎シマ子
 大根を値切る姿も女なり

松江市 石橋 芳山
 皆さんと同じが嫌なダンゴ虫

和歌山市 古久保和子
 プンブンと腕を回して飛べるなら

紀の川市 楠原 富子
 毎日が発見わたし成長期

大阪市 岩崎 公誠
 デジタルが老いの頭をひん曲げる

藤井寺市 鴨谷瑠美子
走ろうと思うが黄からすぐに赤

島取市 夏目 一粋
孫入試ビリで合格すればよい

貝塚市 吉道あかね
現状維持を保つプールの水しぶき

岡山市 丹下 凱夫
脳が繋がったらしいポコと言う

茨木市 藤井 正雄
志賀直哉ボタンと閉じる午前二時

東かがわ市 川崎ひかり
手を抜くとすぐにホコリが舞い上がる

高槻市 原 洋志
なんだって四国の空にオスブレイ

遠方で政府が何かやっている
読み切りの短編でした初恋は

大阪府 小栢こずえ
神さまは今日も私を見捨ててる

河内長野市 松岡 篤
徘徊に備え真っ赤な帽子編む

門灯に謝っている午前様
美味いと言って欲しいそう妻の顔

島取市 倉益 一瑠
お風呂場の鏡曇ったままでいい

三田市 堀 正和
変だなあメガネに足があるらしい

予報士が服装にまで口を出す
相続税文句言ってはバチ当たる

堺市 奥 時雄
別嬪も土俵も遠い席で見る

佐賀県 真島久美子
弓を引く姿勢で君を見ています

堺市 村上 玄也
ハルカスもスカイツリーも消す黄砂

大阪市 大川 桃花
元氣やなあと呆れられてる医者通い

つくば市 嶋本 喬
年賀状くれたばかりの友が逝く

寝屋川市 森 茜
母がいた姉もいた日の雛飾る

松江市 三島 淞丘
夫唱婦随そんな昔もありました

酒少しひかえて妻を驚かす
頻尿という病名がひとつ増え

橿原市 居谷真理子
百均に並ぶけなげな造花たち

豊中市 水野 黒兎
健康な医者よ君には解るまい

大根もごぼうも仲間さあ足湯
前向きという検討の後向き

島取県 斉尾くにこ
思いきり壁の角から平手打ち

海南市 小谷 小雪
一日をシャボンのアワに撫でられる

ポケットの飴は誰からもらったか
浮いている時は深さがわからない

青森市 守田 啓子
きつとあるニートの空を開ける鍵

豊中市 松尾美智代
母の血を引いて私もお節介

弘前市 高瀬 霜石
飲みすぎちまう心配事もいい事も

藤井寺市 太田扶美代
愚痴弱音吐き放題で生きている

島取市 土橋はるお
ご隠居と言われるような柄じゃない

岡山市 工藤千代子
心配をかけると息子顔を出す

堺市 遠山 唯教
ベルトを外してダルマさんに戻る

百円のマクドナルドで夜をしのぐ
俺流に鯖を真ん中から食べる

松山市 神野きつこ
ゆるキャラが次の日本の輸出品

島取市 高浜 勇
ストレッチしたら両足吊りました

風船はやっぱ下で見るもの
俺よりも長生きしそうLED

香芝市 大内 朝子
春うらら恋にこいしてまだ女

ハツとしてゾツとしている夜の鏡
大阪府 笠嶋 惠美

甘えたらみんなやさしい人ばかり
ぐちる友説教したら電話切れ

櫻原市 安土 理恵
春キャベツさくさく元氣もらえそう

唐津市 吉富 節子
好きだから怒った時でもいい男

米子市 生田 寒之
春炬燵に腰まで埋めて日を終える

西宮市 牧淵富喜子
出来ぬ事もくらしの一部タぐれる

枚方市 伊達 郁夫
定年の顔をしている散歩道

岡山市 永見 心咲
連れ立っています土日でもこれからも

紀の川市 辻内 次根
長生きをするとな家を悩ませる

大阪府 米澤 俣子
約束出来ぬ一ヶ月後も明日でも

高槻市 片山かずお
今朝ちゃんと言ったでしょうと叱られる

三田市 久保田千代
やっかいな感情 恋をしたらしい

藤井寺市 鈴木いさお
買ひそうな顔でじつくり試食する

鳥取県 細田 裕花
友だちのいいところとだけ真似る

広島市 岸本 清
痛快だ初めて孫に叱られた

和歌山市 楠見 章子
ひとり鍋ほっこり曇る窓ガラス

大阪市 高杉 力
木陰からや々と動いた営業車

鳥取県 大塚美代子
私の過去を見て来たお針箱

唐津市 岩崎 實
たくわえは転んで起きる底力

大阪市 田浦 實
十七条憲法読めば出る勇氣

鳥取県 山下 節子
したたかさDNAにない私

堺市 羽田野洋介
お言葉に甘えましてと長居する

岡山県 田中 恵
勝ち負けにこだわることも無い夕日

倉吉市 中村 毅
親の背な見過ぎて別の道を行く

河内長野市 山岡富美子
タッチパネルだけで用事は全部済む

神戸市 大島まさる
フルムーン アベノミクスで甦り

弘前市 今 愁女
追い出したいのか地球が悪さする

鳥取市 岸本 宏章
大気汚染へ中国人はおとなしい

和歌山市 平田 元三
エアカテン欲しいと思う日本海

瀬戸内市 東横ますみ
レトルトのカレー 春にはまだ遠い

篠山市 二階 幸子
歳の功包丁研ぎは任せとき

大阪市 江島谷勝弘
悪い癖すぐに相手を値踏みする

京都市 高島 啓子
封筒は中を調べてから捨てる

枚方市 丹後屋 肇
圧迫骨折ちびりちびりと呑むミルク

大阪市 榎本日の出
背も縮み脳ものんびりこれでよし

弘前市 高森 一吞
雨やどり妻の小言が降りやまず

鳥取県 岩崎 和子
剪定の木々が芽を出しほつとする

篠山市 佐々木 勇
町工場玉の汗にも耐えて春

大阪市 吉内タカ子
少しでも紅を塗ればと嫁くれる

堺市 荻野 像山
目に下剋点すなど念を押されてる

鳥取市 岸本 孝子
流行でも生前葬はいただけぬ

宇部市 平田 実男
市になったけれど過疎化が急ピッチ

和歌山市 土屋起世子
だんだんとマリオネットに似る私

八尾市 前田 紀雄
震災は記念じゃなくて記憶する

乾杯乾杯桜前線北上中

篠山市 遠山 可住

さあ飲むぞ休肝明けの大ジョッキ

河内長野市 村上 直樹

二次会で半分見せた腹の底

橋本市 石田 隆彦

アクティブなシニア狙えとJTB

奈良市 加門 萌子

旅なかま平均寿命みな越えて

高槻市 富田 保子

邪な心なおせとホーホケキョ

鳥取市 土橋 螢

思いつき「ばあか」と言える間柄

弘前市 肥後和香子

厨房は早く帰った方がやる

唐津市 北村 松風

三食が仕事狂わぬ腹時計

三田市 上垣キヨミ

食べること吾が体への贈り物

三田市 石原 歳子

亡父がガン兄が俺にも来たという

鳥取県 竹信 照彦

順踏んで老けたこの顔良しとする

河内長野市 穂口 正子

掻痒症老人という証しです

奈良市 辻内げんえい

地区の役ふられないよう隅にいる

米子市 後藤美恵子

若い時しゃれた下着が干せたのに

三田市 辻 開子

雑用で今日も暮れたと書く日記

塩竈市 木田比呂朗

私の領土六畳ひと間です

鳥取市 永原 昌鼓

滑舌を八分音符に試される

高知市 小川てるみ

ヒマワリの絵より大きい二重丸

篠屋川市 岡本 勲

合格のお礼参りに絵馬撫でる

大阪府 桑田ゆきの

日に三度サブリが欲しい膝や腰

富田林市 山野 寿之

まぐれだと言われないよう励んでる

堺市 志田 千代

トイメンに美女が坐って気が騒ぐ

鳥取市 池澤 大鯨

八方のお誘いにのる感謝して

羽曳野市 宇都宮ちづる

生き上手やりくり上手俺の妻

枚方市 二宮 山久

筆圧の強さ疑い晴れました

和歌山市 上田 紀子

ともかくも元気に生きて中の上

堺市 内藤 憲彦

目の保養ばかりで財布ゆるめない

高槻市 島田千鶴子

看護師の機嫌か注射大雑把

泉佐野市 稲葉 洋

誉め言葉効力ありでよく使う

大阪市 阿野寿美子

手作りの帽子贈ったのは昔

富田林市 中井 アキ

よく聞けば人の数ほどある訛り

明石市 桃谷 和郎

肩が凝る会はバスして昼寝する

神戸市 能勢 利子

歳取れば首より舌がよく回る

鳥取県 吉野いさお

花に会い仏にも会う寺巡り

篠山市 円増 純子

株持たぬ私もうれし株上がる

堺市 近藤 治子

使いましよタンスの論吉風邪を引く

河内長野市 渡邊 修

時間たちメモはパズルになっっている

鳥取県 平木 公子

緩まないネジで世界へ町工場

河内長野市 大島 友子

選挙済んだらTPPも原発も

大洲市 中居 善信

お見舞いの手紙何度も読み返す

枚方市 小林 わこ

月命日2匹の亡犬に水あげる

熊本県 岩切 康子

共選欄

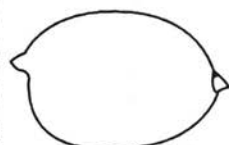
檸檬

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)

(投句 806句)



K. K.

「同じ」

奥田

みつ子選

老い二人同じ心でみる櫻
笑つても泣いても同じ陽は昇る
目で拍手 ペアールツクの老い二人
一目見て親子と解る同じ顔
また帰るツバメへその巣そのままに
セーターになつて喜ぶ毛糸玉
聞く人によつては違ふ同じこと
同じドラマ見ても泣く人笑う人
同じ道母の手を引き墓参り
何故こうも違ふか同じ親の子が
同じように育てたはずが鮎と鯉
白鳥と同じ夢見るあひるの子
クラス会みんな同じの錆び加減
どんぐりの中でオンリーワンの夢
祖父母から校歌を習う佳き日なり

米子市	政岡未延子	松江市	藤井 寿代	八尾市	内海 幸生	大阪市	榎本 舞夢	東大阪市	北村 賢子	松山市	神野きつこ	鳥取市	谷口回春子	大洲市	中居 善信	箕面市	広島 巴子	京都市	三宅 満子	堺市	柿花 和夫	和歌山市	武本 碧	和歌山市	さかたさく	犬山市	金子美千代	唐津市	仁部 四郎
-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	----	-------	------	------	------	-------	-----	-------	-----	-------

「同じ」

森山盛桜選

空腹だった昭和を語る同い年
ひがし西どちらも同じ靴で行く
通り抜け今年も君と行ける幸
理髪後は皆それなりに男前
袴を脱げばいいらしい真人間
病院のこども同じ二十四時
同じ故郷でぬきさしならぬ絆だな
同じ手で騙されたのは甘かった
窓際と壁際なにがどう違う
おなじとこに黒子があつて気がおけぬ
同じではない昨日の水と今日の水
静止画像あの日と同じ風が吹く
敬称の要らぬ同期の無礼講
マンネリのメニューにいつもブチトマト
故郷の不便同姓多過ぎる

田辺市	小川 イセ	鳥取県	岩崎 和子	堺市	加島 由一	高槻市	初代 正彦	神戸市	白川 淑子	大阪府	米澤 俣子	尼崎市	春城 年代	大阪市	岩崎 公誠	高槻市	富田 美義	京都市	高島 啓子	紀の川市	宇野 幹子	横浜市	菊地 政勝	鳥取市	岸本 孝子	唐津市	坂本 蜂朗
-----	-------	-----	-------	----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	------	-------	-----	-------	-----	-------	-----	-------

同じなら今日も笑顔で走ろうか

血の色は同じ心は七変化

気の若さ二十は違う同い年

琴を弾く鎌を持つ手も同じ指

同じ声たくさん欲しい民主主義

同じ日は二度と来ないと津波言う

妻か娘か聞き分けられぬ電話口

生かされて今年も同じ花の下

同じ一言友ならではの温かみ

同色に染まり染められ金婚譜

生まれ変わればきつと歩かぬ同じ道

皆同じひとつの命抱きしめる

同世代この人も持つ時の影

どのように生きててもやがて土になる

無心になれば大きく見える同じ的

脇役で毎日同じ舞を舞う

同じならにつこり言おうありがとう

マドンナは今もマドンナ同い年

同じことずっと続けてゆく凄さ

秀句

同じ歳なんだよなあとクラス会

真ごころを尽くす結果は同じでも

同じ山目差して違う道進む

富田林市 山野 寿之

和歌山県 松尾 和香

三田市 北野 哲男

岡山県 田中 恵

備前市 森 ふみか

鳥取市 前田 楓花

河内長野市 坂上 淳司

大阪市 津村志華子

枚方市 小林 わこ

河内長野市 谷 久美子

枚方市 寺川 弘一

三田市 尾崎 一子

神戸市 奥澤洋次郎

三田市 堀 正和

枚方市 海老池 洋

藤井寺市 鴨谷瑠美子

西宮市 亀岡 哲子

大阪市 古今堂蕉子

大阪市 井丸 昌紀

堺市 加島 由一

藤山市 酒井 真由

出雲市 竹治ちかし

同じならひらがなで書く春のいろ

端株買うロタンと同じポーズして

同じ物なのにかぼちゃとパンブキン

得手に帆を揚げて一本道をゆく

春と老い足を揃えてやってくる

金太郎飴がぞろぞろ街を行く

贅肉があつてくぐれぬ同じ門

生きてきた以下同文と括られて

別人が鏡の中に暮してゐる

大声へ付和雷同をして火傷

脱衣所に同じ弱さが捨ててある

波の音同じひとりにさせぬ音

同じならいっぱい作る笑い皺

濃淡は度外視酒は酒でしよう

ひとまわりただバーゲンのなか歩く

フェルメールの青の零れたイヌフグリ

蟬しぐれ同化してゆく刻ひとり

地球儀の剥げた部分が同じ過去

同じ読みしている来年のいのち

秀句

同世代この人も持つ時の影

卑怯者ですが100パーセントぼく

炎天にゴッホと同じ怒鳴り声

西宮市 山本 義子

八尾市 内海 幸生

豊中市 水野 黒兎

青森県 松山 芳生

大阪府 畑中 節子

大阪市 井丸 昌紀

備前市 森 ふみか

黒石市 佐藤 古拙

弘前市 稲見 則彦

海田市 堂上 泰女

鳥取県 斉尾くにこ

八尾市 宮西 弥生

大山市 金子美千代

岡山市 永見 心咲

加東市 黒崎美沙子

香芝市 大内 朝子

松山市 高橋 宏臣

長野県 丸山 健三

米子市 政岡未延子

神戸市 奥澤洋次郎

弘前市 高瀬 霜石

松江市 石橋 芳山

捨て子はむごい

小栗 清 吾

門番はたまげ蜜柑籠は笑い

宮二五乙

この句の意味、おわかりでしょうか。

門前に置いてある蜜柑籠が突然笑い出したので、化け物が出たかと門番が魂消している、というではありません。これは捨て子を詠んだ句です。

江戸川柳では、子を捨てるときは蜜柑籠に入れることになっています。ですから、「蜜柑籠」の語があれば、まずは「捨て子の句」ではないかと見当をつけます。このように、ある言葉に特別の意味を持たせる技巧を「約束事」と呼んでいます。

この句も、そういう目で見れば簡単な句です。朝、お屋敷の門番が門を開けてみると、捨て子が置いてあったので魂消たのですが、蜜柑籠に入れられた捨て子は、我が身の事情も知らず、無心に笑っているというのです。

捨てられて泣きわめくのももちろん可哀想ですが、何も知らずに笑っているのは一層哀れを誘います。

泣くよりも哀れ捨て子の笑い顔

四四二五
八九三六

灯を見ると笑う捨て子にみな涙

八九三六

冒頭の句には、ひとつ大事な語が入っています。それは「門番」です。親は、どうしようもない事情があつて子を捨てるのです。子が憎いわけではありません。誰かに拾われて幸せに育って欲しい。そう願っています。そのためには、裕福そうな家の前に置くのがひとつの方法です。うまくいけば、その家の子供として育ててもらえるかもしれません。この句の場合も、門番がいるような大きなお屋敷の前に蜜柑籠を置いたというわけです。

指折りの門に赤子の声がする

一三二

こちらと同じで、この界限で指折りの金持ちの家を選んで置いたのです。

拾い子は和尚の乳を飲みたがり

宝九天

この子はお寺の前に置かれたようです。和尚が拾い上げると、お腹が空いた子がお乳が欲しいと和尚の胸元をまさぐるのです。

こういう賢明な親がいる反面、少しぬかつた行動をする親もいます。

思慮の無い捨て子伊勢屋の前へする 一三七12
江戸川柳の「約束事」では、「伊勢屋」は

ケチということになっています。大きな商家と見込んで蜜柑籠を置いたのですが、看板をよく見るべきでした。

大金持ちがすぐに拾ってくればいいのですが、道端に捨てられて、町内警護の自身番が巡回中に見付けたり、発見者から番所に届けられたりすることもあります。

自身番捨て子が泣いて世帯めき

三16

日頃殺風景な番所で、赤子の泣き声があると、家庭のような雰囲気だということです。

鉄棒であやせば笑うむごいこと

五五11

自身番が持っている鉄棒であやすと、捨て子が笑う。本当にむごいことです。

町代の女房は乳をますのませ

明二巻2

「町代」は、名主の補助員として、自身番所に勤めている人です。番所が捨て子をあつかうことになったので、取りあえず町代の女房が乳を飲ませているのです。

捨てられる子も可哀想ですが、捨てざるをえない親もどんなにか辛いことでしょう。物陰からそとと見えて、拾って貰えた時の有り難さ。思わず手を合わせて拝みます。

拾わるる親は闇から手を合わせ

宝二二板2

「息抜き」

鴨 谷 瑠美子 選



息抜きに桜前線追う至福
生真面目も四月馬鹿には息を抜く
息抜きのお茶は夫が入れてくれ
手招きは息抜きに來い暮の仲間
駅裏で息抜きしてる戦士たち
キャッチボール親子息抜きしてるらし
子育てにキッズルームも利用する
息抜きを忘れるぐらいまで元氣
息抜きをする潮時がわからない
息抜きの時間が増える古稀の坂
子が巣立ちずっと息抜きしたまんま
わたくしのジョークをどうぞ息抜きに
息抜きに來たのに用事頼まれる
息抜きをすると途端に風邪をひく
済むまでは息抜きできぬ手術室
上司の巣知らず立ち寄り息抜けず
息抜きの上手な人が上司です
息抜きはよそうかえって疲れます
許す氣になってやれやれ息を抜く
一人になって息抜きが懐かしい

生駒市 飛水ふりこ
米子市 生田 寒之
大阪市 神夏磯典子
大洲市 中居 善信
奈良市 米田 恭昌
八尾市 宮崎シマ子
三田市 多田 雅尚
出雲市 竹治ちかし
紀の川市 楠原 富子
豊中市 水野 黒兎
西脇市 七反田順子
藤井寺市 太田扶美代
豊中市 松尾美智代
紀の川市 辻内 次根
唐津市 山口 高明
三田市 雑賀 一泉
鳥取県 斉尾くにこ
高知県 小澤 幸泉
大阪市 吉村 一風
西宮市 緒方美津子

息抜きをするのにお金貯めている
秘書歴も長く息抜くコツ覚え
息抜きに文枝の落語など如何
単身赴任夫婦互いに息を抜く
息抜きの夢をワイフに潰される
息抜きが続く男に唐がらし
二年過ぎ息抜きいらぬ復興へ
息抜きの三年自民成長す
物騒な隣の国へ抜けぬ息
世渡りは手抜き息抜き活かす智恵
スイッチ・オフ観光バスを待っている
息抜きが過ぎて御輿が上がらない
佳

息を抜く隙を与えぬ不審船
断層に息抜きもある花の種
病院で息抜きをする責任者
圏外で人差し指を休ませる
息抜きに経を唱える人もある
人
教育の現場息抜きなど出来ぬ
地
日本の息抜き円安の跋扈
天
息抜きをしたことがない阿吽像
軸
息抜きを考慮しながらスケジュール
貝塚市 吉道あかね
堺市 奥 時雄
藤井寺市 鈴木いさお
茨木市 藤井 正雄
豊橋市 藤田 千休
奈良県 渡辺 富子
大阪市 江島谷勝弘
鳥取市 高浜 勇
池田市 上山 堅坊
和歌山市 喜田 准一
弘前市 高瀬 霜石
松江市 三島 淞丘
黒石市 佐藤 古拙
八尾市 宮西 弥生
橋本市 石田 隆彦
河内長野市 山岡富美子
唐津市 仁部 四郎
堺市 村上 玄也
大阪市 岩崎 公誠
弘前市 福士 慕情

「迫る」

山口 高明 選



真相に果敢に迫る記者のペン
 老い迫るクイズに挑む春炬燵
 約束の人見当たらずぬ発車ベル
 締切り日流行作家の苦勞知る
 八十路きて身辺整理迫られる
 幸せにすると氣迫のプロポーズ
 おばちゃんの迫力に負け二割引
 崖つぶちに立てば妙案浮かぶだろ
 返済を迫る銀行待ったなし
 迫真の演技でハート掴み取る
 慣れ合いの政治にいつか迫る危機
 決断を迫るがごとく日が沈む
 最果ての暮らしに迫るドキュメント
 死にたくない死にたくないと仏さま
 定年後家事分担を迫られる
 迫り来る赤い唇目が覚める
 鳥おろか海も空もと迫る国
 お見舞いに作り笑いを迫られる
 梅雨半ばたそがれ迫るほたる狩
 若旦那核の脅迫やめてんか

札幌市	三浦	強一
八尾市	高杉	千歩
岐阜市	平野あずま	
大阪市	佐藤	忠昭
弘前市	今	愁女
茨木市	藤井	正雄
南あわじ市	萩原	狸月
堺市	志田	千代
札幌市	小沢	淳
和歌山市	柏原	夕胡
和歌山市	喜田	准一
吹田市	須磨	活恵
大阪府	米澤	俣子
鳥取市	土橋	螢
三田市	福田	好文
交野市	森本	弘風
泉佐野市	稲葉	洋
高槻市	富田	美義
唐津市	岩崎	實
堺市	増田	和幸

真相に迫ると被疑者黙秘権
 お彼岸が迫ると花の値が上がる
 週末が迫る地球が熱くなる
 資格取る試験迫って一夜漬け
 核心にやんわり迫る古狸
 あの人が迫ると崩れそうになる
 上役のハラスメントへ団結で
 団塊の世代に冬が迫りくる
 気がつけば平均寿命すぐそこに
 迫真の演技で魅せた星が墜ち
 酷使したツケひたひたとやって来る
 胎動へ母の覚悟を迫られる

佳

残された時間がなくて忙しい
 謎めいた女迫ってみたくなる
 娘を盗りに迫る男が気に食わぬ
 返還を迫る日本にアカンベエ
 怪獣が僕に迫ってスクリーン

人

故郷の山が迫ってくる望郷
 地

げんこつで迫る指導は許されぬ
 天

気忙しく迫る秒針だな君は
 軸

目に見えぬ恐怖汚染が攻めてくる

神戸市	伊勢田	毅
和歌山市	福本	英子
高知市	小澤	幸泉
河内長野市	藤塚	克三
高槻市	初代	正彦
藤井寺市	鴨谷瑠美子	
唐津市	仁部	四郎
長野県	丸山	健三
三田市	堀	正和
香南市	桑名	孝雄
弘前市	高瀬	霜石
奈良県	渡辺	富子
米子市	成田	雨奇
池田市	上山	堅坊
弘前市	福士	慕情
西宮市	片山	忠
大洲市	中居	善信
和泉市	横山	捷也
堺市	萩野	像山
大洲市	花岡	順子

「ケース」

井 上 森 生 選



うずうずと衣裳ケースの春の服
千人いれば千のケースがある人生
ワイキキの砂も土産に旅靴
へその緒が桐のケースに鎮座する
ケースバイケース私の生きた道
医者通いカードケースがメタボなり
このケース例外ですと恩に着せ
床の間のケースで威張る鑑武者
セルロイド少女の頃のお針箱
パンドラの箱を開けたくなるヒト科
大物はともケースに収まらぬ
旅行用ケースがいつか非常用
シヨウケース妻が本気の指をさす
ポーナスが出たぞビールをケース買い
もう白髪開けてみようか玉手箱
どのケース辿ってみても蟻地獄
最悪のケースはカット楽天家
生き上手多くの事例知っている
ヒロシマのモデルケースが生かさねず
気まま旅スーツケースと時間表

河内長野市	木見谷孝代
米子市	成田 雨奇
岐阜市	平野あずま
茨木市	藤井 正雄
鳥取市	福西 茶子
倉吉市	中村 毅
四條畷市	吉岡 修
大阪市	津村志華子
弘前市	今 愁女
堺市	澤井 敏治
和歌山市	喜田 准一
弘前市	稲見 則彦
高槻市	富田 保子
大阪市	高杉 力
大阪市	奥村 五月
和歌山市	磯部 義雄
神戸市	白川 淑子
唐津市	坂本 蜂朗
横浜市	菊地 政勝
交野市	森本 弘風

金太郎ケース蹴破り飛び出しそう
すんなりと柙へ悔いのない笑顔
いくつもの例えそれぞれに生きる
わが余生笑みのケースがたんとほし
バイブルはこの世のケース網羅する
反魂丹デンと居すわる葉箱
例外はあるがとケース並べ立て
脚立から机にもしたりんご箱
継続は生きると決めている事例
小刀が必ずあったペンケース
泣き虫が善人だとは限らない
ケースバイケースが好き風見鶏

佳

ケース・バイ・ケースとうまく逃げられる
深読みのケースを好み梅を干す
人により効き目の違うビタミン剤
ポジティブになれる私の玉手箱
新入社テストケースで試される

人

フルスインクしている春のシヨウケース河内長野市 山岡富美子

地

富士山の噴火も頭に入れとかな 篠山市 遠山 可住

天

法律がいいえ世間というケース 唐津市 仁部 四郎

軸

矛盾するケースのうまい捉え方

大阪府	高木 道子
紀の川市	宇野 幹子
和歌山市	柏原 夕胡
岩出市	村中 悦男
枚方市	寺川 弘一
大阪市	柴本ばつは
松江市	三島 湊丘
黒石市	佐藤 古拙
紀の川市	辻内 次根
鳥取市	岸本 孝子
弘前市	高瀬 霜石
豊中市	水野 黒兎
八尾市	村上ミツ子
弘前市	岡本 花匠
高槻市	原 洋志
犬山市	金子美千代
大阪市	板東 倫子



追悼 どっしり・ゆったり・聞き上手

ろまん

長谷川 呂万さんのこと

岸和田川柳会会長 岩佐 ダン吉

遺伝子が平氣の一升飲ませてる 呂万
騒ぎには巻き込まれない老いの知恵
傘寿記念十年日記買ひ求め

焼香を待つ列に出る薄いお茶
先祖から続いた屋号カナになる
まだ奥に人が住むのかかずら橋

岸和田川柳会四代会長だった呂万さんが昨年(の)11月11日、89歳で旅立たれました。呂万さんは04年に芳地狸村さんから会長を引受け2年間、「家族ぐるみで楽しむ岸川会にしよう」が口癖。会長を井伊東吉さんと交替した後も、ご夫人とよく月例会に見えていました。

呂万さんは私の19歳先輩、会長の時も同じ町内に名番頭である東吉さんがおり、実務を取仕切る呂万さんとお話する機会

は少なかつたように思います。でもどっしり・ゆつたりの聞き上手で、たまに私が句会の運営などで提案すると「あ、それはいいですなあ、やってみましょう」時には「ダン吉さんはあちこち行つてくれているので句(大)会の選者の推せんはありませんか」。

何より東吉さんと「東ヶ丘(町)川柳会」を創立され、「家族ぐるみ」が今や、「町ぐるみ」の川柳へと発展されたことは特筆すべきでしょう。

呂万さんは三重県出身で大蔵省財務局を55歳で退職された後も、10年間を金融界で活躍された。

ご夫人から「夫は旅行が好きでブラジル以外は世界と一緒に回った、趣味はゴルフ」温厚で奥さん孝行の楽しい日々だったと聞きました。

少子化に無縁うちには孫九人
過不足のない人生で平和です
若者の辞書から恩の字が消える
敵味方サツと握手のノーサイド
余生なお社者をしのぐ好奇心
憧れの南十字をいつの日か

今岸和田川柳会は呂万さんらの財産をさらに大きくする。岸和田に川柳の風を。作戦に取組んでいます。

居酒屋・焼肉店・レストランからホテル・法律事務所・医療生協：市内11ヶ所に月交替で焼杉板の川柳色紙と岸川会紹介のチラシを届ける、お客さんから「お前んとこ、面白いことしてるんやなあ」の声もあると聞いています。「読む人から詠む人づくり」も、創始者である高橋操子さんから6代、64年の岸川会の歴史をさらに輝かしたいと思うのです。

初歩教室

題一厚い

太田 昭

今回の課題の「厚い」を「熱い」の意味で作られた方が散見されました。

以前にも申し上げましたが、誤字脱字は作句の上で決定的な致命傷になりますので、課題を与えられたら、まず辞書を引いて頂き、十分に課題の意味を捉えてから作句をする様にご注意下さい。

【少しの修正で良くなる句】

原体当たり破つてみせる厚い壁 武人
添体当たりで破つてみせる厚い壁
原厚すぎる厚意の陰に裏を見る 宏造
添厚すぎる善意の陰の裏を見る
原面の皮厚い人程長生きし 定廣
添面の皮厚い人ほど長く生き
原厚着して雪道歩く身の重さ (山) 久子
添厚着して雪道あるく不器用さ
原厚化粧若い娘どの娘も同じ顔 明美
添厚化粧どの娘を見ても同じ顔

原人情の厚い被災地春がきた 凱柳
添人情の厚い被災地春を待つ
原古希近し年輪語る分厚い手 (中) 修
添古希近く年輪語る分厚い手
原春めいて部厚い衣類それぞれに 冷子
添春めいて部厚い衣類脱ぎ捨てる
原厚底の靴脱ぐ和室お断り 利子
添厚底の靴脱ぐ和室苦手です
原お札立て厚さ競ったポーナス日 絹枝
添諭吉積み厚さ競ったポーナス日
原万札はいつでも厚い方がよい 和幸
添福沢諭吉いつでも厚い方がよい
原ダイエット厚いステーキ罪深い とも湖
添ダイエットに厚いステーキ罪作り
原年拾い厚い情にはもろくなる 正二
添年重ね厚い情けにもろくなり
原陸奥の厚いもてなし至福の湯 (徳) 正子
添陸奥の郷厚いもてなし至福の湯
原欲望という生甲斐の厚い壁 (富) 恵子
添欲望という生甲斐のある厚い壁
原厚化粧弾丸はずむ女子の会 (高) 道子
添厚化粧弾丸のはずむ同期会
原厚着な顔で倅せ掴んで (畑) 節子
添厚着な顔で倅せ掴める
原厚い友情返すことなく逝きそつた こずえ

添厚い友情返さぬうちに友は逝き
原電子より部厚い本の温かさ 孔一
添電子辞書より分厚い辞書の温かさ
原厚着して春よ来い来い口遊む 律子
添厚着した春が暑いと薄着させ
原厚い辞書仲良くなった趣味はじめ 治子
添厚い辞書と仲良くなつて句を作り
原ご厚意に感謝甘えることにする 秋星
添ご厚意に甘え感謝をいたします
原温厚な仮面の下に鬼みつ 玲子 (株)
添温厚な仮面の下に鬼が棲み
原厚塗りで隠せるところ隠したい 真砂子
添厚塗りで皴のすべてを隠したい
【添削句】
原一瓶ががすぐになくなる厚化粧 晴雄
添化粧瓶使い切つて厚化粧
原春うらら厚いコートがいとま乞い 妙子
添厚いコート暇乞いをする春の風
原厚い本読み通せずにゴロ寝用 史郎
添読み終えず枕にしている厚い本
原厚着させられて汗かく婆ちゃん子 亜希子
添婆ちゃん子いつも厚着をさせられる
原意味深い指輪の石が厚い愛 ミヨノ
添厚い愛もらつた指輪意味深い
原言葉には必要はなし厚化粧 (前) 洋子

添言葉にはならないほどの厚化粧

原歳かなあ会話の飛躍厚い壁

添若者と話の合わせぬ厚い壁

原厚化粧夫の前なら顔洗う

添夫の前で素びんになる厚化粧

原ねむれないふ厚い本をまくらにし

添うたた寝に枕にしている厚い本

原しつとりと厚めに作る玉子焼き

添せがまれて厚めに作る卵焼き

原百科事典電子辞書に席ゆすり

添百科事典席をゆすった電子辞書

原ひさかたの卒業名簿厚かった

添厚かった卒業名簿うすくなり

原厚い地図夢くれる日日走つて

添夢走る広くて厚い世界地図

原面の皮加齢とともに厚くなる

添歳重ね厚さを増した面の皮

原厚化粧たまには違うキャラで行く

添違うキャラで洒落込んでいる厚化粧

原天使の嫁手厚い介護に涙する

添嫁の手の厚い介護に涙する

原厚い壁楽しんでる君乾杯です

添厚い壁に挑む貴方に乾杯す

【入選句】

本性を巧みに隠す厚化粧

喬

安子

モモ

温子

(柑)恵子

美紗子

開子

英男

(高)弥生

紀美恵

和香子

回春子

しあわせの厚さを計る笑い声

厚塗りを落とすしビエロの深い息

自惚れが上達阻む厚い壁

太陽がのぞき厚着を脱ぎ捨てて

四島に厚い期待が春を待つ

被災者に分厚い支援急がねば

お気に入り来て待て成しが厚くなる

分厚い本読み切れぬまま返却日

する方が厚く感謝のボランティア

下心分厚く入れる熨斗袋

孫叱る親の言葉にある厚み

三人の子育てすんだぶ厚い手

サラリーの諭吉の厚み懐かしむ

春風に厚手のコート脱ぎ捨てて

日銀の厚い壁抜くアベノミクス

父親の厚い愛情子に救う

厚い雪それでも春の匂いする

返済は礼厚くして言い逃れ

薄着して束の間の春また厚着

人生の厚みを増して古希迎え

苦難越え厚い信頼共白髪

【佳句】

路地裏の人情厚い隣組

人情の厚い暮らしも散り散りに

分厚い手現場育ちの父が好き

美知江

心咲

信二

孝明

(滋)修

紀雄

元三

登美子

(齊)宏子

狸月

(石)久子

志津子

一泉

忠貞

勝治

大子

洋一

克三

文香

せいじ

憲

ひろ子

つな子

義雄

糞虫が厚着で風に揺れている

分け合った厚い情けがあつた路地

真実の声をささげる厚い壁

大勢の厚いご縁で生かされる

【今月の推せん句】

拉致数の北海のベールが厚過ぎる

拉致家族にとつて、北のベールの厚さは憎く、どうしようもない苛立ちでもありましよう。この厚いベールを剥せる日の近いことを願わずには居られません。

ごわごわの分厚い父の手が好きだ

節々の太い、ごわごわした父の手。なんて温みのある手であろう。苦勞に耐え、働き通した、このごわごわした手を子供達はみんな好きなのだ。

新しい土地で出会った厚い壁

坂上のり子

遠方のシドニーからの、欠かさぬご投句に感謝致します。異国の新しい土地で出会った壁は、どんなにか厚く頑丈な壁であつた事でしょう。想像すると胸に響きます。

【選を終えて】

まず貴方ご自身に焦点を当てて作句をして頂きたいと思ひます。焦点が合わず、何を詠まれているのか理解し難い作品が多く見受けられます。

きつこ

昭枝

(楠)富子

一文

大本和子

川柳塔鑑賞

同人吟 北野哲男

— 4月号から

震災の傷跡と豪雪で落ちつかない東北

にもようやく桜前線が北上し、何となく心が浮き立つ時候になりました。

少し心のほころんだところで、多彩な句の中から市井の生活臭のある句を中心に鑑賞させて頂きましたが、正に人生いろいろを堪能、楽しくてしんどい時間でした。

七十歳から川柳に触れた視界の狭い私の鑑賞には、自己流の価値観が出てしまいましたが、お許し下さい。

三寒四温バイオリズムは春モード

小川 てるみ

人だけでなく生き物すべてが春のモードになって早春の期待があふれています。

腐葉土になって命を全うす

牛尾 緑良

日の当る場所で充分役割りを果たした方の達観の心境を、読ませて頂きました。

この一句からたくさんの物語りが生れ

る、奥の深い余韻に感服。

内緒だがぼくにも舌が二枚ある

三浦 強一

川柳でなくては表現出来ぬ一句。誰もが隠し持っている二枚目の舌は、その働き具合で非難ばかりでなく潤滑油にもなる、不思議な役目を持っています。

ありがたい医療費控除せずにすみ

平松 かすみ

「手と金のかからぬ老い」を目指してもなかなか叶わぬ現実のなか、力まない健康讃歌に拍手をおくります。

本当におめでたいことです。

不発弾捨てに時々旅へ出る

須郷 井蛙

不発弾の措辞に脱帽。捨ててもまた出てくる不発弾、処理に資金と時間が必要。

独り身もまんざらでない朝帰り

西内 朋月

羨ましいような、淋しいような、読み

方に選択の幅が広い句で見逃こせません。

賞味期限舌に聞いたら大丈夫

加川 靖鬼

エッ本当。そう言えば私の母親の舌も確かだったように思います。

昔は賞味期限などの表示はありませんでしたが、今は表示に頼り過ぎかも…。立派な舌を活用してエコ暮らしを。

六十がやたらに若く見えて来た

藤本 直

全く同感。干支二回りほど下なら自分の子の齢に近い。子なら老けなかったなと思うのに、他人なら若く見えるのは不思議。通って来た道が懐かしい。

ハートもう強化ガラスになつてきた

吉井 菜々子

男のハートなら強化ガラスの表現は無理です。新しいスタイルの女性の句に目を見張りました。力強い躍動感のある生き様が透けて見えて、頼もしく若々しい未来志向に期待大です。

円熟はしていないけどおばあさん

高島 啓子

ハハハハ。人間いつまで経っても円熟の自覚は出来ませんが、気がつけばやつぱり高齢者。でも好奇心は旺盛。

湯けむりに時効の話盛り上げる

矢倉 五月

仲の良い友との旅の楽しさが見えます。「時効の話」はもう何回も話したり、聞いたりしていますが、失敗や失恋は過去形になると雰囲気を感じ上げます。

定年後偶数月が好きになる

森松 まつお

年金の降り込みは偶数月。現役の頃には思いもよらなかった感慨です。

ささやかな範囲ですがリズムミカルに。

立つたままズボンが穿けるありがたさ

米澤 俣子

健康のありがたさを日々実感の一句。

私も立つたまま靴下が穿けていたが、八十二歳の誕生日頃から不安定になって来たので止めました。残念。

介護する胸に天使と魔女が棲む

永原 昌鼓

体験をした方の実感でしょう。

絆が強い程その落差が大きいのが実態で、介護する方は当然ですがされる方も同じ思いを抱いている様です。いろいろなことが起きますが、最後はやっぱり悔いを残さない事だと思います。

芋の子を洗うと少子化を思う

夏目 一粋

昔は子沢山が当り前。その中で色々なことが学べましたが、今は沢山芋を洗うことも減り、子どもの声も聞こえません。少子高齢社会の行先は明るいのか。

婆ちゃんはずうふで今日も家を留守

榎本 日の出

好奇心老いる私を支えてる

堤 梢代

百メートル走る自信はある七十

福西 茶子

年寄りが元気で文句有りますか

竹村 紀の治

知りたがり出たがりアンチエイジング

吉田 陽子

年寄りとは好奇心が少なくなった症状のことで、生れて何年経ったかと言うことではありません。

日の出さん、陽子さんの句は「婆は達者で留守が良い」を実践して元氣。好奇心の固まりのような梢代さん。茶子さんは不死鳥かも知れぬ。紀の治さんの意気たるや真に壮なるものあり。

川柳界を牽引するのは今や高齢者。

福は内微笑む上寿の姑の面

山田 婦美子

上寿とは百歳（百二十歳とも）のこと、介護している姑の顔がにこやかな福の神に見える心のゆとりが見えます。福は内の心打たれる表現に敬意。

たしなみに変えてお酒の良さを知る

升成 好

遅まきに覚えたお酒美味なこと

須磨 活恵

天の美祿と言われるお酒は神代から大切な嗜好品。もっと女性も……。比べて男性の酒の句ははんなりとしたところが少ないようですが、たくさんありました。

聞き上手酒は冷えても風和む

吉村 一風

家で呑む酒代高がしれている

小野 句多留

五勺でも飲めぬと飯が美味くない

村上 玄也

そのうちに愚痴も飛び交う通夜の酒

島田 誠一

お終いに

この薬みんな止めたらどうなるか

浅野 房子

水煙抄鑑賞

— 4月号から

居谷 真理子

赤い実のひとつは私の本音
私はそれでも誰か愛したい

栃尾 奏子

どれも同じようなつややかな実。でもこれだけは、虚飾になかった一つの赤。「それでも」に辛い過去が匂います。まっすぐで清らかな句です。

余生とは思わぬための恋心

辻村 ヒロ

第二の生、第三の生があつたとしても、余りの生などあろうはずありません。

美しく生きるためにも、恋心を！

プロボース助走の長い男だな

真島 久美子

笑っちゃいました。いつまで走ってるんでしよう、さつさと跳べばいいのにネ。受けとめるか、身かわすか、決めるの

は私。もう決めてます。

紙一枚こんなに重い春の午後

菊池 京

どんな紙なのか想像させてミステリアス。春の午後は空気もけだるく心も重く。軽く散るのは無責任な花びらだけ。

淋しさと引きかえに出た太鼓腹

岡田 元

淋しいと飲むのです、食べるのです。あげくこのお腹。誰も淋しい人だと気づいてくれません。淋しいなあ。

大阪は犬も大きな声で鳴く

高杉 力

大阪、それも天王寺あたりを歩こうもんなら—まあ賑やかなこと。ほんで、犬かて大声の大阪弁で鳴きよるねん。

青春の本に輝く赤い線

上山 堅坊

何十年前も前のアンダーライン。実際は色あせた赤だけど、作者の目にはあの頃の情熱が輝いて見えます。

長生きの母の家系はよく歩く

能勢 利子

歩くからお元気、お元気だから歩く。何げない詠みぶりの中に、お母様に対す

る愛情と誇りが読みとれます。

一枚の枯れ葉を挟む自動ドア

酒井 健二

無機質な自動ドアに挟まれた枯れ葉。そのままの情景としても、あれこれ深読みしても、面白い句です。

血管は細る涙腺太くなる

生田 寒之

メモ書けばそのメモ探す日々となる

吉野 いさお

ユーモアをまぶして老いを詠まれました。お二人のお年はわかりませんが、私は60代半ば。同じ状態です。

失敗は思い出さないことにする

巖田 かず枝

ヒロさんのように恋心を持って、利子さんの家系のように歩いて、失敗なんてすぐに忘れたふりしませよ。これで楽しく長生き間違いなし。

川の字の真ん中で猫軒かく

谷田 多美子

大の字(?)になって大軒の猫ちゃん。両脇で小さくなって寝る飼主さん。

幸せな光景ですね。皆さんどうぞ良い夢を！

民族の詩歌 (12)

―俳句と川柳 ①

三好 専平

古池や蛙飛びこむ水の音 芭蕉

これほど有名な俳句はない。蕉風確立の句であるとする。芭蕉7部集の「春の日」にあり、1686年ごろの作。

江戸時代になり、連句会が盛んになってから、芭蕉は師匠として、各地に旅をして、歓迎された。「奥の細道」はそうした中から生まれたものである。連句会とは、ご承知のように、古くからの俳諧連歌の会を真似して生まれた「座」で、575・77・575と、何人かで続け、36句（歌仙）・50句・100句にまと

め上げる、連想による集団芸術をいう。その第1句を「発句」といった。発句がなまって俳句になる。

発句には一定の決まりがあり、句切れ・季語・完結性、などがあげられる。この古池も発句で、「や」と「音」で切れる。「蛙」が季語で春。名詞で終わるのを体言止めといい、これで完結している。

一見何事もない写生句のようであるが、弟子の支考が「情は全くなきに似たれども、寂びしき風情を含む余情とはこのことなり」と褒めたたえた。「わび」「さび」のはじまりである。

英文学者の外山滋比古は『省略の文学』（1973）の中で、「俳句の特質は、この「切れ字」にあるとし、断絶と無限の余情が醸し出す凝縮の文学で、T・S・エリオットの『荒地』にも影響を与えた世界にも類希な短詩形文学である」といい、森原武夫の第二芸術論（1957）に反論した。

ところが、蛙は池に飛び込んでも、音を立てないという学者が現れた。そうなると、この俳句は写生ではなくて、想像の所産ということになり、さらに豊かな世界が開けてくる。アインシュタインの発見に匹敵する。

川柳は、同じ詩形でありながら、その発生は違う。俳句が上の句につけるのに対して、後ろの句につける。前句付け、である。77の題が出され、それに575を上につけるのである。たとえば、有名な「雷をまねて腹掛けやつとさせ」は「こわいことかなこわいことかな」の前句である。横町や裏町の、だれかがいくばくかのお金を出して、句会に句を出す。胴元の点者がいい句に賞金を出す。ささやかな江戸庶民の楽しみであった。現在でも、川柳の会は必ず「兼題」が出され、それにこたえるという形で進行する。したがって、川柳は余情を尊ぶというよりは、むしろその機知に拍手を送り、座の雰囲気酔う集団芸術である。

第二回 春の川柳塔まつり誌上大会

全国的に誌上大会がたくさん開催されていますが、第二回春の川柳塔まつり誌上大会に際し、北は北海道から沖縄まで738名のご参加、ご支援を戴きました。ありがとうございました。また貴重な誌面に誌上大会要領をご案内、ご掲載賜りました各川柳社、個人的にそれぞれご紹介くださいました各位のご厚情に、心よりお礼を申し上げます。

ご投句戴きました作品は、無記名の句箋のまま6人の選者にお送りし、選句をお願い致しました。返送された句箋は受付番号と照合して作者名を記入致しました。選者の皆様のご労苦に深く感謝申し上げます。

入選作品は各題とも平拔111句、秀句10句、特選1句、計122句です。なお、各題特選にはささやかですが、賞品をお送りしました。

各 題 特 選 句

雑 詠	絵	学 ぶ
佐藤美文選 晩学の森をわくわく歩いてる 鳥取 細田裕花	新家完司選 優しさをやさしくされてから学ぶ 鳥取 下田幸子	西出楓楽選 水彩のタッチで君といえる時間 兵庫 吉井菜々子
川上大輪選 海の絵の前で魚になっている 鳥取 平尾正人	森中恵美子選 日が昇るやっぱり有難うと言う 大阪 岩佐ダン吉	小島蘭幸選 エンディングノートの中で飯を食う 大阪 森中恵美子

学

ぶ

佐藤美文選

予習する雀の庭が騒がしい
新しいノートに鉛筆が躍る
ライバルに恋の偏差値なら負けぬ
神棚の学習しない宝くじ
ここいらでいかに死ぬかを学びたい
貪欲に学ぶ赤子の可能性
転んでは泣いて自転車上手くなり
無学だが人間の道学んでる
晩学のペンが時々眠り出す
赤よりも朱よりも凜とかすみ草
蹊いて学ぶわたしの処世術
雑談の中で拾った温いまり
挫けないように睨んでいる辞典
たつぷりと百歳までの日を学ぶ
三世代たがいな学ぶものがあり
自分から足を地につけ学び取る

埼玉 茂木かをる
福島 佐藤 千四
大阪 山岡富美子
岡山 高木 勇三
大阪 穂口 正子
愛媛 花岡 順子
埼玉 尾内 理雄
沖縄 多良間典男
島根 多久和敬子
青森 菊池 京
大阪 栗田 久子
徳島 新居 秋子
兵庫 吉井菜々子
奈良 中山恵美子
広島 小川 道子
鳥取 中原 章子

謙虚さに戻って背中から学ぶ
渋柿は食べたし瘤も作つたし
学生さん優先席でお勉強
ストレッチ猫の背伸びになあるほど
学ぶこと多くて年をふと忘れ
泥をかけ泥をかけられ学んでる
ライバルに学んだ負けん気の強さ
先生が生徒に学ぶのも誉れ
押して引くコツを学んでから大人
手と足で学んだことは忘れへん
学問は宝だ春の陽に翳す
さよならを学び優しくなる明日
七十の手習い鉛をしのばせて
衰えた脳に学びの活を入れ
デバ地下をぐるり遣り繰り上手くなる
鉛筆を削り半歩ずつ学ぶ
老いてゆく美学死ぬこと怖くない
昨日より今日より明日とゴールなし
十七字学んだひとつひら仮名に
茶を学ぶまずは痺れと向かい合う
雑学に長けて幹事に打って付け
八十の手習い気持先走る

神奈川 杉山 太郎
奈良 板垣 孝志
東京 佐々木正康
大阪 高木 道子
鳥取 岩崎 和子
富山 有澤 嘉晃
和歌山 楠原 富子
大阪 藤井 則彦
大阪 柿花 和夫
大阪 田口 和代
大阪 太田扶美代
大阪 枳尾 奏子
大阪 伏見 雅明
大阪 竹田美美子
奈良 三浦 芳子
栃木 荻原 鹿声
大阪 片岡智恵子
茨城 徳永 妙子
岡山 丸橋 野蒜
岡山 藤成 操江
大阪 粕山 隆盛
和歌山 福本 英子

障がいの子にやさしさを学ぶ日
 雑学を脳に詰め込み本の虫
 惚けまいと白寿の母が指を折る
 そして匠の業に目が離れない
 駈けて行く背にカラフルなランドセル
 平凡が良いと歳月から学ぶ
 負け試合で知るあんなことこんなこと
 たそがれて学ぶものあり折れた葦
 登ったら下る道理を今学ぶ
 失敗に学んだ筈がまた転ぶ
 ホーホケキョ辞書で遊んでいる夫
 優しさを孫の対話に教えられ
 先生が好きで数学好きになり
 学ぶことまだある老いの欲深し
 学ぶことまだあつて石の上
 へそくりが学ぶ後押ししてくれる
 正しいほうへ形状記憶するように
 生きるって楽しいもつと学ばねば
 雨風に学ぶものあり晴れもまた
 陽の当る石ではないが学ばねば
 創業は社史に夜学の一ページ
 サボテンの棘をとくとき師と仰ぐ

愛媛	神野きつこ	鳥取	奥谷 彩子	岐阜	武藤 敏子	青森	松山 芳生	大阪	高田美代子	和歌山	大峠 可動	大阪	志田 千代	愛媛	山之内さち枝	和歌山	上田 紀子	大阪	西澤 司郎	奈良	山下怜似子	兵庫	宇津 慶子	宮城	伊藤ちえこ	佐賀	門井 孝	和歌山	北原 昭枝	大阪	木見谷孝代	大阪	赤松ますみ	奈良	池田貴佐夫	兵庫	奥田みつ子	兵庫	濱邊稻佐嶽	埼玉	岡部 暖窓	青森	岩淵 黙人
----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	-----	-------	----	-------	----	--------	-----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	------	-----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------

一から五学び次の日一から五
 てのひらで遊んで学ぶ男運
 優しさを学んで帰る退院日
 失恋はおさらいしても繰り返す
 入門書買ってみたいと思う春
 苛めから教わっている子の痛み
 晩学の扉思ったより重い
 卒業のそれから長いカリキュラム
 大笑いしてすんなりと入る智慧
 平等を学びカラスになりました
 戦いを学んでサルは進化した
 貴方を学びあなた転がすたなごころ
 学ぶ脳行方不明となりけり
 晩学のパソコン孫にゴマをすり
 何学ぶつもりか街へ出たカラス
 晩学の辞書はしつとり手になじむ
 起きあがり小法師に学ぶ一人旅
 学ぶにも心の正座教えられ
 知るは楽しみ雑学の本を繋らせる
 足し算を学び引き算する家計
 ふる里に学ぶ気配りおもてなし
 生疵が絶えない独学のお酒

大阪	古今堂蕉子	石川	藤村 容子	大阪	島田千鶴子	東京	井手ゆう子	和歌山	小谷 小雪	大阪	太田 昭	京都	高島 啓子	茨城	佐瀬 貴子	兵庫	中上千代子	佐賀	真島久美子	大阪	片岡 義順	広島	村上 和子	兵庫	丸山 孔一	岡山	山崎三千代	高知	岡村 千鳥	神奈川	菊地 政勝	岡山	田中ケイ子	大阪	前川 善之	三重	北田のりこ	大阪	平松かすみ	大阪	江見 見清	大阪	上嶋 幸雀
----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	-----	-------	----	------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	-----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------

学ぶ程深いところへ落ちていく
 孫に叱られ捏ねるケイタイ
 晩学の教師屋台の哲学者
 鉛筆は学ぶ生徒が大好きだ
 残照へしかと六十路のペンを持つ
 学ばねば渡れぬ橋もある此の世
 子育てのいろは母さんありがとう
 耐えるのも美德と学ぶ冬木立
 向上心いつもポッケに入れておく
 春風から出発点を学んでる
 金儲けばかり学んだ日本人
 世の中を学ぶと不等式になる
 たましいが濁らないようページ繰る
 耳学問たつぷり乗せて船を出す
 学ぶことあってそば立つ猫の耳
 父の汗滲んだ学費だったのか
 雑談の中で拾ってきたヒント
 学ぶこと数多で梅の実は青い
 雑学の街で心を太らせる
 哲学も遊びも学ぶ夜の街
 涸れてゆく脳へ雨読が間に合わぬ
 教室の隅で迷ってばかりいる

島根	川本 畔
大阪	藤島たかこ
大阪	澤井 敏治
鳥取	坂本とも湖
兵庫	成定 竹乃
岡山	小林 妻子
奈良	坊農 柳弘
広島	大森 昭恵
大阪	佐藤 英美
大阪	立蔵 信子
島根	藤井 寿代
鳥取	森山 盛桜
兵庫	山口ヨシエ
大阪	関 よしみ
和歌山	牛尾 緑良
広島	石原 淑子
大阪	森松まつお
岡山	藏内 明子
奈良	牧浦 完次
島根	三島 淞丘
愛媛	除田 六朗
大阪	平井美智子

父の背と母の優しさ見て学ぶ
 スーパーの棚から学ぶ世界地図
 失敗を重ねて学ぶことばかり
 好奇心全開カルチャーの机
 学ばねば未知なる世界増すばかり
 学舎に時代の風が通り過ぎ
 母の味知らないうちに学んでる

秀句

性善説は課外授業に行ったきり
 鳥に虫に学び新幹線進化
 横風に弱い週刊誌の知識
 蝸牛みたいな学び方ですが
 人は善誰に学んだ訳でない
 賢いとしんどいやろと思います
 座右の銘に躓いた石
 ポジティブを学ぶとすれば青い空
 カルチャーで学ぶ老後の歩き方
 森に生き森が教えてくれたこと

特選

軸吟

兵庫	小西 礼甫
三重	橋倉久美子
奈良	毛利 元子
兵庫	小山 紀乃
愛知	中村 訓子
和歌山	北山 絹子
鳥取	深澤千恵子
秋田	月波 与生
大阪	水野 黒兎
和歌山	楠見 章子
大阪	矢倉 五月
愛媛	中居 善信
兵庫	上田ひとみ
宮城	山田 純一
島根	石橋 芳山
静岡	岡田 史郎
千葉	日下部敦世
鳥取	細田 裕花
埼玉	佐藤 美文

学ぶ 新家完司選

カルチャーでまた動き出す錆びた脳
新しいノートに鉛筆が躍る
勉強も苦になりません五七五
五七五道は遠いがまだやれる
句作りにびたり寄り添う広辞苑
ナメクジにも学ぶものありじつと見る
身を守る術を丸虫から学ぶ
蝸牛みたいな学び方ですが
教科書にないこと世間から学ぶ
大笑いしてすんなりと入る智慧
健康法片っ端から読み漁る
十二年学んで話せない英語
引き際を覚えてくれる沙羅の花
勉強をするほど知らんこと増える
優しさを学んで帰る退院日
流れゆく雲に学んで漁をする

大阪 伏見 雅明
福島 佐藤 千四
大阪 長井 善純
大阪 中井 アキ
和歌山 小川 イセ
大阪 藤井 則彦
奈良 坊農 柳弘
大阪 矢倉 五月
大阪 中野 健吾
兵庫 中上千代子
鳥取 福西 茶子
大阪 上野 楽生
岡山 田中ケイ子
大阪 河内 天笑
大阪 島田千鶴子
和歌山 土屋起世子

方言を学んで作るだんご汁
ふる里に学ぶ気配りおもてなし
薬に学ぶあきらめない気力
入院がスローライフのきっかけに
歴史から学ぶ平和の有難さ
紺紙金泥学んで帰る奈良の旅
老眼鏡古事記に食らい付いている
風邪の子にちゃんと宿題届けられ
お隣りの孫が先生カタカナ語
味噌汁は見様見真似で母の味
挫折からヒントを掴み這い上がる
新聞の記事から学ぶ句読点
学び続けることこそアンチ・エイジング
殺し合う愚を学んでも学んでも
タイムスリップして学びたいことがある
戦いを学んでサルは進化した
自然から学び種まく用意する
年齢は不問の門の戸を敲く
父祖からの宝となった農日記
熟年になって習ったクッキング
放課後に学んだことが役に立ち
学力不振されど無遅刻無欠席

兵庫 矢野 野薫
大阪 江見 見清
和歌山 堂上 泰女
大阪 荒木 郁子
大阪 海老池 洋
大阪 片岡智恵子
奈良 安土 理恵
佐賀 真島 清弘
佐賀 仁部 四郎
兵庫 黄 茂山
奈良 小金澤貫一
鳥取 有沢せつ子
徳島 黒田るみ子
奈良 柳瀬 孝子
埼玉 中村 伸子
大阪 片岡 義順
大阪 小栢こずえ
大阪 稲葉 洋
北海道 小沢 淳
静岡 佐野由利子
兵庫 藤井 宏造
大阪 岡野 一幸

雑学の街で心を太らせる

とりあえず反面教師にはなれる

ロボットとタッチパネルが恩師です

負け試合で知るあんなことこんなこと

生疵が絶えない独学のお酒

向学心に燃えたあの頃恋もした

たっぷりの道草で雑学を搞む

高齢者大学院に籍がある

蹟いてがらり人生観変わる

何学ぶつもりか街へ出たカラス

日本地図秘湯巡りで学んでる

太陽の下で学んだふくらはぎ

好奇の目耳学問が役に立つ

喧嘩した後で反省して学ぶ

鼻柱折れて謙虚さ学ばされ

一坪の土にわたしが教えられ

学ぶのは好きだが試験大嫌い

姑の白寿に学ぶケセラセラ

人間の弱さを自然から学ぶ

今やつと向学心に燃えてきた

悪知恵も学んで帰る一年生

遠く来て敗者に学ぶこと多し

奈良 牧浦 完次

大阪 井丸 昌紀

静岡 中田 尚

大阪 志田 千代

大阪 上嶋 幸雀

宮城 伊藤ちえこ

大阪 須磨 活恵

兵庫 上垣キヨミ

島根 松本 文子

高知 岡村 千鳥

大阪 穂山 常男

長野 丸山 健三

奈良 池田貴佐夫

鳥取 中村 金祥

兵庫 宮崎美知代

大阪 中島 華

鳥取 竹口 清信

兵庫 伊勢田 毅

茨城 櫻村 日華

大阪 松尾美智代

大阪 坂上 淳司

兵庫 遠山 可住

雑草を引いて学んだ根の力

涸れてゆく脳へ雨読が間に合わぬ

失敗から学ぶ根気が尽き果てる

先輩の悪いとこだけ身につける

まだ銃を捨てられないのかと昭和

捨て方を若い嫁さんから学ぶ

孫に背を押されハングル学んでる

晩学の汗が仲間恵まれる

精進を重ね真打ち声弾む

脱線の授業血となり肉となる

晩学の罪思ったより重い

百点は無くても晩学の楽しさ

母さんの味学びましたよ弁当で

カンナ屑拾い師匠の技盗む

それだけの値打ちと知った特価品

添削の朱色の文字ありがたい

友人に学ぶ自分に欠けたところ

八起き目にやつと学んだ自然体

空砲に慣れたカラスの無表情

人生のいろはを学ぶ縄のれん

隕石から学ぶ一寸先は闇

カルチャーで学ぶ老後の歩き方

鳥取 大塚美代子

愛媛 除田 六朗

鳥取 後藤美恵子

大阪 奥 時雄

大阪 高杉 力

大阪 岩田 明子

大阪 針生 和代

青森 福士 慕情

佐賀 木村 宏

大阪 前原 正美

京都 高島 啓子

鳥取 斉尾くにこ

大阪 小林 わこ

島根 伊藤 寿美

愛媛 黒田 茂代

鳥取 細田 裕花

岡山 上田真智子

奈良 笹倉 良一

島根 竹治かし

大阪 小谷 集一

兵庫 渡辺 信也

静岡 岡田 史郎

転んでは泣いて自転車上手くなり

これからの道の長さよ写経でも

医者よりも医療学んでいる患者

テレビから教えてもらうことばかり

孔孟の教えはどこで忘れたか

万象に学ぶ子供の目になって

両眼を逸らさぬように見る事象

あこがれの人から学び続けてる

病得て体の仕組みよく学ぶ

テレビから学ぶ反省なき謝罪

狡猾のコツをにんげんから学ぶ

糠床の冷たさ学ぶことばかり

万物に学び頭は垂れたまま

空海山みんな私の教科書だ

勿体ないをMOTTAI NAIに教えられ

永劫と刹那を水車から学ぶ

大学で遊び還暦から学ぶ

卒業のそれから長いカリキュラム

苦勞したサインコサイン役立たず

震災の脅威を自然から学ぶ

すり切れた辞典柩に入れてやる

イノシシに学ぶ寝床の作り方

埼玉 尾内 理雄

鳥取 政岡未延子

兵庫 亀岡 哲子

大阪 河内 月子

兵庫 堀 正和

奈良 居谷真理子

和歌山 辻内 次根

兵庫 山田 耕治

兵庫 式 みのる

奈良 大久保眞澄

広島 鴨田 昭紀

佐賀 真島美智子

大阪 内藤 光枝

広島 古田比呂子

兵庫 村岡 義博

奈良 井上 洋三

奈良 辻内げんえい

茨城 佐瀬 貴子

鳥取 高浜 勇

大阪 遠山 唯教

北海道 大橋 政良

大阪 井上 一筒

電線の雀に学ぶ危機管理

誠実と寡黙盲導犬から学ぶ

盲導犬みるとお辞儀をしたくなる

赤ちゃんが学ぶ嘗めたり触ったり

たましいが濁らないようページ繰る

ポジティブを学ぶとすれば青い空

コーチには必須科目心理学

秀 句

先生は池上彰さんがいい

横風に弱い週刊誌の知識

試験より戦争で知る世界地図

蹟きはサインコサインタンジェント

親猫の仕草子猫は見逃さず

医学部の授業に欲しい会話術

八十になればシャンソン習いたい

学ぶのは今日から喜寿のスクワット

失恋はおさらいしても繰り返す

学校を建てても減らぬ人殺し

特 選

優しさをやさしくされてから学ぶ

軸 吟

晩学の机を覆うわたほこり

兵庫 緒方美津子

兵庫 酒井 真由

大阪 山岡富美子

大阪 森 茜

兵庫 山口ヨシエ

鳥根 石橋 芳山

奈良 宇賀 史郎

鳥根 安黒登貴枝

和歌山 楠見 章子

鳥取 田口 清帆

大阪 森松まつお

兵庫 加川 靖鬼

三重 北田のりこ

兵庫 田中 章子

岡山 池田たか子

東京 井手ゆう子

大阪 太田としお

鳥取 下田 幸子

鳥取 新家 完司

絵

西出楓楽選

筆洗う明るい明日を描くために
春の絵に替えて今宵はちらし寿司
青空のキャンバスモデル選ばない
絵を誉めて額縁誉めて値踏みする
冬の絵の中でひたすら満を持す
分からない筈だ無題と書かれた絵
絵にしたら私の夢が壊れそう
あたたかい絵だ上手ではないけれど
寂しくて朱い絵の具が減ってゆく
十七の文字にはんやり絵が浮かぶ
もう少し食べていいわとルノワール
才能が眠ったままのボクの画布
価格見て凄いい絵だなと言っている
怪獣と仲良くなって寝る絵本
絵に描いた進路外れて行く余生
再建の絵を何回も描き直し

大阪 海老池 洋
岡山 工藤千代子
和歌山 山西 佳子
広島 堀 さちこ
岡山 小野真備雄
兵庫 村岡 義博
兵庫 丸山 孔一
和歌山 柏原 夕胡
栃木 萩原 鹿声
大阪 大隅 克博
大阪 古今堂蕉子
愛媛 松本 宗和
青森 福士 慕情
奈良 板垣 孝志
大阪 富田 保子
大阪 佐甲 昭二

ユトリロの街で迷って猫になる
絵心は未熟五七五で書く
絵に書いたモチで夫婦をしています
心理テストとても哀しい絵になった
前に佇つ人を見透すモナリザよ
絵にならぬ生きざま抱いて風の中
永田町イソップの絵に画いてみる
キャンバスに描く散骨尊厳死
作者の名聞いて見直す抽象画
絵にすれば雪まで温い冬景色
絵手紙をもらい返事は川柳で
洞窟の壁画に先人のロマン
ふる里の絵はいつだつてすぐ書ける
先生のひと筆を待つ未完の絵
絵てがみの主役はカボチャいい顔だ
人の道絵にしたようなみつをの詩
鳴り止まぬ晩鐘しばしミレーの絵
絵心はないが我れには詩ごころ
ふんわりと平和の使者よちひろの絵
いつまでの絵になるだろう喜寿傘寿
パレットの赤が妥協を許さない
だまし絵に騙されましょう君となら

徳島 黒田るみ子
兵庫 中上千代子
佐賀 真島美智子
佐賀 真島久美子
大阪 内海 幸生
和歌山 三枝真智子
静岡 蘭田 獏香
兵庫 酒井 真由
大阪 村上 玄也
三重 上垣内利凡
兵庫 松本 一等
香川 安田 翔光
愛知 長谷川絃子
石川 藤村 容子
鳥取 前田 楓花
和歌山 岡本 昇
鳥根 川本 畔
鳥取 近藤 秋星
広島 土井 輝恵
鳥取 吉田 弘子
大阪 沢田 和子
広島 若年 幸子

モナリザの泣いてる顔もみてみたい
年毎に色重ねゆく一期の絵

五十年添った日の日も素敵な絵
絵心と戯れているコンパクト

はだしのゲン漫画などとは言わせない
平凡な構図でよろし夫婦の絵

秘めごとをロールシャッハは知っている
絵にならぬ町に暮しの詩がある

飽食の絵ばかり重ねてくるくらし
デッサンの途中天折した友よ

喝采を描くカンバス白いまま
暮しの絵春には春の風といふ

母は旅立つ夕焼けの絵の中へ
デッサンを始めたばかりの四コマ目

実篤の絵を二世帯の居間に架け
脇がいて仕手が絵になる大舞台

いざ描かん今日には今日の花が咲く
絵葉書は幸せだけを書いて出す

風景画気付けば中で深呼吸
幸せに一色ふやす絵の具皿

まるい絵が描けそうわっと泣いたから
絵手紙のころほっこり下手加減

和歌山 宇野 幹子

兵庫 黄 茂山

兵庫 山田婦美子

奈良 山田 順啓

大阪 前 たもつ

鳥取 細田 裕花

大阪 田口 和代

奈良 野田てるを

岡山 小林 妻子

大阪 油谷 克己

宮城 木田比呂朗

奈良 柴田 園江

高知 増田 純子

北海道 三浦 強一

大阪 岩田 明子

奈良 笹倉 良一

兵庫 前川 淳

大阪 寺川 弘一

兵庫 松井 文香

長崎 坂本 弘子

大阪 森 茜

高知 藤田 和恵

富士山の絵がある風呂屋温まる

自転車で夢を売ってた紙芝居

終章の下絵はすでに描いてある

清の絵の中で火花がドンと鳴る

騙し絵がこびりついてる脳のしわ

汚される覚悟を持って白い画布

リハビリの回復具合知る絵筆

平成も昭和も混ぜた絵の具皿

ピカソの絵歩いてくるよ初夏の街

めげそうな私へピンタ太郎の絵

月浴びて絵本の人魚人を恋う

額になど入りきらない未来の絵

曼陀羅絵弥陀の温もり掌に受ける

七色のクレヨンで足るボクの明日

魂の底に魁夷の白い馬

自画像に塗りつぶしたい場所がある

冬枯れの絵となり母はケアハウス

裸体画に見入るポーズが難しい

派遣切り今日の下絵が乾かない

自画像は遠近法で描き上がる

北斎の息が伝わる波しぶき

絵に描いた餅を金縁額の中

大阪 岡田 元

福島 鈴木由美子

高知 小川てるみ

鳥取 岸本 宏章

和歌山 武本 碧

奈良 居谷真理子

兵庫 緒方美津子

岡山 福原 悦子

大阪 神夏磯典子

茨城 佐瀬 貴子

奈良 渡辺 富子

岡山 前田恵美子

鳥取 奥谷 彩子

和歌山 木本 朱夏

愛媛 山之上さち枝

三重 橋倉久美子

岡山 宮崎かおる

愛媛 除田 六朗

岡山 東横ますみ

兵庫 上田ひとみ

鳥根 奥田 勝子

岡山 丸橋 野蒜

サロンパス貼って仕上がるわたしの絵
 遠い日の絵の中に棲むひとがいる
 心の絵筆雨もあり晴れもある
 波の音父と歩いた遙かな絵
 未完の絵繰り返すなど無言館
 感想を聞かれはほ笑むしかない絵
 四コマ目からつばにする絵の具箱
 地球平和気宇壮大な絵空事
 老老介護父母は絵になる夫婦です
 魁夷の絵静寂のなか響き増す
 ジェラシーが邪魔をしている未完の絵
 好きな絵をお描きなさいと雲の筆
 螺旋階段絵になる女降りて来る
 絵に描いた餅がウインクして困る
 旅つづくなお一枚の絵が描けぬ
 原画には迷路が描いてありました
 いくじない男を憎めない踏絵
 正直に話しかけてる子供の絵
 海の絵の前で魚になっている
 絵の中に居場所をひとつ空けておく
 絵の具箱ひっくり返し新天地
 百色を試し自画像まだ未完

奈良	京都	京都	大阪	大阪	奈良	兵庫	兵庫	和歌山	徳島
毛利 元子	山田 葉子	清水 英旺	上嶋 幸雀	加島 由一	柳瀬 孝子	山口ヨシエ	萩原 典呼	北原 昭枝	新居 秋子
	堀 弘子								
	内藤 光枝								
	相原 利徳								
	山岡富美子								
	中村 訓子								
	赤松ますみ								
	金子美千代								
	菅野 泰行								
	平尾 正人								
	田中ケイ子								
	奥田みつ子								

オルガンが聞こえる祖母の肖像画
 離婚印押して騙し絵を抜ける
 ゼロ歳を白寿があやす家族の絵
 絵本ひらけば真冬の海があるばかり
 生かされて絵になるものは何もない
 ちよっとだけふざけ写楽の絵と遊ぶ
 うれしさのまん中にいて絵が描けぬ

秀句

モジリアーニの女と午後の喫茶店
 騙し絵の中から春の鼓笛隊
 明日の絵を探しに炬燵出る準備
 てのひらに赤い吐息を描いて病む
 何かある黒のクレヨンちび過ぎる
 原田泰治の道にわたしがしがやんでる
 太陽と向日葵が笑む私の絵
 レブリカの絵わたしの部屋に丁度良い
 森の絵を飾り青い小鳥を待つ
 よんどころない事情で掛けてある絵

特選

軸吟

奈良	京都	岐阜	兵庫	大阪	岡山	奈良	山口	大阪	青森	岡山	和歌山	鳥取	兵庫	大阪	兵庫	大阪
松本 柁子	高島 啓子	武藤 敏子	大谷 慧水	森中恵美子	河原野折杭	藏内 明子	中前 幸子	針生 和代	岩淵 黙人	池田たか子	楠見 章子	下田 幸子	山本 義子	太田扶美代	吉井菜々子	西出 楓楽

絵

川上大輪選

途中下車足は絵地図にくすぐられ
落書きもアートになれる高架下
平凡な構図でよろし夫婦の絵
うぬぼれが見えぬ絵手紙野辺の花
ボクの絵はゴッホに似てる独り言
わたしは塗り絵あなたのお気に召す色で
地獄絵図など見せられるのだろう
美しいばかりではない家族の絵
老いの絵は墨絵に少し紅足して
描き慣れた筆で余生の下絵描く
ごめんねと叶わなかった絵馬がゆれ
絵に画いた餅になつてゐるあの誓詞
生かされて絵になるものは何もない
ぐいぐいとこころ掴んでくる絵ほん
ひと色を足せば僕の絵も咲える
花花 花絵皿いっぱい春を溶く

茨城 岡 さくら
茨城 毛利 由美
鳥取 細田 裕花
鳥取 夏目 一粋
大阪 野下 之男
大阪 寺川 弘一
大阪 岩佐ダン吉
和歌山 杉山 精子
和歌山 佐藤 千四
福島 上田 紀子
鳥取 竹村紀の治
佐賀 峯 仙子
大阪 森中恵美子
奈良 山本 柳昌
大阪 吉岡 修
鳥根 三島 崧丘

絵としては上出来だったマニフェスト
二十五時おぼろの街で踏む影絵
餅の絵は描かぬと決めた定年後
絵手紙がそつと囁く花言葉
再建の絵を何回も描き直し
リハビリの回復具合知る絵筆
明日の絵を描いて今日の道を行く
カルチャーの絵は貰われず掛けられず
正直に話しかけてる子供の絵
反骨を通す男の直線画
防潮堤絵になる景色消して行く
キラキラと絵本の中で子が踊る
だまし絵の中に私を忍ばせる
絵に描いた餅です喉によく詰まる
参観日いろんな父が貼り出され
定年へ街は他人の絵にもどる
絵に描いた餅を懲りずに搗き直す
美術館煩惱ゆする裸婦がいる
自分の絵書いてそれぞれ巣立つ雛
春の絵に今も行き場のない瓦礫
平成も昭和も混ぜた絵の具皿
裸婦描いて画家の玉子になりました

大阪 松岡 篤
大阪 高田美代子
兵庫 伊勢田 毅
大阪 小谷 集一
大阪 佐甲 昭二
兵庫 緒方美津子
大阪 佐藤 英美
大阪 江見 見清
兵庫 菅野 泰行
大阪 前原 正美
鳥取 深澤千恵子
大阪 辻村 ヒロ
奈良 毛利 元子
大阪 吉村久仁雄
大阪 伏見 雅明
和歌山 古久保和子
大阪 遠山 唯教
兵庫 藤井 宏造
大阪 石田ひろ子
大阪 小川賀世子
岡山 福原 悦子
佐賀 江下 正義

クレパスが喧嘩している幼児の絵
尖閣を描くと波が荒れてくる
春の絵に歌が聞こえてこぬ不況
スケッチブックひらいて旅を辿る幸
無欲だとしても自由な絵が描ける
父の背が冬の絵になる曲り角
高松塚の天平美人消したカビ
どの辺で終わるだろうか私の絵
カアチャンに髭描いてる園児の絵
少年の絵から未来が甞する
騙し絵のように出口のないこの世
骨のない男が餅の絵を好む
スケッチで書いたリングが消える皿
ゆっくりと歩くと絵になった景色
絵手紙の文字がけっこうじゃまになる
似顔絵が凶悪犯を逮捕する
ドガの踊り子に恋した幼い日
絵の中に男の遊ぶ基地がある
隅っこの絵がわたくしの心です
愛を溶く絵筆暴走して困る
純白のカンパスに絵の具の多弁
地獄絵よりこわい現実どう描く

広島 野村 賢悟
大阪 早泉 早人
兵庫 小谷みちよ
大阪 河内 天笑
奈良 大内 朝子
兵庫 古橋 茂子
三重 北田のりこ
兵庫 東馬場美和子
大阪 中野 健吾
和歌山 福井 菜摘
大阪 澤井 敏治
岡山 山崎三千代
奈良 中村 勝弘
大阪 立蔵 信子
奈良 大西 将文
佐賀 井手 良祐
東京 佐々木正康
和歌山 辻内 次根
佐賀 真島久美子
広島 岩本 笑子
兵庫 前川 淳
大阪 笠嶋 惠美

絵本には戦争ごっこ入れないで
ボーナスを攫う美人の肖像画
才能が眠ったままのボクの画布
自画像の短所が消えるまで描く
明日の絵ジャングルジムに声がない
沈黙を絵にしてみると海になる
身勝手な願いを絵馬が天日干し
暮しの絵春には春の風という
四コマ目からつぽにする絵の具箱
陽を浴びて絵画になってゆく棚田
自画像に日々厚塗りをしています
絵にならぬ町に暮しの詩がある
私しか描けぬほんとのわたしの絵
お空に太陽赤く描くのはお約束
離婚印押して騙し絵を抜ける
幸せに一人足りない家族の絵
影絵から転がり落ちてきた民話
絵の中の金魚と春を待っている
引き出しに亡母の絵手紙今届く
につこりとすればまだ絵になりますか
ひまわりを活けるゴッホに遇う予感
絵手紙がくる消息は雪ばかり

兵庫 斉藤 幸男
和歌山 堂上 泰女
愛媛 松本 宗和
和歌山 小川あき子
茨城 佐瀬 貴子
愛媛 大内 節子
大阪 柿花 和夫
奈良 柴田 園江
大阪 上嶋 幸雀
大阪 栃尾 奏子
大阪 山本 蛙城
奈良 野田てるを
大阪 碓氷 祥昭
大阪 片山かずお
京都 高島 啓子
兵庫 小山 紀乃
香川 田岡 弘
大阪 山本希久子
兵庫 竹内 肇
大阪 井本 健治
青森 稲見 則彦
大阪 津守なぎさ

故郷を日曜画家として残す

旅つづくなお一枚の絵が描けぬ

うれしさのまん中にいて絵が描けぬ

青空のキャンバスモデル選ばない

ふる里をキャンバスに載せ持ち帰る

原画には迷路が描いてありました

騙し絵の中から春の鼓笛隊

だまし絵が好きで虚像を抱いている

風をくださいい叫び続けているムンク

絵の中のりんごごろんと孤独感

冬の絵は飽きた炬燵も片付ける

棚田の絵腰の痛さが描けない

本当の空を探している絵の具

終章の下絵はすでに描いてある

流水の絵を消しに来る花だより

怪獣と仲良くなつて寝る絵本

絵手紙をもらい返事は川柳で

モナリザの泣いてる顔もみてみたい

雲になれないから筆で追いかける

爽やかな絵となる沙羅ちゃんのジャンプ

十七の文字にはんやり絵が浮かぶ

草原を絵にする牛の面構え

茨城 徳永 妙子

愛知 中村 訓子

岡山 藏内 明子

和歌山 山西 佳子

和歌山 小谷 小雪

大阪 赤松ますみ

山口 中前 幸子

青森 碧井 溪翠

奈良 松本 柊子

大阪 須磨 活恵

鳥取 新家 完司

岡山 長森 正子

高知 清水由紀子

高知 小川てるみ

岡山 藤田 誠

奈良 板垣 孝志

兵庫 松本 一等

和歌山 宇野 幹子

青森 菅井 真美

香川 安田 翔光

大阪 大隅 克博

大阪 大久保のん子

神さまが時々ボクの絵を弄る

自画像は未完薄紅差したくて

点描でほかすまだらになる記憶

例えれば今の私はあのムンク

贋作でよければどうぞさしあげる

人間を描くと輪郭はけてくる

未来図と全くちがうとこにいる

秀 句

絵画展あなたと同じ絵で止まる

絵の中に居場所をひとつ空けておく

五十年添ったどの日も素敵な絵

人間を描くと悪魔になりました

とうりゃんせ踏み絵のことは黙ってる

まるい絵が描けそうわつと泣いたから

絵になったことは知らないからすり

絵にすれば雪まで温い冬景色

お嫁さん来るまで母は絵が描けぬ

親の描く絵を抜け出した三輪車

特 選

海の絵の前で魚になつてゐる

軸 吟

自画像は外出中と書いてある

鳥取 藤原 鬼桜

大阪 綿山美斗子

大阪 荻野 浩子

青森 石澤はる子

大阪 河内 月子

鳥取 牧野 芳光

大阪 宮野みつ江

埼玉 中村 伸子

岡山 田中ケイ子

兵庫 山田婦美子

和歌山 柏原 夕胡

青森 岩淵 黙人

大阪 森 茜

和歌山 牛尾 緑良

三重 上垣内利凡

高知 坂本紀美子

北海道 小沢 淳

鳥取 平尾 正人

和歌山 川上 大輪

雑

詠

森中 恵美子 選

締め切り日赤いポストが待っている
平成と昭和の中のヤジロベエ
昭和史を語るラジオが止まらない
冬銀河地上は戦ばかりなり
反骨の父の姿か冬木立
フクシマがだんだん風化されていく
みちのくの痛みに時効ないだろう
隕石の光がくれた未来絵図
仏唇の少し開いて春緩む
水槽の亀も感じる春の音
春雷に値上げの雨が降ってくる
ずっと雨ずっとショパンを聞いていた
これからを猫に聞かせる午後の雨
エビローグ飛び六方に雨しきり
水仙が匂うと姉の一周忌
美人だったやさしかったと七回忌

大分 野田 清博
大 阪 高田美代子
大 阪 山岡富美子
鳥 取 藤原 鬼桜
兵 庫 舟辺 隆雄
大 阪 近藤 正
鳥 取 夏目 一粹
宮 崎 間瀬田紋章
東 京 井手ゆう子
鳥 取 下田 幸子
大 阪 上野 楽生
岡 山 丹下 凱夫
岡 山 工藤千代子
大 阪 谷川 生枝
大 阪 鴨谷瑠美子
京 都 山田 葉子

会える日を期して開花をする椿
寒椿ボトリ人など疑わぬ
菜の花の海で溺れている平和
山茶花も椿も悩みなど無いか
大粒の話が好きなき子の花
この更地何があったかキリン草
頑張つて悔いは残さぬ茄子の花
小言など言うなと山茶花のまつ赤
争いはお止しなさいとさくら咲く
さくら咲く頃には笑顔取り戻す
頼りない男は嫌い薔薇のとげ
諦めぬ人にはきつと咲くサクラ
ひらがなでつぶやきながら桜ちる
空の父大地の母に生かされる
落日の赤からわいてくる野望
行く末のひとりを想うおぼろ月
自問自答風は答をくれるのか
合掌の里に小さな鯉のぼり
風向きを読めないシャボン玉 割れる
王様の裸を誰も助言せぬ
試された油断を悔いるダンゴ虫
今出来ることを今する人になる

埼玉 茂木かをる
岡山 藏田 明子
広島 野村 賢悟
広島 岩本 笑子
大 阪 岸本 慶子
大 阪 森松まつお
奈良 中山恵美子
奈良 古川 洋子
愛 媛 古手川 光
鳥 取 新家 完司
和歌山 山西 佳子
広島 笹重 耕三
鳥 取 牧野 芳光
奈良 池田貴佐夫
大 阪 荻野 浩子
奈良 渡辺 富子
広島 古田比呂子
富山 島 ひかる
青森 高瀬 霜石
兵 庫 菅野 泰行
岡山 長森 正子
埼玉 中村 伸子

順番が来るまで好きな事をやる

決心のもろさ豆腐に笑われる

ふる里に帰ろう鮭もわたくしも

あの歌に出合おうとコーヒーが旨い

心して味わう一期一会の茶

商魂にのってひとりのチョコレート

ブチトマトぐらいの夢は持っている

良し悪しを決めかねている蛸の足

金太郎飴ひとの我俣かも知れぬ

チクタクと私を食べてゆく時計

鈍行で世渡りと言う処世術

ローカルの旅に出たいという音符

心まで元氣と分かる笑い声

日記には今日も合格点をつけ

ここだけの話はいつも生臭い

不器用に生きて糊しろ広くとる

ある時は貸しある時は借りる肩

反省をするたび夢が小さくなる

夢で逢う空は無口でただ広い

停まったら倒れる僕も自転車も

生徒さんから教えてもらう事多し

親切をするのにとっても要る勇氣

鳥取 竹村紀の治

三重 橋倉久美子

大阪 油谷 克己

大阪 宮崎シマ子

香川 安田 翔光

岡山 山崎三千代

京都 高島 啓子

大阪 古今堂蕉子

青森 菊池 京

大阪 早泉 早人

兵庫 松本 一等

大阪 立蔵 信子

大阪 前原 正美

宮城 木田比呂朗

大阪 西出 楓葉

大阪 山本希久子

奈良 笹倉 良一

奈良 安土 理恵

青森 菅井 真美

和歌山 辻内 次根

大阪 河内 天笑

鳥取 有沢せつ子

哀しいな鏡きらいになつてきた

愛のない形で割れる無精卵

解く予感ことさらきつく結ぶ帯

失恋のページざわわがきこえます

あの人と同じ鈴では鳴りません

狸です狐ですいえ夫婦です

妻の手で二人羽織をされている

線になる点をいくつも持った母

父さんがやはり一番偉いんだ

幸せな時には見えぬ母の星

デパ地下で妻の背中を追いかける

温度差があつて人間おもしろい

初恋の人とデイサービスで遭う

運命を変えた男と日向ぼこ

小豆粥ゆつくり埋めてゆく余白

ライオンを夢見て老人は眠る

順調に老いております物忘れ

お喋りも長寿も女性には勝てぬ

笑い袋の綻びきつと母だろう

ひだまりのような男の側で咲く

風邪薬少し熱めの燗にする

生きている実感酒のおいしい日

鳥取 岸本 孝子

鳥根 奥田 勝子

兵庫 福田 好文

奈良 西澤 知子

静岡 米山明日歌

兵庫 宮崎美知代

茨城 徳永 妙子

佐賀 真島久美子

兵庫 黒田 能子

高知 小川てるみ

大阪 大西 晴雄

兵庫 萩原 典呼

大阪 鈴木いさお

和歌山 楠原 富子

大阪 中井 アキ

大阪 澤井 敏治

大阪 藤井満州夫

愛知 早川 遡行

佐賀 真島美智子

奈良 大内 朝子

岡山 小野真備雄

兵庫 西口いわゑ

みんな留守イブモンタンというワイン
 盜塁のうまい男に泣かされる
 人間のあいだはうまい酒にする
 てのひらの男まとめて吹きとばす
 土になる土と仲良くしておこう
 田の畔も畑の隅も父母が住む
 もう一度主役になれるお葬式
 一本の煙となつてから抱かれ
 エンディングノート遺産はないが希望書く
 答えは出た父は背中です許してる
 如月にボリープふたつ置いてきた
 何があるか分らないから爪を切る
 陽の匂い一人占めする退院日
 お見舞へ乾いた舌を置いてくる
 過去のこと話せば夜が深くなる
 心配をさせないように笑う医者
 そっけない味で男が煮える鍋
 寂しい日好きな本でも買って読む
 黄昏の街はどこでも懐かしい
 封筒に開ききらない夢を入れ
 ありがとう殴ってくれたお父さん
 無念さを紙鉄砲が音に出す

兵庫 北野 哲男
 鳥取 倉益 一瑤
 鳥取 政岡未延子
 徳島 徳長 怜子
 佐賀 真島 清弘
 愛媛 中居 善信
 鳥取 岸本 宏章
 兵庫 河内谷 恵
 大阪 高杉 千歩
 徳島 黒田るみ子
 兵庫 古橋 茂子
 大阪 谷口 義
 和歌山 岡本 昇
 愛媛 山之内さち枝
 奈良 山本 柳昌
 兵庫 西内 朋月
 鳥根 石橋 芳山
 大阪 若松 雅枝
 大阪 水野 黒兎
 兵庫 河原野折杭
 大阪 太田としお
 高知 坂本紀美子

哀しいほどあなたの嘘が匂うのです
 哲学で飢えた男とそばを食う
 日本語をきれいに話す友が好き
 飽食の若者の脚よく伸びる
 父の虹子の虹一本杉の虹
 熱くなる古い男の古い歌
 あみだくじ会うべき人に会いました

秀句

寝返りがうてる 幸せだと思ふ
 温かい丸で一日締めくくる
 眠剤を本気で探す古本屋
 宇宙にも狼藉者がいるらしい
 人間も入れる銀行の金庫
 ずっと貧しい訳でない芋のつる
 少しずつ固まってきた死ぬ覚悟
 遺言は書けた桜の樹も植えた
 どちらかの一人が残る舟を漕ぐ
 魂が渴いたときの美術館
 特選
 日が昇るやっばり有難うと言う
 軸吟
 エンディングノートの中で飯を食う

和歌山 木本 朱夏
 和歌山 牛尾 緑良
 鳥取 森脇 麗
 大阪 碓氷 祥昭
 北海道 大橋 政良
 広島 小島 蘭幸
 兵庫 山田 耕治
 鳥根 竹治かし
 大阪 井本 健治
 鳥取 加賀田志延
 宮城 伊藤ちえこ
 三重 吉崎 柳歩
 岡山 田中 道博
 大阪 日野 愿
 奈良 板垣 孝志
 兵庫 広瀬 房江
 大阪 穂山 常男
 大阪 岩佐ダン吉
 大阪 森中恵美子

雑

詠

小島蘭幸選

年金が減った分だけ生きてやる
組合がストを忘れてから不況
どなたにも入れたくなつて来る選挙
体罰を私もやった事がある
父母というセピアの写真胸にあり
本当の友は酒だと知る余生
バーゲンの心の貯金二百円
今日の鬱流そう米を二合研ぐ
往ったり来たり今替ります春風と
忘れることが普通になつてくる怖さ
時々味方になつてくれる山
人形を抱くわたくしを抱くように
お日柄のせいかダブルの虹を見る
盆梅の古木が醸す小宇宙
これが私これが現実靴を脱ぐ
躁と鬱あつて人間だと思ふ

高知 小澤 幸泉
高知 小原 圭二
大阪 荻野 像山
愛知 金子美千代
東京 高岡 弥生
宮城 木田比呂朗
広島 石原 淑子
大阪 綿山美斗子
岡山 八木 規子
大阪 大久保のん子
島根 多久和敬子
奈良 更谷 風見
鳥取 能見 慶一
大阪 近藤 正
島根 松本 文子
鳥取 前田 楓花

落日の赤からわいてくる野望
春雷の遠くあの日のさくら散る
あるがまま生きた手足をいとおしむ
鏡見る私の老いが加速する
九十四たつたひとりの誕生日
命には重しも羽根もついている
二人共元気で冬を越せそうだ
苦も哀もプラス思考で裏返す
未完成ですが上映いたします
日本語をきれいに話す友が好き
手を合わす母を朝日がハグをする
もう一度主役になれるお葬式
ゆつくりと紐をほどこしてから眠る
地球から聞こえませんか歯ざしりが
店の名は「モナリザ」ママは樹木希林
春の川妻居ぬ部屋を流れ行く
重なつたのは影誤解されている
天敵は私の中にあるワタシ
トンネルを抜け出て君はハンサムに
さくら草冬をきどっているのです
ずっと貧しい訳でない芋のつる
自画像にやっと本心描き入れる

大阪 荻野 浩子
兵庫 大谷 慧水
奈良 中山恵美子
大阪 穂口 正子
新潟 石山 幸枝
三重 青砥たかこ
大阪 河内 月子
和歌山 福井 菜摘
青森 菅井 真美
鳥取 森脇 麗
神奈川 柏原 高幸
鳥取 岸本 宏章
大阪 谷口 義
静岡 中田 尚
鳥取 新家 完司
大阪 嶋澤喜八郎
石川 藤村 容子
大阪 米澤 俣子
鳥取 細田 裕花
佐賀 真島美智子
岡山 田中 道博
愛媛 大内 節子

題名のない私小説まだ未完

老いたなと思ふ意地悪する鏡

生きがいとして手鏡を笑わせる

春の雨傘一本のしあわせ度

おちつけ日本策はまだある

卵酒とろりと煮えて風邪三日

自分史の終りへまぼろしを飾る

無添加のことばじんじん効いてくる

哀しいな鏡きらいになつてきた

日本人パンと相性ようになつた

おだてたら小回りの利く夫です

花咲いて私にファイト湧いてきた

口下手な人だ仲良くなれそうだ

湯タンポと酒一合で冬を越す

文豪に囲まれてるボクの城

一徹の華で流れに添えず冬

平成と昭和の中のヤジロベエ

過去のこと話せば夜が深くなる

一本の煙となつてから抱かれ

人間のあいだはうまい酒にする

落日に立つ位置変えぬ寒椿

スカイツリー明日の日本が見えますか

大阪 宮崎シマ子

大阪 出口セツ子

大阪 赤松ますみ

大阪 上嶋 幸雀

岡山 小林 妻子

奈良 野田てるを

大阪 太田扶美代

鳥取 森山 盛桜

鳥取 岸本 孝子

大阪 平松かすみ

和歌山 岡本 昇

大阪 若松 雅枝

大阪 升成 好

大阪 石橋 直子

大阪 川端 一步

岡山 藏内 明子

大阪 高田美代子

奈良 山本 柳昌

兵庫 河内谷 恵

鳥取 政岡未延子

大阪 荒川 鈍甲

兵庫 松下 純一

人許すことを覚えてからの風
私の応援団長私です

打上げ花火さびしがりやが残る闇

平凡な日々が嬉しい五色豆

お一人さまとなると男の腑甲斐なさ

如月にボリーブふたつ置いてきた

腹が立つても階段一ツずつ降りる

耐えて咲く北の桜は一本気

暖かい島に凍ったままの基地

花が好きおしゃれが好きで傘寿です

温度差があつて人間おもしろい

冬の雨心静かにする炬燵

三時ですからくり時計から天使

約束がスルリと抜けてゆく小指

手探りでいつも開いて来た扉

独り旅に向けて続けるスクワット

聖女でも魔女でもない葉を刻む

みんな寝てからふる里へ書く便り

土になる土と仲良くしておこう

路地裏はにんげん臭い風の中

一日を大事に生きる祖母の数珠

似過ぎてから許せない愛おしい

高知 清水由紀子

広島 古田比呂子

愛媛 宮尾みのり

兵庫 長浜 美籠

北海道 三浦 強一

兵庫 古橋 茂子

大阪 谷川ユミ子

高知 小川てるみ

広島 北村 善昭

大阪 米田 水昇

兵庫 萩原 典呼

大阪 森村 美花

岡山 古川美智子

奈良 古川 洋子

奈良 毛利 元子

和歌山 楠見 章子

兵庫 山本 義子

兵庫 遠山 可住

佐賀 真島 清弘

大阪 山野 寿之

岐阜 武藤 敏子

茨城 佐瀬 貴子

ジャンプして古い鱗を落とす春
いのちある朝へ合唱して起きる
シルバーカー一つ買うのに迷い抜く
行く末のひとりを想うおぼろ月
手を握るだけの真心置いてくる
折り紙の角きつちりとまだ折れる
ブランドを纏うと街へ出たくなる
奥の手はあなたの為にだけ使う
ローカルの旅に出たいという音符
家事雑事自己満足で良しとする
添え書きに引かれ個展に行くとする
小豆粥ゆつくり埋めてゆく余白
風向きを読めないシャボン玉 割れる
ひつじ雲つれて鳥取砂丘まで
ドライブの缶コーヒーといい時間
美学などなんにももってない一路
生涯を本音で通す唐辛子
真つ直ぐに歩けることを良しとする
父の虹子の虹 一本杉の虹
明け渡す城にも花を活けて置く
煮こごりがぶるん此処にもある昭和
じよっぱりの根っこは雪の中にある

兵庫 田村ひろ子
鳥取 田口 清帆
大阪 浅野 房子
奈良 渡辺 富子
徳島 黒田るみ子
大阪 笠嶋 恵美
兵庫 福田 好文
兵庫 山口 光久
大阪 立蔵 信子
大阪 俣野登志子
東京 佐々木正康
大阪 中井 アキ
青森 高瀬 霜石
鳥取 斉尾くにこ
兵庫 吉井菜々子
岡山 丹下 凱夫
大阪 海老池 洋
熊本 岩切 康子
北海道 大橋 政良
山口 中前 幸子
大阪 小川賀世子
青森 稲見 則彦

ひだまりのような男の側で咲く
冬二の句尋ねて雪の津山城
向き合って花一輪が咲きました
頑張れば肩甲骨が羽になる
大根は千切り愚痴はみじん切り
家庭など二の次だった人を見る
みんな留守イブモントンというワイン

秀句

おめおめと空気のように生きている
遺言は書けた桜の樹も植えた
これからを猫に聞かせる午後の雨
雪しんしん明日は美しく変わる
品格があつた明治時代の髭
恋は孤独高鳴るものをひた隠す
哀しいほどあなたの嘘が匂うのです
運命を変えた男と日向はこ
魂が渴いたときの美術館
昭和史を語るラジオが止まらない
エンディングノートの中で飯を食う
軸 吟
昼めしも食えず書斎にいたひとり

奈良 大内 朝子
岡山 小野真備雄
熊本 太田黒文采
島根 石橋 芳山
青森 石澤はる子
大阪 竹村 穩夫
兵庫 北野 哲男
大阪 鈴木いさお
奈良 板垣 孝志
岡山 工藤千代子
和歌山 杉山 精子
大阪 村上 玄也
愛知 中村 訓子
和歌山 木本 朱夏
和歌山 楠原 富子
大阪 穂山 常男
大阪 山岡富美子
大阪 森中恵美子
広島 小島 蘭幸

第二回 春の川柳塔まつり

誌上大会参加者

総数七三八名
順不同・敬称略

北海道	大橋政良	小沢 淳	佐藤登美子	千葉	安部離楽数	香取さくら	井本健治	井丸昌紀	入江秀雄	宇都満知子
	齊藤宏子	鈴木修子	三浦強一	日下部敦世			岩崎公誠	岩田明子	上嶋幸雀	江島谷勝弘
青森	碧井溪翠	稲見則彦	石澤はる子	東京	上原 稔	高岡弥生	井出ゆう子	上野楽生	植村喜代	上山堅坊
	岩淵黙人	菊池 京	菅井真美		佐々木正康	山田こいし		碓氷祥昭	内海幸生	榎本舞夢
	高瀬霜石	辻口達夫	福士慕情					海老池洋	江見見清	大浦福子
	北山まみどり		松山芳生	神奈川	柏原高幸	菊地政勝	坂本嘉三	大川安弥	大隅克博	大島友子
秋田	近藤桃春	月波与生	藤 咲子	杉山太郎	本郷 宏			太田 昭	大西晴雄	岡田 元
宮城	山田純一	和田 稔	伊藤ちえこ	長野	丸山健三	平井音子	佐々木ヤス	岡野一幸	岡本静子	荻野像山
	糸乃こまり	木田比呂朗	齋藤てい子	新潟	石山幸枝	島ひかる		荻野浩子	奥 時雄	奥村五月
	大久保もとじ			富山	有澤嘉晃			長西昭好	小谷滋彦	落葉ふみ
福島	佐藤彰宏	佐藤千四	鈴木由美子	石川	岡本 聡	藤村容子	石倉多美子	柿花和夫	笠嶋恵美	加島由一
	山田寛二			岐阜	武藤敏子			片岡義順	河内月子	河内天笑
茨城	岡さくら	岡本 恵	櫻村日華	静岡	岡田史郎	藺田猿香	佐野由利子	川端一步	岸本慶子	北村賢子
	佐瀬貴子	徳永妙子	松本 叶		中田 尚	三谷圭角	米山明日歌	木下敏子	栗田久子	黒岩靖博
栃木	荻原鹿声		毛利由美	愛知	高浜広川	中村調子	金子美千代	小谷集一	小林三葉	小林わこ
群馬	黒崎和夫	勢藤 隆			早川遼行	林 柳泉	藤田千秋	関本かつ子		
埼玉	飯塚栄子	尾内理雄	加賀谷日和		松長 進	南いづみ	長谷川絃子			
	岡部暖窓	奥田 実	角屋教子		三 重	吉崎柳歩	青砥たかこ			
	金子育司	須田 昭	中島弘枝							
	星野育子	村田倫也	若月 葉	京都	井上森生	都倉求芽	清水英旺	佐藤忠昭	佐藤英美	澤井敏治
					上垣内利凡	北田のりこ	橋倉久美子	沢田和子	志田千代	島田誠一
								初代正彦	杉本義昭	鈴木楽鬼
										佐々木満作

須磨活惠	助川和美	関よしみ	嶋澤喜八郎	吉田知之	芳 鉄心	吉村一風	宮野みつ江	古川奮水	古橋茂子	堀 正和	松下比呂志
田浦 實	高木道子	高杉 力	島田千鶴子	米澤俣子	米田水昇	若松雅枝	宮本かりん	前中 勝	前川 淳	松井文香	宮崎美知代
高杉千歩	田口和代	武智三成	柴本ばっは	森中恵美子	森松まつお	両澤行兵衛		松下純一	松本一等	丸山孔一	山口ヨシエ
竹村穂夫	伊達郁夫	立蔵信子	神野千恵子	山岡富美子	山下あや乃	山本希久子		村岡義博	八木一江	山口不動	山田婦美子
田邊浩三	谷川生枝	谷久美子	鈴木いさお	吉内タカ子	吉村久仁雄	渡辺たかき		山口光久	山田耕治	山崎武彦	山本つね子
谷口東風	谷口 義	丹後屋肇	鈴木ひさ子	綿山美斗子	宇都宮ちづる	大久保のん子		矢野野薫	山本義子	米原雪子	吉井菜々子
辻村ヒロ	津守柳伸	鶴田遠野	高田美代子	美馬りゅうこ				蘆田利嘉	渡辺信也	吉田向日葵	
寺井弘子	寺川弘一	遠山唯教	竹田美美子	〔兵 庫〕	青木公輔	朝倉尚子	井上じろう	東馬場美和子			
栃尾奏子	富田保子	内藤憲彦	谷川ユミ子	石田明子	石田久子	石原歳子	上垣キヨミ	〔奈 良〕	安土理恵	阿部紀子	居谷真理子
内藤光枝	中井アキ	長井善純	津守なぎさ	伊勢田毅	井上忠貞	井上登美	上田ひとみ	井上洋三	板垣孝志	宇賀史郎	池田貴佐夫
中岡香代	中島 華	中野健吾	出口セツ子	井本 操	宇津慶子	梅澤盛夫	緒方美津子	大内朝子	大西將文	加門萌子	大久保真澄
西澤司郎	西出楓楽	野下之男	羽田野洋介	大谷慧水	尾崎一子	加川靖鬼	奥田みつ子	駒居春子	佐藤辰雄	笹倉良一	小金澤貫一
早泉早人	針生和代	日野 愿	原田すみ子	片山 忠	金川宣子	株元玲子	河原野折杭	更谷風見	柴田園江	中村勝弘	飛永ふりこ
藤井則彦	藤井正雄	藤田武人	平井美智子	亀岡哲子	河合敏夫	河内谷恵	神崎みき子	西澤知子	古川洋子	坊農柳弘	中原比呂志
藤塚克三	伏見雅明	藤原 昭	平嶋美智子	北澤稠民	北野哲男	木村 勳	久保田千代	細田貴子	牧浦完次	松本柁子	中山恵美子
藤原大子	古田千華	穂口正子	平松かすみ	黒田能子	桑原淑子	黄 茂山	黒崎美紗子	三浦芳子	毛利元子	柳瀬孝子	西久保隆三
細川襄三	前川善之	前たもつ	藤井満洲夫	上月格男	輿水 弘	小西礼甫	小谷みちよ	山田順啓	山本柳昌	米田恭昌	野田てるを
前田紀雄	前原正美	増田隆昭	藤島たかこ	小山紀乃	斉藤幸男	酒井真由	竹山千賀子	渡辺富子	山下怜依子	山田紀代美	
升成 好	松岡 篤	松田 聰	細見喜四郎	佐々木勇	式みのる	軸丸勝巳	田村ひろ子	辻内げんえい			
水谷正子	水野黒兎	村上玄也	本田みちる	釋 翔空	白川淑子	菅野泰行	中上千代子	〔和歌山〕	荒木輝子	石田隆彦	小川あき子
村上直樹	初山隆盛	森 茜	増井ヨシ枝	多田雅尚	竹内 肇	田中章子	中嶋智枝野	磯部義雄	宇野幹子	上田紀子	三枝真智子
森村美花	矢倉五月	山崎君子	俣野登志子	遠山可住	中塚礎石	長浜美籠	西口いわゑ	牛尾緑良	小川イセ	大峠可動	坂部紀久子
大和峯二	山根妙子	山野寿之	松尾美智代	成定竹乃	西内朋月	萩原典呼	西脇ちかゑ	大越利治	岡本 昇	柏原夕胡	土屋起世子
山本蛙城	山本エミ	山本半銭	松本あや子	橋本凉子	春城年代	広瀬房江	濱邊稲佐嶽	小谷小雪	楠原富子	楠見章子	藤原ほのか
雪本珠子	横山捷也	吉岡 修	宮崎シマ子	福田好文	藤井宏造	舟辺隆雄	牧測富喜子	喜田准一	木本朱夏	北原昭枝	古久保和子

北山緒子 杉山精子 武本 碧 さかたきく

辻内次根 堂上 茂 堂上友紀 堂上泰女

平田元三 福井葉摘 福重美子 福本英子

福呂秀子 堀富美子 松尾和香 三宅保州

山西佳子 飯野菖子 池澤大鯨 有沢せつ子

【鳥 取】 池田美穂 岩崎和子 大前安子 石谷美恵子

奥谷彩子 加藤茶人 加藤正二 大塚美代子

岸本孝子 岸本宏章 倉益一瑤 岡崎美知江

後藤宏之 近藤秋星 下田幸子 加賀田志延

新家完司 田口清帆 田中重忠 吉川三千代

高塚美草 高浜 勇 竹口清信 後藤美恵子

津村律子 土井茂子 土橋 螢 齊尾くにこ

中井虎尾 夏目一粹 中原章子 坂本とも湖

中村金祥 中村 毅 成田雨奇 下田茂登子

西浦子鹿 西谷悦子 能見慶一 田中紀美恵

橋谷静江 林 瑞枝 平尾正人 竹村紀の治

福西茶子 藤原鬼桜 細田裕花 谷口回春子

堀かずこ 前田楓花 牧野芳光 中西智恵子

松川行男 見山温子 森山盛桜 春木圭一郎

森脇 麗 八木千代 山口栄子 深澤千恵子

山下凱柳 山下節子 山中康子 政岡未延子

湯浅俊久 湯原ちえ 吉田弘子 山松みち子

山本ふみ子 吉野いさお

【島 根】 相見柳歩 伊藤寿美 安黒登貴枝

石橋芳山 小川注湖 奥田勝子 荒木ひとみ

川本 畔 黒目英男 銭山昌枝 井塚たけし

富田蘭水 錦織禮子 藤井寿代 小白金房子

堀 弘子 松尾芳恵 松本文子 澁谷由紀子

三島淞丘 山根邦代 米原 妙 菅田かつ子

竹治ちかし 多久和敬子 仲田美千代

松本知恵子 松本はるみ

【岡 山】 尾崎 貴 片岡富子 池田たか子

藏内明子 小林妻子 澁谷公啓 上田真智子

高木勇三 田中道博 谷山典子 小野真備雄

丹下凱夫 竹本 妙 富山 孝 工藤千代子

永見心咲 長森正子 練尾嘉代 田中ケイ子

原 脩二 福原悦子 福力明良 戸田まさこ

藤井智史 藤田 誠 藤成操江 東楨ますみ

丸橋野蒜 紫しめの 八木規子 古川美智子

吉原信子 前田恵美子 宮崎かおる

山崎三千代

【広 島】 淡路猿眠 石原淑子 重家三の丸

岩本笑子 大森昭恵 小川道子 瀬戸れい子

鴨田昭紀 菅 弘子 北村善昭 古田比呂子

小島蘭幸 笹重耕三 若年幸子 前原八千代

田中啓子 土井輝恵 富田汎美 野村賢悟

馬場利子 飛田陽子 堀さちこ 村上和子

元吉慶子 吉永団風 六田半徳 守本トヨコ

【山 口】 坂本加代 中前幸子 平田実男

【徳 島】 徳長怜子 新居秋子 黒田るみ子

森ヨシ子

【香 川】 清川玲子 田岡 弘 田中 弘

安田翔光

【愛 媛】 相原利徳 大内節子 神野きつこ

黒田茂代 古手川光 高橋宏臣 田中のりお

中居善信 花岡順子 松本宗和 宮尾みのり

除田六朗 山之内さち枝 渡邊伊津志

【高 知】 小澤幸泉 小原圭二 小川てるみ

岡林京子 岡村千鳥 桑名孝雄 小笠原倫子

澤村哲史 橋田綾子 藤田和恵 黒岩啓二郎

増田純子 坂本紀美子 清水由紀子

豊澤ただし 吉村満智子

【福 岡】 石田 耐

【佐 賀】 井手良祐 岩崎 實 久場美穂子

江下正義 門井 孝 北村松風 真島久美子

木村 宏 坂本峰朗 中島幸子 真島美智子

仁部四郎 西村正紘 真島清弘 松村照代

峯 仙子 山口高明 横尾信雄

矢ヶ部登志子

【長 崎】 坂本弘子

【熊 本】 岩切康子 杉野羅天 太田黒文采

【大 分】 野田清博

【宮 崎】 稲毛 寛 間瀬田紋章

【鹿児島】 前田洋子

【沖 縄】 多良間典男

栞忌を迎えて

内海幸生

薫風に乗って爽やかな緑の風がやってくる頃、あの温顔の優しいお顔がそしてお声が聞こえます。

頑張つてまっか？ 怠けてたらあきまへんで。「ハイ」の返事が喉に引つ掛かりそうです。先年川柳塔社の特集で多くの方の推されていた句に

人恋し人煩わし波の音

栞

不肖私もこの句が大好きで、栞先生が八尾・太子堂の將軍寺に句碑を建立されるとき、他の方々と共にこの句をお願いしたのですが、先生は「うーうん一寸なあ」と意外な御返事でした。

何故でしょうか、皆さんと一緒にお尋ねしたところ、「人恋し」はよろしいで「人煩わし」がなあ…。

「川柳は人間陶冶の詩である」

常々お教え頂いていたのに眼の覚める思

いでした。

結局句碑の句は

一歩出ずれば 我れ旅人となる心 栞
とても格調の高い句になりました。

栞先生の思い出で強く残っているものに、高野山の川柳塔碑が有ります。

平成元年の夏頃だったと記憶して居ります。薫風先生と、西田柳宏子さん、小出智子さんらと栞先生のお供をして、下調べに行きました。塔碑になる大きな石は栞先生が「これが立派でちょうどよろしおまんなあ」と仰つて、一同異議なく即決致しました。

それが「川柳塔」と記された現在の塔碑です。ご揮毫は栞先生です。



側碑の石も一緒に決まり栞先生のご揮毫で

俱会一処

川柳塔同人並に川柳愛好家は死

して尚柳号で呼びあい永遠に川柳を語りあう絆を以て此処に愉しく眠る

平成元年秋 川柳塔主幹 西尾 栞書



同年の十一月落成法要が多数の方々のご参列のもと盛大に営まれました。

栞先生はとても優しい温顔で、何時もニコニコされていていましたが、間違つたことには決して妥協されず、厳しさも併せお持ちでした。

「品の無い句はあきまへんで」

「おセンチな句は作りなはんや」

「句作りの職人になったらあきまへんで」

色々ご指導を頂きながら全く不肖の弟子で申し訳御座いません。

あの世で先生にお叱りを受けぬよう少しずつ蝸牛の歩を進めて参ります。

栞先生のご冥福をお祈り致しつつ。



表記を考える (2)

前号では漢字の間違いなどについて述べましたが、今回は「間違いいではないが、できるだけ避けたい」あるいは、「こちらの方を勧めたい」という表記について考えてみます。

混ぜ書きを避ける

混ぜ書きというのは、一つの言葉が漢字と平仮名を混ぜて表記することです。左の例では、上が本来の表記で括弧内が混ぜ書きです。

黙禱(黙とう)

蔓延(まん延)

語彙(語い)

捏造(ねつ造)

驚愕(驚がく)

熾烈(し烈)

比べてみますと、混ぜ書きでは少し意味が分かりにくいようです。一方、本来の表記の漢字は難しい文字ですので、書きにくいでしょうが意味は明確に分かります。

このような混ぜ書きは、「常用漢字表にない漢字は平仮名で表記する」という理由、または「難しい漢字は平仮名で間に合わせる」ということからでしょう。しかし、常用漢字表の運用につきましては、その前書きに(前文略)：個人々の表記にまで及ぼそうとするものではない」と明記されていますので、縛られることはありません。作品の表記は「読みやすく分かりやすい」というのが基本ですので、混ぜ書きはできるだけ避けるべきです。書くときは辞書を開けばいいのです。

代用字を避ける

代用字というのは、常用漢字表にない漢字を、同音の別の漢字に置き換えたものです。次の例では、上が本来の表記で

括弧内が代用字を使用したものです。

交叉(交差)

萎縮(委縮)

坐禪(座禪)

古稀(古希)

日蝕(日食)

庖丁(包丁)

車輛(車両)

棲息(生息)

芳醇(芳純)

比べますと、「又」は交わるの意味がありますので、「交差」より「交叉」のほうが理屈に合っています。「萎」は萎むという意味ですから、それを置き換えた「委」は少し変です。このような代用字は、新聞などで広く使用されていますので、「違和感などない」という人も多いでしょう。しかし、文芸作品と新聞記事とは大いに異なります。先ほど述べましたように常用漢字表には縛られることはありませんので、「本来の意味を持っている漢字」を使用したいものです。

送り仮名の「許容」は避ける

送り仮名については、内閣告示の「送り仮名の付け方」が基本になります。それには、「活用のある語は活用語尾を送る」等と記されていますが、具体例で見える方が分かりやすいので頻度の多いものを挙げます。それぞれ上が本則で括弧内は「許容」です。本則に慣れた目で見ると許容は違和感がありますので、できるだけ本則で記すようにしてください。

〔送り仮名が多いのが本則の例〕

暮らす(暮す)

浮かぶ(浮ぶ)

落とす(落す)

変わる(変る)

積もる(積る)

当たる(当る)

終わる(終る)

向かう(向う)

起こる(起る)

〔送り仮名が少ないのが本則の例〕

表す(表わす)

行う(行なう)

断る(断わる)

賜る(賜わる)

著す(著わす)

現す(現わす)



色景おもむき津軽の石霜瀬高

奇数月の連載になります。

東光見聞録

(15)

— 鷹山の巻 —

前回、山形県米沢市にある「東光の酒蔵」の話をし、ついでに上杉謙信にも、ちと触れた。

米沢（上杉）には、その初代・謙信と、かつてアメリカのケネディ大統領がインタビューで「最も尊敬する日本人は上杉鷹山」と答えて突然有名になった——その時一瞬会場がざわついたほど記者連中にも知名度が低かった——鷹山と、2人のヒーローがいて羨ましいとも書いた。

その頃の、津軽の有名な笑い話。

テレビの臨時ニュースを見ていた息子が叫んだ。

「ケネディ死んだってよお」

母親（ネイティブな津軽弁を駆使する結構お年を召したお婆ちゃん）が聞いた。

「ケネデ死んだ？ どこの国の人だ？」

「アメリカだあ」

「エッ？ アメでもケネデ死ぬびよんなあ」

一体何のことだか、チンプンカンプンでしよ。

ご存知のように、数ある方言の中でも、チョー難解と言われているのが、薩摩弁と津軽弁。まあ、東の横綱とでも言いましょうか。その難解な津軽弁の中でも「ケ」は、ケタ外れに使い方が多い単語。例えば、

①「それケ」——それ頂戴——のこと。

②「それケ」——それを食べなさい（命令形）——もある。

③「ケ」——お粥のこと。「ケ、ケ」となれば——お粥を頂戴、もしくは食べなさいになるから大変。

その「ケ」に「ネ」の否定語が付くと、ますますややつこしくなり、やつかい。

④「ケネ」——①の否定形だから——あげない——になる。

⑤「ケネ？」——語尾を上げると、①の懇願形——くれませんか？ となるからやつかいでしょ。

⑥「ケネ」——②の否定形だから——食べられない——だ。

⑦「ケネ」——簡単な意「棚吊ってケ（頂戴）」——おー、ケネ——

——そんなこと朝飯前だよ、になる。

⑧「ケネ」——病弱。丈夫でないこと。「ケネわらしたなあ」——弱々しい子供だなあ、となる。

⑨「ケネ」——毛が無い——これは番外。

ここまでペンキヨウしたので、前述のお婆さんが言っていたコト、推測つきますかな。

お婆ちゃんは、人名「ケネディ」を「ケネデ」と聞き違えた。つまり「食べられないで」と思ったわけですね。

それで「どこの国？」と問うた。息子は「アメリカ」と答えたので、お婆ちゃんは驚いてしまふ。

「アメ（アメリカのような先進国）でも、ケネデ（食べられないで）死ぬびよんなあ（餓死する人もいるのだなあ）」

6月の全国大会。土産物屋の店先で「これケ」と言っても無料にならないけど、おまけはしてくれるかもよ。

本社 四月句会

四月五日（金） 午後一時
アウイーナ大 阪

関西の桜もほぼ満開になってきた五日、四月句会は一七名（投句九名）の参加で開催。初主席は、松本柁子さん（生駒市）柴田隆氏（奈良市）中村恵さん（富田林市）井上忠貞氏（神戸市）宗尻朱実さん（堺市）細野半六氏（生駒市）の六名。句会に先立ち、先頃亡くなられた、井上勝規氏に黙祷を捧げた。

今月のお話は、加島由一氏「古稀からの生き方」と題し、沖繩の春はハブが発生し、米兵がよく噛まれる事を現地では「スプリング・ハブ・カム」と、いきなりの小話に会場は爆笑。本題の古稀は人生七十古来稀なりと、由来を説明、古稀の心構えとして「戒老経」を引用され「何事も思うがままにしようと思うな」との結論で、印象に残ったのは、話の合間に二曲も歌を披露されたことであつた。（まつお）

月間賞は、新家完司氏（鳥取県）
（司会）蕉子・善純（協取）扶美代・勝弘
（受付）敏治・ふりこ（清記）勝弘

席題「純」 大内 朝子選

四月馬鹿の餌食にされる純な人
純粋の極致熱闘甲子園
純情な絆が紡ぐ榮譽賞
純な娘に皺の数までかぞえられ
胴長で短足僕は日本人
純粋な瞳眩しい一年生
PPP純国産の正念場
純情なお方だサブリ信じてる
始まりは不純な恋で五十年
純米と浅漬があればご満悦
はつとする純なこと言う君が好き
キスしたら子供出来ると思つてた
純白のころに染みをつけた風
純情についてしまった皮下脂肪
無礼講信じてはしゃぎ叱られる
下心あつて多額の寄付をする
純な娘の心剥ぎ取るネット網
みぞおちのあたりに純情が少し
ひたすらにマフラー編んだ純だった
海越えてやつてきた嫁純和風
飲んだくれですが気持は純である
単純な男はめられ木に登る
わたしにも十九の春があつたっけ
不純とも思う分別とも思う

正直で素直な心子に学ぶ
ところと煮詰めて愛は純になる
駆け引きが苦手真白い百合の花
純情な人だ赤面してはつた
ポケットに一途なころ褪せぬまま
単純な話に石を投げてくる
単純に生きて誰にも借りがない
純朴な方ねと軽くあしらわれ
逢いに行く靴は一直線になる
僕の顔見て純情が逃げてゆく
純朴な人が決め手のくすり指
純粋の塊みたい赤ん坊
純粋な若者リストラの餌食

佳

純潔のままで戦火に散つた姉
純粋な人純粋な嘘をつく
純情と可憐が八重桜になった
純な目が真つすぐボクを刺してくる
無垢な手が明日を掴む無限大

人

もう老母は天使のようになりました
地
純朴な風が燃える町起し
天
純粋になつてゆつくり寝るとする
軸
愛らしくだんだん純になるわたし

久美子
森子
美智代
瑠美子
ヨシエ
まつお
好
かずお
良一
かずお
あかね
（矢）五月
紀雄
克己
良一
森子
美花
寿之
能子
唯教
月子

兼題「凹む」 山田 耕治選

一度位凹ませてやりたいのです
年寄りにへこむ話はせんとい
いつまでも君の笑窪を見ていた
凹んでも泣く明日を生きてやる
母さんが凹むと家族みな凹む
写真撮るときはお腹を凹ませ
ばこぼこでも妻と愛車は替え
あたたかい嘘で凹みが癒され
失敗に凹んでいては明日はな
春の風凹んだ貌は振り向かず
試験受け止める凹みを持つて
一浪で落ち込むなれ意地を張
人生の凹みに奥歯軋む音
春ですよへこんだ夫連れ出そ
凹まない女すぐに凹む男
新雪に残した凹みきつと彼
歯がとれてポコッと凹む片え
へこんではおれぬ通帳底み
次もある今は凹んだフリも
原稿紙五枚に徹夜目が凹み
凹みがちな僕と日曜日が昏
米びつに米のあるうちゃ凹
凸凹越えてやつと夫婦も五
車庫入れが苦手らしいなあ
凹み

房 子 淑 子 柎 子 ア キ 楓 楽 朱 夏 直 樹 唯 教 満 作 森 子 奏 子 光 久 隆 彦 義 子 月 子 美 智 子 茂 隆 彦 見 清 克 己 瑠 美 子 由 一 一 風 ま つ お

たかが一度振られて凹むとは柔
凹まされ何時もゴメンと妻の勝
卵産みそうで探している凹み
フラれてもへこまないでとモテる奴
原発で凹んだ分を値上げする
胴まわりあと二センチが凹まない
座布団の凹みが語る長つ尻
笑くばさえ埋まってしまう厚化粧
連敗しても凹まぬトラになれ
五十年凹んだ鍋をまだ磨く
老けたわねいきなり言われたら凹
押ししたなら凹んだままの肌の張り
じいちゃんを凹ます孫のクイズ好き
佳
自信作なのにめちゃくちゃ叩かれる
組板の凹み女の歴史だな
凹まずに入学します予備校に
鍋底の凹み五人の子を育て
凸凹の字でも心で書く便り
人
凹んでる時はやつぱり飲み仲間
地
まな板のくぼみ暮らしの詩刻む
天
凹むなよ口では言わず肩たたく
軸
おなか凹ませて楽観的試着
修 靖 博 保 州 半 六 正 和 好 かずお 則 彦 宣 子 賢 子 弘 風 哲 男 紀 乃 扶 美 代 実 寿 之 わ こ 敏 治 扶 美 代 一 歩

兼題「つろとろ」 森村 美花選

被災地へつろとろして支援策
つろとろと白川夜船議員席
つろとろの夫婦にもある車間距離
つろとろに溶かせば面白い男
残り火に油とつろとろ差す地酒
うたた寝の耳をくすぐる国訛り
つろとろと母は柚子味噌練り上げる
つろとろとまどうちョク飛んでくる
つろとろと煮込んで味のあるお方
男でも好きなトロトロ美人の湯
いい酒だ麻酔のように効いてくる
アナログのテンボが肌に合う故郷
趣味抱いてつろとろ生きている余生
つろとろの復興よそに花は咲く
祖母のまじないやがとつろと効いてくる
定年をとつろとろにする孫三つ
つろとろの顔で初孫あやして
つろとろに煮込んだ愚痴を聞かされる
ママチャリの籠で子供が溶けている
つろとろの粥で満ちた病み上がり
つろとろとあたためて片思い
煮豆とつろとろ幸せを連れてくる
局部麻酔医者のボヤキも聞いている
つろとろに私を溶かすラブメール
尽くし過ぎて男の骨はつろとろに
森村 美花選 遠 野 キヨミ 武 彦 見 清 由 一 柎 子 シマ子 光 久 准 一 忠 昭 良 一 行 兵 衛 堅 坊 富 子 す み え 哲 男 舞 夢 敏 治 耕 治 久 美 子 美 智 代 ア キ 正 和 一 風 か ず お あ か ね

兼題「奉仕」

笹倉 良一選

ところところ妻に溶かされていく余生 万紗子
 ところところあなたの味になる気配 万紗子
 ところところなるまで煮込む虚栄心 アキ
 手が触れてところところに酔う花の下 朝子
 ところところと格差が消えるまで煮込む 富美子
 たち切れぬ火種を抱えている日記 好
 ところところに凝りを溶かしてくれる友 よしみ
 堅物をトロトロにした酒二合 忠昭
 初恋がところところ灯りほっこりと 美智子
 ところこいしよ今日もところところが暮れる たもつ
 仕舞湯にとところを漕ぐ至福 唯教
 ところり春眠さあ暁へ矢を放つ 森子

佳

じっくりと煮込んだ大根母の味 (久) 千代
 正論をとろり煮つめてから粘る 希久子
 ところとにされちゃいました褒め殺し 航太郎
 ところととじっくり煮込む介護食 大子
 溶けるまで寝させておやり受験の子 扶美代

人

ところととしてゐる内にもう老後 千恵子

地

ところとと我慢煮込んで五十年 楓 楽

天

生きる意味問うところとの介護食 楓 楽

軸

ところとと優雅にやってくる花粉

いま一度ご奉仕などと天下一 花名刺ヨイショが冴える奉仕料
 町内の奉仕に買つて来た車手 気持ちだけ献血してる古希の腕
 ありがとう言われ奉仕の心泣く ひらひらと我慢の限度まで奉仕
 ようこそと花一輪の無人駅 じいちゃんに寺に奉仕をした余生
 究極の奉仕と思ふ母の愛 毎日が奉仕のつもり生きている
 一隅の自分を捨てたボランティア 影だけがわたしに奉仕してくれる
 介護ロボット待つて待ってます 私 役人は奉仕者だつて知つてたか
 びかびかのままで終わつた作業服 列島へフルスイングの花吹雪
 真心と笑顔奉仕の二刀流 財政に奉仕してるという紫煙
 頂いた倍返したい献血車 婦唱夫随奉仕の日々を生きている
 ボランティア助けられたり助けたら この町に生きて学んだのは奉仕
 ちつぽけな奉仕が被災地に温い 私にもチャンスなにわの募金
 奉仕するまごころ命若返る

時 雄 武 彦 瑠 美 子 誠 一 森 子 隆 彦 宏 子 美 智 代 舞 夢 恭 昌 す み え 義 子 航 太 郎 雅 明 富 美 子 満 作 五 月 耕 治 い さ お 寿 之 弥 生 い さ お よ し み 哲 子

佳

任されて足跡深くなる奉仕 任されて足跡深くなる奉仕
 ここからボランティア棒線て区切る 一年の恩十日で奉仕する桜
 スクワット介護保険を掛け捨てに 折りからの噴水虹の橋かける
 西へ東へ賢治の如しボランティア 奉仕する心自分が救われる
 献体で最後の奉仕しましようか 寄り添って温みをわかつボランティア
 盲導犬に育つた飼主のなみだ ビッグイシユウ一冊を買うのも奉仕
 被災地にマस्क一つで立ち向かう 勤勞奉仕わが青春を塗り潰す
 ボランティア見返りなんぞ望まない バッグバック被災地へまた足が向く
 人生論深く静かに開きする 御奉仕価格です 私のプライド

人

奉仕する心やさしい芽生えです 奉仕する心やさしい芽生えです

地

面倒見のいい方でした星になる 面倒見のいい方でした星になる

天

ともに泣きともに笑った奉仕の輪 ともに泣きともに笑った奉仕の輪

軸

こんなにも人が優しい義捐金

完 次 扶 美 代 宏 子 富 美 子 す み え 英 旺 萌 子 耕 治 ふ り こ 千 枝 子 保 州 た も つ 克 己 柁 子 ヨ シ エ 蕉 子 い く ひ ろ ば っ ぱ 敏 治

兼題「賢い」

奥田みつ子選

知恵しほる人科の上をいくカラス
賢い子より元気を願うランドセル
平凡な大人になった賢い子
知らん振りして過ぐすのも処世術
知識欲老いの身体を喜ばす
四季の花咲かす自然の賢さよ
賢いが正義の味方とは違う
愛される才女ステキな笑い皺
賢いと褒めつつ行儀教えてる
でしゃばらずみんなと和む老いの知恵
黙っている賢く見える顔である
方便で賢く泳ぐ人の波
賢いと褒めて育てたはずなのに
賢人も歳と病に勝てまへん
賢いと言われ続けて芽が出ない
賢いと妻を煽って薬をする
流されず賢く生きる戦中派
賢いが少しドジですそこが好き
目に見える賢さだから嫌われる
賢い人にもやってくる物忘れ
賢弟がときどきおかしき勇み足
自らの功は語らぬ聞き上手
盲導犬主の気持読んでいる
いつも黙っている賢い人だろう
ごまかされそうで賢い人はイヤ

雅明 遠野 准一 正和 蕉子 楓楽 枉子 大子 一風 かずお 寿之 久美子 靖博 紀子 すみえ 黒兎 万紗子 あかね (志) 千代 好 一歩 加お里 蘭幸 かずお

ロボットがだんだん賢くなってくる
定年後勝てぬ妻には逆らわず
世間からもまれ賢うなりました
天才と言われ努力家とも言われ
賢くは無いが笑って暮らして
賢さをひらり躲す思い遣り
僕よりも少し賢い妻と居る
介助犬ぶれず怯まずおもねない
賢くはないがやさしい子に育つ
人込みで知恵を拾って生き上手
「かしこい」と言えは賢くなる子供
我が余生賢い妻に導かれ
佳

千恵子 堅坊 月子 保州 久美子 森子 いさお 富美子 能子 ばっは 完司 弘風 哲子 和夫 奏子 朋月 楓楽 美智子 希久子 隆

白寿まで紅は手離さないつもり
紅い帯恋してらるし母傘寿
紅色を魔法の杖にする女
折れやすい真紅の薔薇も青春も
さあ紅をひいて女を取り戻そ
ほんのりと紅さして来た朱鷺の雛
ほほ紅をすこし明るくなつた妻
紅しうが稚拙からりとおもてなし
白寿へと女忘れぬ紅ほのか
しゃつくりが止まりようやく紅を引く
恋は氷河期きつぱりと紅を拭く
吾亦紅喜寿へあれこれなお習う
口紅もつけない妻が好きでした
牛井の並にたつぷり紅しうが
紅つよく引いてふつ切ることがある
勉強会こころ和ます紅一点
春の夜の紅差し指のひとりごと
逃げていく歳を必死に追うルージュ
紅型にオスブレイなど似合わない
春の手紙追伸に紅を足す
紅唇の志功天女に惚れている
はにかんで初めて紅を差した日の
紅色をはおり桜と勝負しに
子を二人チャリンコママに紅はない
そうですか紅色の旅ですか

(A) 千代 宏子 靖鬼 すみえ 光久 萌子 月子 敏治 黒兎 哲子 良一 黒兎 善純 まつお すみえ 一風 朱夏 良一 希久子 敏治 朱夏 月子 義

兼題「紅」

小島 蘭幸選

紅はむらさき命を張った日もあった
わたくしは紅一点のはずだった
見合い席紅潮してた妻なのに
ひと差しの紅は女の点火剤
薄紅が匂う八十路の乙女たち
君の引く紅はさながら魔術師だ
コロコロと亡妻のルージュの使いさし
紅少しつけて夫の墓洗う
煩惱も薄紅色になってきた
キスしてもとれぬ口紅買いました
私をじっと見ている朱のルージュ
紅涙を溜めた仮設にサクラ咲く

佳

紅生姜ほどの存在感でいい
一本の紅に哀しみ閉じ込める
色どりに添えた紅生姜の元氣
赤い口紅まだモンローが生きている
ヒミコはきつと黒い口紅塗っていた

人

薄紅を秘めた老人色になる

地

口紅を塗るとき妻のやわらかし

天

花吹雪浴びて薄紅色になる

軸

妻はまだ現役口紅がほのか

森子 見清 淳司 完司 航太郎 耕治 耕治 アキ あかね 奏子 武彦 富美子 梶子 紀乃 たもつ 楓楽 真理子 瑠美子

新家完司

句会燦燦

3月句会を読む は 芳 賀 博 子

絶好調今は何でも噛み切れる

すみ子

なんたつて絶好調。肉でも骨でもなんでもござれ、はいいけれど、おっと、今口になさったのはなんだろう。くれぐれも胃もたれには用心なさいませう。

気の利いた頓知で椅子を守り抜く

准一

会社の椅子を思った。真面目にコツコツだけでは生き残っていけない時代。どんな難題も得意即妙に切り返す言葉の力で、リストラの嵐もやり過ごせるか。頓知にも必死の汗が滲む。

ベルト解くひとつの義理を解くように

無限

きゅつと締めていたベルトを解いて、身も心もほつと緩むあの感じ、解放感。義理一つ解いたときも確かに、としみじみ感じ入る。

春泥に急かされ冬を脱いでいる

千代子

「急かされ」とあるが、句に流れるリズムはゆつたりと心地よい。春泥のはねた冬の裾。実景と心象が詩的に混ざり合い、季節の移ろいを句とともに愛おしむ。

ほんのりが好きだとツレが申します

(志) 千代

このほんのりとは、たとえばほろ酔って桜色に染まった妻の頬とか、うなじあたりからふつと薫る香水とか。いやまあなんであつても、ツレさまが好きだとおっしゃっているなら、それがすべて。

酎の中の酎をほんのりいだいた

蘭幸

酎の一字、シンプルな語感が新鮮だ。厳選された素材を使い、丹精込めて作られた逸品を体現するかのよう。穏やかに酌み交わせば語らい深まり、春の宵は至福のひとつに。

をんねん

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。
編集部

川柳クラブわたの花(大阪)(前月分)西川 義明報

昇進より亀で堅実人生路
もう一度逢いたい母の三回忌
コスモス迷路寄り添う影を連れて行く
コスモス揺れて亡き人偲ぶ坪の庭
自民党鬼の首でも取ったのか
願ひ事絵馬にしつかり筆づかい
結露拭く窓から見れば冬の空
山間の芒がゆれて風の音
久びさの毛筆みず這ったよな
アレギリコスモス摘みて喘息に
ふぐ提灯悪友たがももう来て
変らない愛を献げる一行詩
古希過ぎた娘案じる施設の母
医者言う余命信じず生きてやる
気忙しい言葉に合せ隅にいる
国道を横切る蟹の勇ましき
机から筆と硯が消えたまま
一筆箋ついつい本音長くなる

愛子 博子 和子 耀一 正春 孝子 かなえ 榮美子 明美 禮子 ますみ 宏至 知佐子 美代子 いつみ 宏 晴美 俊子

真つ直ぐな滝に亡父を重ね見る
追伸の手書きが温める年賀
ゴルフから輪投げに変わる優勝杯
老母達者干し大根がまた届く

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

果こもりの虫がいまか待ちかまえ
果立つ子にエールでつかいにぎり飯
貧乏神が留守番空果入れない
花の下大志を抱いて子が果立つ
古巣になれしたしんだ愛の場所
愛の巣を愛しい人と作れたら
温泉が湧くはず日本は地震の巣
愛された巣には灯りがついている
コミカルなダンスを真似て足もつれ
ボランティア種みえみえのマジックショー(矢)
コミカルに町を賑わすちんどん屋
文句言えは妻コミカルに肩すかし
校長の訓辞変な節がつく
きままるのコミカルうちのこのよう
旅芝居女形のすねがにゅつこのび
予定表うろろうしる暇がない
悪酔いの訳をみんなが知っていた
地下街をうろつく度に迷宮へ
うろろうとする間に二月もう逃げる
駆け引きをしない素顔の人が好き
うろろうとナビを相手に目的地
キッチンでうろろう妻は風邪で臥せ
目かくしで誰も捕えず泣き出した
好きですとただ一言が言えなくて

義明 明 浩三 一風 満知子 朝子 克己 賢子 安代 昌紀 芳香 五月 美世子 シマ子 昭 隆昭 温子 千歩 半銭 りつえ 桃花 のん子 妙子 直子 萌

目がうろろう泳ぎ出してる色男
父の背が小さく見えた嫁く朝
優勝と泣いて喜ぶ鬼コーチ
カミさんはドラマですぐに涙する
愛犬が話し相手となるくらし
鳴りやまぬ拍手先生頼めらす
叱られて出掛ける時にお弁当
鬼の目線はずれてるので気楽
無冠のチームようもこまで「ありがと」
監督も鬼の顔して泣いている
怖かった教師門出に目が赤い

いずも川柳会(鳥根) 佐藤 治代報

難問の深さを知らぬ重い筆
童唄すさんだ心取り戻す
本流を求めて自分を取り戻す
初恋の肌は当らず触らずに
忘れたい記憶を戻す寒椿
膝の児が問わず語りの種明かす
反発の言葉すかさず跳ね戻る
山椒が笑う私も笑い出す
追憶がほろほろほろ巻き戻す
似合うかな部屋の鏡に問うてみる
ふだん着に着替えわたしに戻ります
体力を戻す術なく日を疊む
バリバリの頃はブイブイ言わせてた
私が私に問うて今日も暮れ
無駄な木は一本もない冬の森
眠られぬ夜は問答くり返す
無駄口をたたき笑いの渦にいる

舞夢 順子 五月 勝弘 志津子 篤子 公平 公誠 和代 日の出 典子 治代報 孝亮 志げる シゲ子 桂子 煩悩児 たえこ 敬子 喜子 健柳 ちえ 幸子 芳山 多喜 久枝 弘子

一肌も二肌も脱ぎ恩返す

バリバリと儲け男は先に逝く

正直に生きたらどうか自問する

二つ問い二つ忘れて生きのびる

若い頃恥らっていた妻の肌

バリバリの肩から波が生まれくる

一肌を脱ぎ真相をおし明ける

病むたびに私の命引き戻す

古里の訛に戻す汽車に乗る

片道切符戻る当てなどない命

山肌も心も白く包む雪

どこまでが本心なのか問うてみる

泥んこの肌です恐いものがない

無駄ですよそれで身を引く人じゃない

引き戻すどこかで返事する絆

戻された命何からはじめよう

しっかりと生きたか天に問うてみる

戻すもの戻し男の顔になる

柳柳塔打吹(鳥取)

野口

節子報

脳鍛え土手を歩いて一万歩

元氣だよ年金握りスナックに

朝昼晩元氣印は腹時計

ジョギングも元氣に続く夜勤明け

喰って寝て遊んで飲んで立ち直る

岩田帯しめて守った元氣な児

母さんの元氣日本を支えてる

空欄を埋める元氣が波に乗る

カチカチと入れ歯がタツ踏んでいる

原色の元氣室温二度上げる

柘次

昌枝

治代

歌子

房緒

徳子

左余

美江子

寿美

美千代

テル子

佳子

あきら

茂美

章峰

玲子

文子

きみえ

久芽代

道子

たけ代

善江

重利

美代子

富恵

玲子

野蒜

くにこ

ひっそりと元氣を溜めている桜

神妙にしるゴキブリ追い回す

航平の神妙な技湧く拍手

飲み過ぎて神妙なのは朝のうち

神妙な顔で聞いている手術前

神妙な言い訳メガネくもり出す

介護する神妙な顔たのもしい

神妙に閻魔の前で泥を吐く

神妙にしる監督促すが待たぬ

神妙に花嫁挙式など付たるぬ

神妙な顔が並んだお葬式

金星を取ってほしいが叶わない

ほのぼのと竹取り翁思い出す

一つずつ歳を取るたび欲を捨て

山一つ買って猪取って食う

矢印を取ると迷子が居なくなる

残金が心細いよ奇数月

中国は年二億食残す国

残るのは葬式代だ寒い春

背に残る六文銭の灸の跡

プロボーズしないままです悔い残る

万人を照らす残り火溜めている

人類が絶えてもゴキブリは残る

名残り雪生命線が浮き上がる

和歌山三幸川柳会

武本

日出ずる国の安全神話とや

復興を急がすダンブが日の出待つ

わたくしをスパンコールにする日の出

前向いて歩けば付いてくる日の出

完司

公恵

勝憲

義人

泰山

美知江

貴恵

滋

紀の治

照彦

龍枝

陽之助

和子

耕治

紀美恵

三津子

清

玲坊

岳人

重忠

美美子

節子

芳光

美ツ千

碧報

保州

ひろ子

義雄

古久保 和子 選

念入りに描いた眉毛が揃わない

逃げ足の速い靴一足を賣う

握り拳開くと海が風いっていた

結んで開いてころろの置きどころ

いつの間に盗まれていた隠し味

降り立った駅で種まく事にする

ほんのりと灯が点いている起きている

赤飯が好きで度々お目出度い

面倒な人が胸から出てゆかぬ

沈黙の群れから一人手を上げる

佳句地十選

(4月号から)

岸本 宏章 選

箸使いひとつに育ち覗かせる

豆まきで私のなかの鬼を出す

握り拳開くと海が風いっていた

裏道をうつかり知つてから迷う

寒の月怯む心に突き刺さる

講釈も値段に込める骨董屋

正直に生きた男の靴の底

分ける手間省いてやろう遺産セロ

赤提灯に郷愁がある駅の裏

国宝と聞いてその気で見える仏陀

富子

みち子

無限

芳生

幸子

けい子

弘風

藍

扶美代

蛙城

准一

史子

無限

地佳平

志華子

和雄

寿之

淳司

年代

まつお

大次郎 義旦 和子 倭子 美羽 准一 孝子 幹子 元三 富美子 町子 徑子 芳子 豊子 芳子 碧子 絹子 昭枝 富子 当子 紀子 起子 章子 伊子 ほのか

古田 太虚報

猫と妻に僕は飼われているらしい
飼うつもりがないのに小犬ついて来る
両の手の中に蜜を飼うことに
独り居へ鬼も福も飼うことに
白蛇を私ころに飼つてます
丹田に我慢がまんの虫を飼う
身に毒と思うお酒をたちきれぬ
毒舌を吐いても憎めない人だ
胸底に淀んだ息を消毒す
晩酌の二合目あたり毒を盛る
毒いくつ飲んで定年間近なり
新社会弱者を護る杖一本
杖を頼りにあしたあさつて
祠まで杖ついてでも登る老い
同行二人母の遺した杖とゆく
「忘レモノ」杖があるのも面白い
歌っていたあなたの杖になりたいと
じいちゃんの杖には家族愛がある
庭に来る小鳥の癒す日向はこ
一日の終わりを私をギュッと抱く
訪ねれば旧居に母の動く影
手の平の福を零さず豆をまく
夢の中強気な私現れる
兄弟が同じこととして笑い合う
朝ごはん食べてヤル気を満たんに

笑子
現代
比呂子
幸子
蘭幸
敬子
栄恵
房子
汎恵
輝惠
白狐
半德
静風
京子
淑子
泰子
千代美
厚子
あゆみ
慶子
栄香
歩美
史子
千枝

乾布摩擦元氣浣刺八十路坂
口だけが元氣で動きこまります

松露川柳会(鳥取) 山本 正光報

弘子
公美枝

富柳會(大阪) 古田 千華報

日に一度島の命の定期船
 定位置に靴を揃へて脱ぐ襪
 練りすぎてひ弱になつた一行詩
 八十路から恋の掟が定まらず
 指切りがきつと待つてる無人駅
 もう迷わない曇天を裏返す
 剪定をされて花芽が騒ぎ出す
 さだめなら蟬に習つて忍一字
 ミンク着てヒールで並ぶ貰い水
 親戚や縁者が増える遺産分け
 大の字に寝て将来の夢語
 妻一途定規で引いて真つ直ぐに
 満足と書く鉛筆の芯が折れ
 産湯浴び目も鼻もない大あくび
 おすそ分けそんな時代をいとおしむ
 味をしめ今度も買おうジャンボくじ
 大皿に絆の愛をてんこ盛り
 大見得を切つた財布を確かめる
 絶壁を歩く五感と対話し
 平凡に生きる明日はあるがまま
 割れないでよかつた蓋として生きる

欣之
 千華
 よしみ
 晴美
 アカ
 コ
 高鷺
 彦次
 未知
 壽峰
 清
 武人
 伸雄
 華
 和子
 正治
 寿之
 恵
 佳子
 登子
 信子

大皿に盛った幸せ取り分ける
会者定離万里を踏破して傘寿
冬の絵にさあ目覚めよと陽の光
感謝感謝親から貰うたこの身体
美しい誤解だったと言う白紙

城北川柳会(大阪) 近藤

洗礼を受けてひと皮むけました
うぶ声の白紙に夢を幾重にも
旅のスタートまず駅弁を開けてから
ひとまずはお茶でも飲んで息抜きを
再生紙白紙の底に影がある
もうすぐ春ふさぎ込んでちゃだめですよ

高くとも山は黙して語らない
成田屋の脱みに閻魔たじたと
息災がどれほど大事かと悟る
ホワイデー義理チョコ貰い悩んでる
ポイ捨てで背中に刺さる子の目線
砂時計命の落ちる音がする

逆流も時にはしたい砂時計
ピリオドは白紙で閉じた遺言書
先入観持たず本質見極める
一人居の小さな雛をそつと撫で
目線下げ幸せぐいと引き寄せる
放つとけば車も妻も臍曲げる

よるめかず媚びずひとまず考える
創造の心の育つ砂あそび
バンドエイド女の勲章指の先
笑い袋沢山持つて世を渡る
傘寿すき曖昧模糊として暮らし

千恵 紅紫朗 奏子 七朗 森子

正報

たもつ 美智子 公子 勝弘 郁夫

一歩 和夫 満作 弘風 隆男

義昭 宏 仁 賢子 麗 堅坊 克己 柳弘 朝子 千恵子 典子 ルイ子

この春は五寒二温に惑う梅
身の丈に合わせ白紙に夢を描く
砂煙上げ復興へ急ごうよ
探査機が砂もチェックのレアアース
鉛筆の芯尖らせて投書箱
とりあえず会ってみたらで五十年
対決前ひとまずビール酒二合
妻のミクスで小遣い値上り期待する
わがままも愛の目線で介護する
一斉に目線集まる超美人
虹をかけ汚れた空を掃いていく

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目

日本に帰りたいからう北の島
生も死も神がカウントするらしい
狭くても私の領土花を植え
胸中の火種誰にも明かさない
諦めのつかぬなしてもあるこの世
北の国終末時計など知らぬ
気の早い蓄カウント待ちこがれ
冬こもり日脚の延びる春を待つ
長生きへ神がカウント待ちこがれ
小さな島が大きな課題突きつける
バンドラの底に残っていた希望
反論をしてから妻にうとまれる
二度と無い人生好きな色で咲く
受け取った言葉は丸くして返す
カウントも響かぬ日々にも老い感じ
どつかりと夫の領土であぐらかく
領土はないみんな地球のものでしょ

縣 集一 正子 野鷲 志華子 武彦 昭

粹報

洋々 一瑤 節子 清信 妻祥 金祥 昌鼓 春名 凱柳 無限 無 地佳平 雅女 菖子 美佐枝 智子

この膝は孫が独占する領土
なしてたか残高合わん身銭切る
この人はなして暗いか腑に落ちぬ
生きてますカウントダウンやり直す
カウントの羊増えても眠れない
カウントが妻の理屈が腑に落ちぬ
なしてかな妻の理屈が腑に落ちぬ
なしてかな遠くの人が早く来る
時止めて春のきざしが息を吸う
蟹の数カウントされて保護をする
カウントも秒読み八十路坂のぼる
大國揺るがす北のしたたかさ
したたか死ぬまで痛と言わなんだ
私もしたたかだった遠い日よ
したたかなその気で明日を裏返す
兄弟の領土取りあい情けなや
神様へ国引き頼みたい領土
聞いたふり聞かぬふりするしたたかさ

川柳らくだの会(鳥取)岸本 宏章報

また迫る天気予報の雪マーク
ケース入りの雛壇飾る核家族
年一度お湯にさそわれ息を抜く
核心に迫ると話はぐらされ
息抜きの旅の疲れがどつと出る
法要が迫り障子を張り替える
再挑戦いったん息を抜いてから
母買うケースの底をすかし見る
同居して居場所だんだん狭くなる
ケース入りにすれば隕石らしくなる

振作 孝二 圭一郎 善夫 由美子 はつ江 回春子 行男 菊香 蟹郎 悦子 とも湖 茂登子 一京 清帆 弘康 秋月 一粹

仁子 寿賀子 富貴子 孝子 清 玲子 一弘 せつ子 大鯨 宏章

川柳塔おつばこ吟社(香川)川崎ひかり報

逃さない君のハートをわしづかみ
 惜しかった逃げた魚にある未練
 聞き耳が真実だけを逃さない
 忙しいその一言が逃げ口上
 逃げ上手仮面かぶった鬼がいる
 鬼ごっこ逃げた仲間も八十路坂
 放任

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

神様と般若に化ける妻を持つ
 早や三月時の流れに逆らえぬ
 隠居してとうとう輪から外される
 詠えた服のようにはいかぬ妻
 隠居などするかと見せる力瘤
 雑草のまだまだなれぬ楽隠居
 古狸寄って川柳化かし合う
 化けたわね今朝も鏡に笑われる
 病床の隠居部屋には無い笑顔
 百歳の心に張りのある笑顔
 何本刺しても上手に縫えぬ針供養
 詠えた道は通らぬ子に育ち
 化粧より笑えは男の負け惜しみ
 祭段を詠え初の節句持つ
 農大出の婿さん来て休耕田ピッカピカ
 首吊った人に出合って肝つぶす
 楽隠居と言えぬ氣使っています
 うぐいすが啼き先生の瞳が笑い
 足腰が弱ってきても詠える
 ご忠告肝に命じておきます
 定年に無事な楽隠居が見えぬ

弘子 茶子 盛江 富久江 照彦 八重 実満 いさを 蟹郎 宣子 孔美子 露子 悠子 悠子 くに子 螢 かおる みさ子 京

南大阪川柳会 津守 柳伸報

状況がくるくる変わる事故現場
 後期でもくるくる迷う恋心
 恙無くくるくる回れ夫婦独楽
 大阪は太閤さんが守る街
 浪速つ子虎が命という娘
 漫才が大阪弁を汚してる
 通り抜け今年も連れは男だけ
 お好み焼返し方にもある風
 釣柄に逆うたなら火傷する
 大阪に天牛という古本屋
 大阪弁に会って安堵の旅靴
 鉄拳もいじめも昭和まるい風
 惚けぬようしつかり脳をいじめよう
 正午過ぎうつらうつらと定年後
 日本中うつらうつらの平和はけ
 うつらうつら猫と奥さんサランム
 陽炎に合図送れと土筆の子
 頬杖がスコンと外れ眼が覚める
 ベストセラー仲良しになる両目蓋
 うつらうつら竜宮城へ着きました
 点滴のうつらうつらに母の影
 年寄りをいじめる市長居て困る

直子 あや子 集一 シマ子 恭昌 弘風 郁夫 昌紀 克己 一歩 たもつ 弘子 楓楽 柳右子 修 ばつは 忠昭 正春 柳伸 典子 志華子 勝弘

不器用な大工仕事の跡始末
 ぶきつちやだが美味しい父の握りめし
 不器用と知らず頼んだのが不覚
 金釘流でも温かい母の文
 不器用は不器用なりに生きる知恵
 レース編み中途半端でほうり出す
 不器用も弁舌だけは冴えている
 出世には遠いが部下に慕われる

川柳ざさやま(兵庫) 北澤 桐民報

脈みやくと七〇〇号の華ひらく
 七〇〇号の川柳の灯ヘッカンシヨ
 七〇〇の歩み嬉しい仲間入り
 耳慣れた七ツが百も嬉しい年
 五十八七百号と同じ歳
 七〇〇号幾多の友の絆なり
 燃然と七〇〇号と師の米寿
 七〇〇のライフワークを追いながら
 長生きはたのし七〇〇巡り合う
 七〇〇を年に直して驚いて
 師に捧ぐ子弟子孫弟七〇〇号
 七〇〇号心に残る句を願ひ
 三〇〇七七〇〇号にも出逢う幸
 川柳誌七〇〇号といますごさ
 川柳誌郷土の誇り七〇〇号
 七〇〇の句報あしたへ続く橋

久子 美緒子 純子 美紗子 哲男 真由 多美子 開子 可住 かはる 幸子 ちかあ 照代 美智子 博子 和一 耀一

川柳クラブわたの花(大阪)西川 義明報

人生百歳家事の能力金となる
 ほめられて心は丸く目も丸く
 明日を信じ生きたれば希望の陽が昇る

愛あれば何の恐れもないこの世
歩きたい辛いリハビリ希望もち
もうイヤだ病いまだ増え医者通い
はちきれる財布の中味カードなり
ランドセル揺れるお守り母の愛
紀元節神宮参拝清められ
白いバラ自分へ買った誕生日

振袖が濡れても平気二十歳の春
おんど焼き没句メラメラ天に舞う
老いし母お守りだけは離さない
信じてないお守りいつも肌につけ
尊敬のまなざし受けて戦士行く
思い出が星の数程胸の中
うつ向いた返事が嘘とバレていた
仰ぐ師の気高い遺志をつぐ歌舞伎
小銭入れ神と仏が詰ってる
大吉のおみくじ引いて希望持つ
よう笑う妻を見てると元氣出る

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

迫力のあるD51へ孫を連れ
興奮をしたバーゲンが懐かしい
同じこと何度言わせる子と夫
生きものの宝庫里山過疎に居る
出張と聞いて思わず笑み浮かび
まだ元氣一歩進んで一歩老い
チャネルを変えても同じバラエティー

川柳塔みちのく(青森) 小寺 花峯報

日が沈むいつもの顔で会う居場所
吞舟

秒針がせつつかちだからあわてます
おとうふが凍るかしらと外へ出す
子と遊ぶエプロンの母今朝の夢
寒波来た犬までこけた雪の道
晴れた夜を寒波をつれた冬の月
会ったのははじまりでした今夫婦
TTP真綿で農の首絞める
介護する母に会う日は赤い服
白星は娘一人を産んだこと
白無垢の写真もすでにセピア色
一番の寒波が来るぞじゃっば汁
ふんわりと新芽を包む雪の白
飲み過ぎて妻の寒波に耐えている
初デートしつかり決めて美容院
カメラアイ津波被害にうろたえる
冗談を知って崩れてゆく豆腐
五月雨の川にあわてる花筏
寒波撃退熱燗二合あれば良い
発車ベルまだ待ち人が来てくれぬ
恋人は次の駅から乗って来る

あかつき川柳会(大阪) 宮崎シマ子報

つってんで誇る背中には隙がある
襟元から誇っているよニューフェイス
誇れるだけのものを広げている孔雀
誇るもの普通じろしの子供達
プライド数だけ敵を作ってる
誇りなど邪魔だ邪魔だと三代目
朝飯時の暗い新聞胃に悪い
火加減で米がスツク立ち上がる

龍馬 小とみ 信子 一湖 千よし 隼人 ひとし 洋子 柳子 美鈴 則彦 芳生 一吞 井蛙 花匠 花人 花峰 慕情 五楽庵 脇

寿峰

川柳唐津(佐賀) 仁部 四郎報

春だからにぎり飯持ち放浪記
一合の御飯仏とわたくしと
浅い男と深い女のまぜご飯
大盛りの飯に男の意地がある
飯粒を拾うとあの日疼き出す
シヤムネコのごはん内ひとのめし
腹時計が飯どき決めるひとし者
御上手も言わねばたらくぬメシの種
食べるのでなくいたたたくのが御飯
最後には父の軍歌になる宴
山海の恵みに勝る友の愛
一円の安さママチャリ足のばす
九条の最後へ悪い多数決
ホスピスへ見舞い静かなバスの揺れ
時々日は焼けもしたい足の裏
昭和一粒短足恥じたことはない
迷ってまよって最後に辿りつく初心
二本足になって悪さをするヒト科
締め切りも賞味期限もない黄砂
九条を無傷でつなぐ正念場
大層な春の足音杉花粉
人の靴はいて帰った二日酔
株高はどうやらバブルの赤信号
次々と招かぬ客が飛んで来る
自分史のラストページは完一字
弁護士が痴漢税理士は脱税
資本論学んで歴史良くなる

花笑 哲男 和代 卓 紀乃 一簡 賀世子 敏子 秀夫 克己 一志 穩夫 大気 たもつ 朝昭 祥弘 柳二 生枝 鉄心 武 鮎子 みつ江 和雄 勝弘

蜂朗

微粒子も春風に乗り雲に乗り
菜の花を縫うがごとくに春の蝶
美人には薄命と言う苦を負わせ
すれすれの家計に税がのしかかり
蘇る記憶の中に純な君

三和子
敬武
直樹
芳野
和子

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

手紙書くことなど皆無すぐメール
一通の手紙誤解はとけました
マニュアルをつないだボクのお礼状
私が育てられてる孫と娘に
柳 久 春 美智

順長

お隣は育て上手か子が自立
悪玉が私の中に育つてゐる
二十四時好きに使える日がまさか

古希なのにあの人が好き恋かしら
昨日までまさか明日から当り前
重勝

百点をとってきました我が息子
まさかまさか美人になった夢を見た

ああまさか活断層の上に住む
さすがです後光輝く山の神

ベランダに春の光のお客さま
親の顔背に威張つてる委員長

へそくりが消えて代りに借用書 郁

定年後仲よく二人万歩計

取り過ぎて恥をも残すバイキング 治

八十田洞庵報

— 134 —

消しゴムで消せぬ思いの過去の夢

時流れやと出て来た人の名が

おひな様孫とタブラセ恵比須顔

鏡見て昔の顔がどこへやら

この寒さ春が待たれる高齢者

絵手紙を書く気になって平常心

南無大師坊主の商法バチ当る

ベットろをうちの子と呼ぶ私です

日本中マスクだらけでどなた様

福は内胸に棲む鬼出てこない

テロ悲劇心痛める殉職死

初日の出眺めて黙り祈願する

いちよう舞う残る木の枝春を待つ

趣味の友増えて冬日のまぶしき日

十歳の孫の手解き花活ける

地球儀に炎の火種こかしこ

川柳塔きやらぼく(鳥取)大塚

弘様寒の水です召しあがれ

円満が壊れかけてる低気圧

節分明けて春の息吹きが肌に触れ

まだ女浅い夢見て紅を引く

老父母は翼たんで春を待つ

持ちつけぬ筆を握って肩がこる

飛行機が家の真上を飛んでゆく

ろう梅が淡い想いの灯をともし

ありがたうさよならそしてきげんよう

伸び縮みする時間を揺らし遊ぶ

笑顔良いシルバーパワーの良い人

人間を学び足りずに生きている

三様に母を気づかう三姉妹

寛

桜 琴

雪 子

恵 美 子

圭 子

茂 平

覚 庵

晴 美

富 美 子

年 子

清 一

隆

伸 子

洋 子

澄 恵

洞 庵

恵 子 報

未 延 子

初 枝

鶴 子

麗

恵 子

亜 弥

ゆ き

寿々子

喜 周

瑞 枝

千 代

富 美 子

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

気楽だと思つと何となく気楽

お気楽でよろしおすなとみながいう

油断した途端足許掬われる

踏みしめて歩くことやがて道になる

一歩目は確かに大地踏んでいた

足跡を辿ってゆけば血の絆

核戦争踏ませてならぬ勇み足

足枷にならないうちに消えましよう

決断を胸に足音響かせる

あつさりといふを認めてきた笑顔

あつさりといふとこめんなさいが出て来ない

財産も借金もなく遺書もなし

あつさりと解決します札の束

あつさりと受け入れその場丸くする

淡白な君にかけたい粉チーズ

あつさりといふとワンランドでけりがつき

生きがい母の教科書丸暗記

教科書が育てた国の正義感

教科書に古い時間を止めたまま

教科書をのり継ぎ青い芽を伸ばす

どの辻を曲がつて教科書になった

教科書にない真実を見極める

教科書を背負つて生きた模範生

父母は背を祖父母は囁んで言い含め

川柳塔まつえ吟社 鳥根 相見 柳歩報

地道でも歩く先には何かある

物忘れひとり歩きで平和賞

木洩れ日を歩く涙を噛みながら

まだ傘寿余生怯まず闊歩する

一歩引くゆとりで風を和ませる

あの時の曲が流れるティーカップ

受け流す心のゆとり抱いて生き

痛む胸雨が流してくれるはず

笹舟を流した川も濁れている

早春へレンタル切れた蛙出る

レンタルが幅を利かせて泣くタンス

レンタルの蒲団も同じ温かさ

レンタルに出して返らぬ広辞苑

妻のレンタル出来んかと酔っぱらい

レンタルは出来ぬ命と人の情

ぼつぼつと齢気になる顔になり

ぼつぼつと忘れる自分あきれてる

ぼつぼつと帰るか面白くない講演

ぼつぼつと実力見せる年の功

炬燵番ぼつぼつ止めて春ですよ

ぼつぼつと行つて三角まるになる

春ですなぼつぼつ冬を脱ぎましよう

聞かれるとぼつぼつですと言う元氣

本心は残さず桜散つてゆく

思い出は褪せることない桜貝

桜前線恋の予感を連れて来る

よく笑うさくら寂しき吹き飛ばす

今ひとり桜吹雪の中にいる

本当のことは言わない桜餅

永すぎた春も厭わずまっしぐら

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

坂は未だ続いて未知数のわたし

品格も風格も無く金も無い

昌 枝

桂 子

幸 代

長 吉

柳 紅

町 余

左 子

とも

草 庵

畔

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

幸 子

自分史に区切りをつける一里塚
平凡でも幸せ続きありがとう
裏方がいつもドラマを握ってる
品格の違い皇室御用達

三食は我慢出来るが酒はダメ

戦争がまだ続いている不発弾

弥陀の手から善人なのにこぼれ落ち

山笑う雪だけ里の応援歌

上品な言葉の裏にある仕掛け

合乗りの応援万歳で別れ

何かある妻のハミング弾んでる

断ち切れぬ思いで今も子を探す

追伸に葉の花こぼれ春こぼれ

おもいでを咀嚼している日向ぼこ

風向きを見てネクタイを締め直す

老いても胸に滾るものあり春近し

うっかりのコントを今日も積んでいる

花一輪無色になって日が沈む

土の品土の香の道の駅

川柳塔さかい(大阪)

村上 玄也報

天皇は生きてる限り辞められず

OBになっても肩書が喋る

現役の癖で上からものをいう

置手紙書きたび上手くなる女房

現役を辞して胃薬飲んでない

仏壇にあの日と同じ雪ですよ

裏の裏読んでジョーカー手に残る

駆け引きが強く出過ぎて御破算に

伝言を頼んだ人が悪かった

慶子 一風

草風

紀雄

寿之

五柳

晶

高鷲

ダン吉

賢子

紀乃

朝子

常男

耀一

賀世子

加央里

欣之

給料があるのでしばらく威張らせる

駆け引きのない人と居る心地よさ

杖持って歩くと車近寄らず

子守する代わりに子等と住んでもす

さりげなく心を読んで頼みごと

おばちゃんに最後の最後値切られる

他所の店もつと安いと負けさせる

沈黙で伝える堅いかな意思

駆け引きに疲れ利き腕泣き出した

さくらにも駆け引きがある開花時期

現役は事例が出れば拒めな

バゲンに元値のタグを残しとく

駆け引きがとつても上手いだんこ虫

白から黒に化けてしまった言い伝え

現役を譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

現役は譲る子供が頼りない

扶美代 のん子

篤子

月子

かりん

清

健吾

日の出

ばっは

朋月

八千代

雅明

光

りつえ

像山

唯教

冬虹

寂子

好

清晋

世紀子

五月

玄也

千代

天笑

薫報

昭好

陽

あや乃

おはようと言えはおはよう返す路地
路地ごとに違う匂いが流れてる
PM25問題ないとか頼かぶり
問題は生きようとする気力です
親の介護問題はない娘の絆
路地裏はカレーの匂いセピア色
よその子も叱る人いた路地の裏
路地裏の薔咲いたが恨み花

川柳 大阪

森松まつお報

鉄心

堅坊

朝子

彦太

喜楽

五月

信醉

笑風

川童

万紗子

美世子

紀雄

一歩

温子

まつお

善純

かよこ

一風

勝弘

司

梅の香に身ぶるいしてワンのカップ

金もない知恵もないけど今日も飲む

母さんはどこかに温い知恵を持つ

伝承は未来役立つ知恵袋

忠臣蔵涙なしでは語れない

血も涙も無い熱気球の落下

子をかばう父のいのちに涙する

止まらばい涙の訳はベットの死

梅が散り桜は早い温暖化
先輩も後輩もない句会
十の指教えてくれた知恵がある
功 比呂志 芳香

わかあゆ川柳会(島根) 松本はるみ報

何事も平気で話す評論家
インテリのまわり孤独な風が吹く
平気だと思ふ段差に蹴躓き
ほどほどにして置き度いが気に掛り
北極の水が溶けてゆく怖さ
雑草に問ひかけている古川柳
助け舟そつと浮かべておくゆとり
水空気きれいな雨に人が減り
追いかけて所詮かなわぬ日めくりよ
清 泉

京都塔の会 樹本 宏子報

絵に画いた餅にとびついている株価
こつそりの話の釘は抜けたがる
心意気預けて日日を輝かす
コーチには預けられない愛の鞭
もう一度青葉のように生きてみる
サービスが微妙に変わる預金額
神様にそろそろいのち預けよう
こつそりと光は春を連れて来る
反動は来るジャブジャブと刷るお札
あの日からこつそり胸に恋心
人気株のアベノミクスに賭けてみる
これからの人生預けていいですか
こつそりとするから面白い悪さ
横車許せなかった青かった
宏 子

何時くれるアベノミクスのお掘分け
青空は季節を問わず頼もしい
アベノミクス次の時代に春よこい
中国のダニこつそり付いて来た
こつそりの恋がメールから火花
こつそりと充電してる路の臺
昭 輝 美 篤子 ふりこ

こつそりと小銭を貯める訳がある
こつそりが下手な地声の真人間
やり繰りで青息吐息暖房費
青臭いスーツが揃う入社式
青りんごを狙うサイトを許せない
青い海僕のブルーを癒してくれ
青空に真白き富士映え建國日
生々流転青い芽が吹くカレンダー
健康が預金ですよと胸を張り
青春は兵隊でした知らぬ春
五月

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

幾十年風雨に晒し丸い背な
わたくしを变える魔法がほしくなる
目を晒し捜してもない私の句
風見鶏いつかたまごを抱くつもり
手の内を晒し相手の風を読む
短足を晒し一桁生きのびる
山菜を晒して煮こむ旬の味
寒の水に晒し友禅春の色
水と油が混ざったような政治
長生きの秘訣ときどき休むこと
アルコールに晒し肝硬変になる
残照に晒して命輝かす
希久子

美人かな大きなマスク下の謎
奥の手を使い果して無にかえる
白い布さらせば白が生きてくる
本心を晒すとみんな去ってゆく
義子 智恵子 楓 楽

大山滝句座(鳥取) 新家 完司報

パワースポット小汚い石置いてある
ああそつとあれは義理チヨコだったのか
伸べる芽の素性がわかるまで抜かぬ
君となら乗るエジプトの熱気球
チューリップ斬られるための長い首
新興国いちばん困るのがトイレ
伸びきったゴム紐はもうお役済み
所得税ごまかしたのは大昔
背伸びして小さな乱を繰り返す
西安の街に散水車が走る
酸欠の顔をザブザブザブ洗う
自信過剰SOSを聞きのがす
寝たきりの数も含めて長寿県
石百個積んで恩人忘れない
桜咲く日本の春に手を合わす
外国で気取らず喋る出雲弁
夢の中英語ペラペラ喋ってる
眉ひとつ描いたところでチャイム鳴る
事故あって邦人の活躍を知る
楽しいのかあの世へ行ったきりの夫
女房の許可を得てから沖釣りに
恩を売る言葉チラホラ見え隠れ
年金が目減りするのでアルバイト
桜咲く八十路の春に幸あれと
恒子 久子 鈴野 重忠 雄大 風露 けいこ 七七 七七 典子 厚子 博子 幸子 美子 石花 大鯨 照彦 芳山 紀の治 玲子 芳光 くにこ 大鯨 照彦 芳山 紀の治 玲子 芳光 くにこ

青空の見える窓辺で病んでいる
早魃につくつく思う水の恩
割り箸も黄砂もメイド・イン・チャイナ
すみゑ 仁美 完司

六甲川柳会(兵庫) 伊勢田 殺報

今も読む囁んで含める母の文
しあわせを運ぶ神には羽根がある
失敗も転機一かちやり直す
ハットする師の句に出会い柳の道
正念場還暦からの美人の湯
先輩のあの一言で今がある
解説者になろうと決めた足のケガ
迷わずに射止めた夫は大当り
カーナビさんこれから先が知りたいの
あれこれと迷ったあげく何もせず
何を着る天気予報に迷ってる
迷ったら目を閉じて聞く風の音
バトカーで無事に届いたおばあちゃん
味付けに迷えば母のさしすせそ
残り火にちよつと未練の恋心
ちよつとだけ主夫をしてます週二日
ちよつとだけ老いのハートを焦がす人
ちよつとした美人の横で落ち着かず
立ち話肝腎なことちよつとだけ
ちよつとだけ寄つてみようか縄のれん
今日も没落ち込まないわちよつとの差
元社長ちよつとちよつとと人使う
年金にちよつとボナナス欲しい時
ちよつとした幸せで傘が待つ
雇用盾にボナナス讀歩強いられる
車椅子押すハンドルに愛こめて
みつ子 いわゑ 能子 和子 忠貞 義博 利子 道子 康子 洋一 盛夫 千賀子 美恵子 弘子 政一 繁義 弘勝 寿朗 ひろ 宏造 登美子 弘 浩司 博史

待ジャパン為さねば成らぬ三連覇
会社員追い出し部屋の詫び住まい
アイデアを磨くトイレのメモ用紙
短冊の雛も聞いている深夜便
こつてりの化粧を落す午前二時
車椅子夫乗せてる妻の愛
うぐいすが独り占めだよ梅の花
優しさは人の迷いを深くする
愛紡ぐ糸は生成りの白がよい

岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報

卒業証書重い自死の子の親に
被災地から元氣もらうと言う話
危ういねTTPも原発も
酒タバコやらぬ人生幸多し
子を庇う母の目の色命懸け
親から卒業はよい反抗期
よく言えばユニークだけど変わり者
優しい夫オーイお茶でも入れようか
そのナイフ寄せ殺したのは俺だ
時折は家事を卒業したくなる
風情聞き耳で韻見る寺の鐘
ランク上げ危うかったが桜咲く
初出勤ハローワークとなつている
人様の臓器で命救われる
妻勤め僕が専業主婦してる
上手より下手が受けてる隠し芸
人人生学に卒業なんてありません
虚と実を丸く納めて庇う親
生き方がユニーク一歩先を行く
コーヒーも緑茶も飲んで鬱になる

武臣 得夫 和宏 寛子 武彦 邦勤 邦子 楓楽 無限 楓楽 幸子報 蛙城 昭益 益祥 清 香代 玄也 和 愿 淳風 信二 幸吉 隆昭 珠子 武志 忠太 大輔 紀乃 紀雄

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

卒業へひとりの力だけじゃない
女ですおしやれ卒業出来ぬ喜寿
まれに死ぬことありという薬
卒業式遺影も並ぶ仮校舎
庇つてつもの兄も震えてる
第二ボタン我が青春の記念品
卒業と同時に島を離れる子
東電を庇い続ける原発派
だーまて風除けたつた父の背
飛んでみて塀の高さを知りました
年頭に飛躍誓ったまま弥生
答弁にとんちの欲しい日本丸
断捨離をすれば私が消えていた
弟は親に叱られないとんち
お揃いのシャツが似合つてない二人
君の住む街にも春は来ましたが
土壇場で苦しまぎれにする仮病
ポストばつんと寒の戻りの街角に
釘煮することも忘れて寺参り
今も目に消えない母の割烹着
もう二年追悼だけで行くソチの道
K点を飛び越えて行くソチの道
ネコ歳と答えて野暮をたしなめる
作業服着たあなたの背中好きでした
飛躍にはとんと縁ない歳になり
傾知こそ人類だけの遊びです
とんちのある男の型は行書体
忍の一字だんだん溶けて柔らかく
合掌の十指に念ずる子の飛躍

信子 弘子 保州 ひろ子 洋 みつ江 義泰 康泰 欣之

淑子 キヨミ 敏夫 秋果 正和 ひとみ 紀乃 美龍 勝弘 哲夫 耕治 わこ じろう 盛夫 比ろ志 千代

老母の手を握って帰る又来るね
 ロボットが素早くにぎる旬の味
 ポケットに入れてたどんち賞味切れ
 頼知などキムジョンウンは解らない
 侍ジャパン復興に燃え飛躍する
 尊厳死早い決断迫られる
 大きい目に会をとるのも老いの知恵
 泥くさい男に似合ういぶし銀
 人違い咄嗟のとちとほけとく
 あらそいは地球に線を引いてから
 憧れの人と同席脈早い
 京ことばとんち磨いた跡がある
 美しいものだけ見える眼が欲しい
 東北へ黙禱神戸からせめて
 飛躍した話についていけぬ老

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井

美津子 野鶴 千賀子 宏造 武臣 無限 利子 茂 弘子 武彦 浩司 折杭 綾 千津子 光子 則彦報 かずお 肇 庸佑 美佐子 歌留多 志津子 幸雀 玲子 幹治 美津子 健二 千恵子 紀子 隆

とんがって掴み損ねた夢の跡
 鈍そうな人ほど芯は温かい
 尖るのを止めたら楽になりました
 一回の出会いで決めた人と居る
 節電に黄砂に花粉イヤな季語
 温いっていい笑顔があふれる
 待っていたのかほんのりと温い部屋
 早押しも特技のひとつクイズ王
 冷たい手温めてさよならの握手
 刷り込まれた生き方温い道しるべ
 会えないだなんて兵糧攻めですか
 ウグイスも歳をとったらボーボケキョ
 百舌鳥のため枝に残した柿一つ
 一本松生かした人の技がある
 距離すこし置けば何でもない失り
 会心の笑みがこぼれる絵具皿

川柳ねやがわ(大阪) 籠島

千鶴子 則彦 千枝子 美智代 求芽 巴子 耕治 玲子 見清 葉子 菜々子 武彦 章子 千代 美龍 恵子報 壽峰 博泉 仁江 美江 寿一 弘一 薫 かすみ 鈍甲 一風 三郎 修

一面に鎮魂ねがう灯をともし
 わたくしの心にわたしを阻む壁
 平凡を幸せと読む老い二人
 酒まわり出して本音を積み上げる
 うらかな声で恋人が喋るよ
 食事だけきっちり取って昼寝する
 悴んだ手で熱いメールの雪の駅
 渋淡と妻の下着を買いに行く
 目覚しを知らずに寝てるのんき者
 桜咲く皆の笑顔をみる広場
 思い出がたつぷり落ちている広場
 春うららさびしい広場もつ詩人
 影になり日向になった親の壁
 春のたりほんまにのたりしてすこす

川柳同友会みらい(鳥取)吉田

陽子報 寒之 純宏 美江 美どり 温子 久司 章子 美恵子 恵美代 三郎 三郎 敦子 嘉子 信子 賢子 祥昭子 郁夫 忠央 朝子 さち子 麗 仁清 尚世 ルイ子 弘風 高鷺 恵子

喜寿過ぎて趣味に生きるを感謝する
絶対にそうだと言えぬ記憶力
どんな顔原発に押す太鼓判
正解は後でわかるとＴＰＰ
生けるより生かされてるお年寄り
銀盤でクイーン華麗な独楽になる

川柳さんだ（兵庫） 堀 正和報

店員にお目が高いとのせられる
哲男

浩二
富子
眞澄
桃花
紀子
照子

忠
さめかぬ二人に夜があざ笑う

ライバルが居るから気持ちいいとする
ライバルと呼べた頃が花だった
ときめいたドラマセピアにした月日
ライバルと競った仲間今日の友
親が子と区別のつかぬ高齢化
入湯税美人になれば安いもの
コンテスト一位になった犬が居る

歳 二 子
健 一 子
キヨミ 一 子
一 一 子
一 一 子
宣 一 子
順 一 子

先生を囲み人花を散らしてゐる

ライバルがいたから今の僕がある
タラの芽の生命力がほろ苦い
アベノミクス円は下がって株上がる
キッチンでわたしたちはある日蝶になる
あれこれと選んだ末がこの夫
糊代の中でじゃじゃ馬こねる妻
心にふたカギまでかけて機を逃がす
負け組で無事に迎えた定年日
政策で選んだ票は無駄ばかり
若返り高価な薬効き目なし

光久
菜々子
雅司
ひとみ
雄太郎
茂山
恭子
俊昭
雅尚
廣子

相模部屋チャニコをやめてジンスカン
 せっかちが桜まだかと見て回る
 選びたい人が全然ない選挙
 ライバルは風も味方につけている
 とときめきを恋と見抜けぬ心電図
 残された箱に詰まっていたいたチャンス
 神さまにチャンスいたたき日日豊か
 覚悟せよ近い将来長寿税
 ブランドを着ると街へ出なくなる
 還付金あてに花見の旅予約

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

さくら咲くほんのり空気までピンク
 さくら咲いたかと他所に住む子の電話
 さようなら言わず無言で去る桜
 ありがとう桜吹雪を手の平に
 私だけの身じるしにするさくら草
 さくらはらはら恋はいつでも短くて
 友達をいっぱい持っている桜
 よもぎ摘む春一番の香り嗅ぐ
 悪い芽を摘めない愛か体罰か
 笛吹けど誰もものつて来ぬ一人
 まつり笛恋の始まる予感する
 非常用袋に笛も入れてある
 押し入れに捨てられぬ子のリコーダー
 復興の線路が笛を待っている
 鳩笛が得意一曲いかがです
 胸張って口笛吹いて古希をゆく
 口笛を吹くと夢まで飛びでそう
 責任のとれる範囲で笛を吹く
 土筆摘む指が少うし風邪をひく

聖也 野薫 武彦 紀乃 ヨシエ 好文 正和 美代子 シマ子 悦子 絹枝 婦美枝 あかり 扶美代 アヤ子 光男 ヨシ枝 雅枝 ちづる 勝弘 一歩 まつお いさお 瑠美子 シルク

この道を摘んだ気がして自問する
 摘み過ぎたつくし嫁には横向かれ
 文化の芽次次摘んで行く市長
 山椒の芽摘んでひな寿し二三枚
 ロケットで星をいっぱい摘みにゆく
 摘んだ筈の愛の新芽がのびてくる
 そして春森は笛の音水の音

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

ボーチにルーシ入れてうきうき今日だけは
 あす日曜銚子一本増えている
 咲き終えたサザンカ梅にありがとう
 良い芽まで摘まないように子の躰
 と忘れが私メモ魔になりました
 土曜でも日曜でもよい独り者
 節目なしいつもが土日何しよう
 春風に老母のくき煮が乗って来る
 忘れるな紙と鉛筆寝床にも
 鉛筆の芯なめて書くラブレター
 手拍子が涙に変わって行く軍歌
 わいわいとお寺参りと医者通い
 ひよこちゃんならぶお蘭子一年生
 弊衣破帽今は懐かし朴園下駄
 軽快な歩幅が似合う春帽子
 わいわいと卒業式に桜咲く
 すっぱりと黄砂の帽子かぶす春
 モンモンこそ春の一声待っている
 だまし絵にだまされてよし春うらら
 お揃いの帽子で燦ぐ始発駅
 あのことを忘れましようよ梅の花
 忘れものが一杯残っている故郷

信二 喜代子 紀雄 登志子 六點 龍一 弥生 あかり 寿美子 龜与子 泰子 雪菜 幸香 洋子 美也子 柳明 和子 美代子 ひとみ 純乃 野薫 宏子 葉子 章子 ヨシエ シマ子 比ろ志

事務所便り

毎月の投句締切日「十五日」の曜日に
 ご注意下さい。その日が土日祝祭日に当
 たる場合は、前倒しの金曜日が締切日
 になります。十五日が土曜なら十四日、
 日曜なら十三の金曜日が締切ります。
 後へ日にちをずらせないのは、二十七
 日(日曜の場合は二十六日)の発送日
 を厳守しているからです。去年の十月
 は十三日が日曜、十四日は祭日で、土
 曜の十二日に投函された普通便は十六
 日の火曜日に、各選者へ送付した後に
 着きました。前後の曜日休日にもどう
 かご留意下さい。
 (山岡富美子)

子沢山次が待つてるランドセル
 お陽さまに恥ずかしいから帽子着る
 銀行へちよつと寄れない目出し帽
 帽子屋の鏡ウインクしています
 大阪に春を呼び込む触れ太鼓
 ヘルメット脱いで汗拭く売げ頭
 感傷をかくしきれないバナナ帽
 習わなの上手になったもの忘れ
 土曜日を待ってた頃は稼いでた
 初夏の風麦わら帽子に蝶が舞う
 ほころびを縫う神様の赤い糸
 母米寿菩薩のような認知症
 わいわいの賑わい欲しい被災の地

五月 キヨミ 靖鬼 耕治 勝巳 正和 菜々子 かずお 見清水 奮月 朋月 祐康 美龍

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
岸 和 田 川 柳 会	18日(土) 14時締切 法螺・沈黙・ふつつ ポケット	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川 柳 ねやがわ	19日(日) 14時締切 マンガ・工夫・地下・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 京阪寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 藤 井 寺	19日(日) 14時締切 苺・飾る・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	19日(日) 13時開場 すんなり・くつろぐ・相性	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊 中 もくせい 川 柳 会	20日(月) 13時40分締切 ためらう・記念・いつか 自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曾根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さ ん だ	21日(火) 13時30分締切 毎月・ハッスル・助ける かるがる・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳クラブ わたの花	24日(金) 吟 行 根性・誘う・時代・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
川 柳 塔 すみよし	25日(土) 14時15分締切 峠・語る・怖い	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和 歌 山 三 幸 会 川 柳 会	25日(土) 12時30分開場 連休・ロボット・内気	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの 市 民 会 川 柳 会	26日(日) 14時締切 恋・油断・スタッフ・心	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	26日(日) 13時30分開場 カット・手弁当・文句たれ	開発ビル 2F ホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南 大 阪 川 柳 会	27日(月) 18時開場 仕事・ボキボキ・眩しい・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京 都 塔 の 会	27日(月) 10時30分 吟 行 ぽっかり・発・探る・当日雑感	宝ヶ池～山端平八茶屋 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松 露 川 柳 会	27日(月) 19時30分締切 靴・肩書き・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口194-2 山本正光

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

5 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	2 日(木) 14時締切 配る・鼻・命名	奈良市立中部公民館 4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城 北 川 柳 会	4 日(土) 13時開場 拝む・点滅・とことん・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川 柳 塔 ま つ え	4 日(土) 13時45分締切 影・知る・軽い・たっぷり	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
富 柳 会	4 日(土) 14時締切 得・揺れる・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL0721-25-0603 池 森子
倉 吉 川 柳 会	4 日(土) 14時締切 華やか・ぎしぎし・塗る	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 さ か い	10日(金) 13時開場 ストップ・引き出し 折句=う・な・ぎ	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
あかつき 川 柳 会	10日(金) 14時締切 倒す・命・人生・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱伏1586-14-102 森村美花
川柳大阪	11日(土) 14時締切 守る・恥・地図	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 打 吹	11日(土) 14時締切 力・消す・ガツガツ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川 柳 会	12日(日) 14時締切 作戦・訝・踏む・雑詠	八尾神社内 西郷会館3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川 柳 塔 わかやま 吟 社	12日(日) 14時10分締切 兼 題=正・あれこれ・ごみ 課題吟=外	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
西宮北口 川 柳 会	13日(月) 14時締切 鯉・習う・スピード・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川 柳 あまがさき	14日(火) 14時締切 弛む・残念・ひやり・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほ たる 川 柳 同 好 会	14日(火) 13時30分締切 クイズ・歩く 折句=と・け・い	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川 柳 塔 みちのく	18日(土) 16時開場 淡い・きっぱり・鮮やか	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯

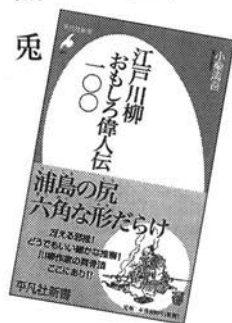
新刊紹介

『江戸川柳

おもしろ偉人伝一〇〇』

小栗清吾 著

水野黒兎



先に「はじめての江戸川柳」(平凡社新書)を著した小栗清吾氏が同じ出版社から「江戸川柳 おもしろ偉人伝一〇〇」を出版された。氏は目下塔誌上に「江戸を楽しむ」を好評連載中であり、みなさまにはすでにお馴染みの江戸川柳研究家です。著者のまえがきによれば、

この本で対象にしたのは「詠史句」あるいは「歴史句」といわれる分野です。

「歴史上の人物や出来事を詠んだ句」ですが、この「歴史」の中には、いわゆる正だけでなく、神話・伝説・俗説の類、さらには講釈・芝居・謡曲などに登場する架空の人物まで、幅広い題材を含みます

とのこと。

江戸時代の川柳作者たちの人気が対象がどんな人物だったか、皮肉屋の川柳作者たちがかかる人物だちを素直に誉めた

たえているはずもなく、遠慮会釈なくシャレのめす様を見事に解説した内容になっています。百人の偉人伝と紹介されているが、実際は九十八人と一組と一匹を可笑しがることになっています。

例えば紫式部の項では

巡礼が来ると式部は筆を置き

の紹介にはじまり、さらに

三年もいる気で式部書きかかり

石山でできた書物の柔らかさ

などの句で、説明を補充し、ページの最後には川柳作者が読んだであろう紫式部に関する短い紹介、および川柳作者が句を詠むのに参考にしたであろう文献、この場合は「源氏供養」の説明を付記するという親切的構成となっています。

取り上げられたすべての句に「類別絵入り川柳 歴史と伝説」から転載の挿絵が付けてあり、句を楽しむのに役立つようになっています。

再び著者のまえがきを引用すれば、江戸川柳は一般的に「庶民の文学」といわれているが、長屋の八つあやや熊さんが詠んだわけではなく、おそらく武士や裕福な町人など知識階級が作ったであろうとのことでもあります。

玉藻前の項では「玉藻前」は鳥羽院に寵愛された官女、の説明に始まり、文の途中には「石などを割るのに使う鉄製の大槌をなぞ「玄翁」と呼ぶのかの豆知識をも得られるしかけになっています。

さらに弘法大師の項では

弘法も一度は筆で恥をかき

の解説のみならず、

仮名は重宝だが芋には困らせ

弘法は一村おなら封じ込め

などの大師にまつわる伝説に関する川柳で一段と鮮やかに伝説を補強してあります。

第一章 女形のはじまりは日本武尊!! に始まり

第七章 家康はトラの化身だった…?

までそれぞれの章立てでも面白く、途中には中入りとして「百人一首」を材料にした川柳十八句の解説も入れてあるサービスぶりです。また句の表記はすべて現代かなづかいにしてあり、読み易く工夫されています。

平凡社新書、税抜きで八百円。

柳界展望

★川柳・明日香創刊18周年記念全国誌上大会の結果。同人成績。

準優勝 高瀬 霜石

本という灯をほくにくれた闇

準優勝 木本 朱夏

らりるれろ酔うてもつれた父の文

★第一回卑弥呼の里誌上川柳大会には45名の参加があった。同人成績。

特選 西出 楓楽

米櫃に米があふれてい

る野心

★第1回広島県川柳協会誌上大会には40名の参加。同人成績は次の通り。

大石あすなろ

公園の鳩と癒しの午後にする

☆石橋芳山氏(理事・松江市)は「川柳葦群」25号

に随想「迷いながらも」を発表。

☆木本朱夏さん(副理事

長・和歌山市)は「川柳葦群」25号に「新家完司の軌跡―句集『平成二十五年』に寄せて」を発表。

☆新家完司氏(副主幹・鳥取県)は番傘4月号り

レー放論に「個人句集雑感」を発表。

☆3月30日「せんりゅうくらぶ翔10周年記念集会」に選者として西出楓楽理事長が参加。川上大輪副主幹他2名、三重県亀山市行。

市行。

▼計 報▲

■井上勝視氏(同人・唐津市)は、3月17日逝去。行年91。通夜・告別式には仁部四郎氏・山口高明氏・坂本峰朗氏・吉富節子さんが参列。

▽新誌友紹介△

大阪市 砥石 洵子

紹介者 山本加お里

佐賀県 門井 孝

紹介者 矢倉 五月

倉吉市 松島 恭子

紹介者 竹信 照彦

岡山市 長森 正子

大阪市 甲田 靖子

紹介者 川端 一歩

大阪市 川柳塔すみよし

紹介者 宇都満知子

大阪市 橋本 典子

紹介者 古今堂蕉子

大阪市 橋本 典子

紹介者 川端 一歩

大阪市 橋本 典子

紹介者 川端 一歩

大阪市 橋本 典子

新同人紹介

岸 本

楓楽・宏章・大鯰推薦

藤井 宏造

楓楽・みつ子・美籠・光久推薦

第11回 鈴鹿市民川柳大会

日時 6月23日(日) 午前10時30分開場

会場 鈴鹿市中江島町18-28 TEL 059-388-1000

東樽(トウダル) 鈴鹿店

☆近鉄白子駅西口より北へ徒歩12分

2000円(ドリンク・昼食・句集・発表誌呈)

各題2句・締切12時・開会13時30分

「当日発表」坂倉 弘美 選

共選「残る」荒川八洲雄 選・田中五十鈴 選

共選「今日」橋本征一路 選・植野美津江 選

「自由吟A」新家 完司 選

「自由吟B」青砥たかこ 選

(☆自由吟は共選ではありません。別々の句をそれぞれの選者に提出のこと)

事前投句「気楽」葉書に2句(欠席投句拝辞)

締切 5月31日(消印有効)

〒514-2306 津市安濃町曾根588 橋倉久美子 宛

主 催 鈴鹿川柳会

編集後記

★鯉のぼり備前美作風播磨 薫風

★青葉若葉のまぶしい季節、新しいスーツ姿も初々し若者を街のあちこちで見かける。ぎこちなく鞆を抱えて、地図を眺めている。馴れない営業の途上であろうか。「がんばれ、日本の未来は君たちの肩にかかっている」とエールを贈りたい。

★今、韓国で芥川竜之介ブームだという。一九四五

年から二〇〇九年までの六十四年間に、韓国語に翻訳された日本の作家ベスト1は三浦綾子、2位は村上春樹、3位は芥川竜之介とか。1位の三浦綾子は意外な感があるが、東アジアでは稀なキリスト教国・韓国であれば肯ける。彼女は敬虔なクリスチャンだ。

★現在、本格的な「芥川竜之介全集」全八巻が刊行中らしい。韓国は、世界一の日本語学習国という。かつての敵国日本の文学を高等教育のテキストとして、『羅生門』や『蜘蛛の糸』が採用されている。

私が芥川竜之介を知ったのは小学六年生の頃、担任が読んでくれた「杜子春」だった。以来、芥川の愛読者となり、小説の舞台・洛陽は憧れの地となった。

★その中国の大気汚染が日本にも悪影響を及ぼしている。一枚五千円のマスクが売れているという。そのうちに防毒マスクをつけ、清浄な空気も買わなければ生きてゆけない時代が来ない、誰が保証できよう。

★七月号掲載の暑中広告を募集しています。川柳塔は同人・誌友の皆さま

ひとこと

「長生きしてや親父」

昨年91歳で他界した親父の兄の法事で、両親の里である徳島県池田市まで足を運びました。

体調不良で兄の葬儀に出席できなかった85歳になる親父の介助を兼ねて、長男である私が同伴することとなりました。

法事当日、普段は口数の少ない

親父が、兄の遺影に涙ながらに語りかけるその姿に、兄弟の強い絆を感じ胸が熱くなりました。

正直、親父との同伴は余り気乗りしませんでした。が、今思えば二人で色んな話ができた本心に良かったと思っています。

そしてあらためて「長生きしてや親父」と、心底から願う今日この頃です。

(長井 善純)

に支えられて今日があり喜び。せっかく誌友になつます。お一人でも多くの方のご協力をお願いいたします。本誌巻末に申込み用紙を添付しています。締切は五月二十日です。

★同人名簿が改訂されました。住所や電話番号の変更、雅号をつけられた方は事務所までお知らせください。

【五月号「水煙抄」への投句数が久しぶりに二百人を越え、編集部一同大至る場合があります。投句用紙には必ず「楷書で正しく」をお願いしたい。もちろん句箋も「楷書で正しく」。

【先輩から百田尚樹の小説が面白いと紹介された。百田尚樹は大阪出身、人氣番組「探偵ナイトスクープ」などを構成した放送作家。発表作品の中から時代小説「影法師」を読んでいる。たしかに面白

(勝)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(7月号)

地名

市都
道府
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「常識」(5月15日締切)

7月号発表

奥田みつ子 選 — 共選 — 森山 盛桜 選

B

A

B

A

地名

市都
道府
姓雅号

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌新規購読申込書

きりとりせん

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者
	〒 —	—	—
		—	—



年 年

月から半年
月から一年

5000円
9800円



該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社(電話 06-6779-3490)

振替 009804-298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

個人用

暑中見舞広告 原稿台紙

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

きりとりせん

1/9頁 1/6頁 1/3頁 2/3頁 1/2頁 1頁

(ご希望の大きさを○で囲んでください。)

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

電 話	住 所	姓・雅号
()	〒	
()		

川柳など掲載希望事項

送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201

川柳塔社

作品募集

7月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
水煙抄 (8句) 西出楓選
愛染帖 (3句) 新家完司選
檸檬抄 (2句) 奥山盛共選
一路集 (3句) 奥山盛共選
初歩教室 「誘う」 (3句) 太田昭担

8月号

檸檬抄 「拭く」
一路集 「自然」「赤い」
初歩教室 「マジック」

本社5月句会

とき 5月7日(火) 13時開場・13時40分締切
—開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし 「句会の在り方」
兼題 「流行る」
「ツアー」
「茶」
「嬉しい」
「偉大」
川上大輪選
飛永ふりこ選
北村賢子選
都倉求芽選
鴨谷瑠美子選
小島蘭幸選
会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)

本社6月句会

7日(木) 午後1時から
兼題 「徴」「吊るす」「それきり」
「図太い」「違反」

第31年度 夜市川柳募集

最終回「成長」小島蘭幸選
ハガキに3句 5月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇一三年(平成二十五年)五月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アト

大阪市天王寺区大道一四一七

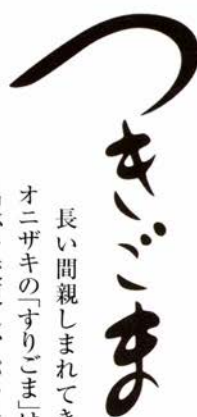
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六六七九三三九〇番

振替 〇〇九八〇一四一八九四七九番

杵つき製法の「すりごま」 オニザキの



長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。

今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>